「3年B組金八先生
伝説の教壇に立て！」
オリジナルノベルズ

「死と乙女
Tod und Mädchen」
北島行徳 著
新書判　定価924円（税込）

「怪！サクラ中学七不思議」
檜木田正史 著
新書判　定価924円（税込）

「アンソロジー
放課後の方程式」
北島行徳／黒崎薫／
長井知佳／桑原裕子 著
新書判　定価998円（税込）

シリーズ3作、
好評発売中！

風来のシレン

黄金郷アムテカに舞う花

著 大原広行
健部伸明
監修 チュンソフト

CHUN SOFT
NOVELS

「3年B組金八先生
伝説の教壇に立て！」
オリジナルノベルズ

「死と乙女
Tod und Mädchen」
北島行徳 著
新書判　定価924円（税込）

「怪！サクラ中学七不思議」
檜木田正史 著
新書判　定価924円（税込）

「アンソロジー
放課後の方程式」
北島行徳／黒崎薫／
長井知佳／桑原裕子 著
新書判　定価998円（税込）

シリーズ3作、
好評発売中！

CHUN SOFT

NOVELS

イラストレーション：長谷川薫

風来のシレン
黄金郷
アムデカに
舞う花
著 大原広行
健部伸明
監修 チュンソフト

カバー・ピンナップイラスト●長谷川薫
本文イラスト●長田馨
カバーデザイン●D3

序　幕 5
第一幕：風の流れ着く谷 7
第二幕：獄中の男たち 33
第三幕：旅は道連れ、世は…… 68
第四幕：沼地の探索行 82
第五幕：故郷への帰還 117
第六幕：黄金郷の真実 131
第七幕：ほろ苦い記憶 143
第八幕：それぞれの道 163
第九幕：山頂の廃墟都市 177
第十幕：奈落の底へ 203
第十一幕：絶望の果てに 215
第十二幕：ひとつとなる想い 228
第十三幕：クロンの加護 242
第十四幕：新たなる始まり 250
終　幕 289
あとがき 295

登場人物紹介

シレン

旅の神クロンの追い風に導かれ、諸国を漫遊する風来人。彼の旅に確固たる目的はなく、まだ見ぬ土地や冒険を求めてさすらい続けている。トレードマークは三度笠と縞合羽。

コッパ

珍しい“語りイタチ”で、人語を巧みに操る。口は少々悪いが、シレンの風来人としての素質を見抜き、よき相棒として一緒に行動している。

お竜

こばみ谷の強者たちも一目置いている、やり手のお姉さん。目潰し攻撃と礫（つぶて）投げが得意。

ペケジ

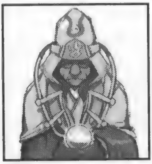
大メシ喰らいで力持ち、人情に厚くて涙もろい。ただ少々単純すぎるところもあり、よく失敗する。

座頭ケチ

指圧が得意な、自称“あんま師”。盲人だが剣の腕は立ち、今回はその力をお鷹に見込まれる。

お鷹

こばみ谷を縄張りにしている山賊集団の頭領。お竜の妹分に当たり、性格はチャキチャキの姉御肌。



ヤブメ

座頭ケチの故郷である地下水脈の村で村長をしている老婆。ケチと何らかの関係がありそうだが……。

ハッタリ

お鷹率いる山賊集団のひとりで、お鷹の右腕とも言える存在。お竜とも古いなじみである。

序幕

木の葉の切れ目から漏れる光に導かれ、見知らぬ大地へ足を延ばすと、逆風が吹きつけてきた。あまりの強さに三度笠に手をやり、目を細める。

風がようやく収まったとき、目に入ってきたのは、太陽に照らし出されて輝く渓谷だった。ついその光景に魅了され、気づくと、さっきまでくわえていた笹の葉を落としていた。

慌てて拾いあげる。

再び大気が渦巻き、友から受け継いだ縞合羽が、激しく揺れた。

「へえー。これが〝こばみ谷〟か……」

いつのまにか、語りイタチのコッパが道中袋から顔を出していた。

こばみ谷。まさしく来るものを拒否しているように感じられる。その名にも、充分納得がいった。

「そしてあれが〝伝説〟の発祥地、テーブル・マウンテンというわけだ。ふうん……」

太陽をさえぎるように、ひときわ高くそびえ立つ太い柱のような山体。頂からあふれ出る水の勢いは留まることをしらず、河となり滝となって、勇壮な水しぶきをあげていた。

「さすがのオイラも、こんなヘンテコな地形、今まで見たことないや」

頂上部分は台地で、まさしくテーブルのよう。そこへ連なる山々も同様で、そのところどころに村落を見ることができる。山々が階段状になっているのは奇妙な感じだ。昔は巨人でも住んでいたのかもしれない。

このあたりのどこかに、水と黄金の都があるという。すでに廃墟だとも、隠れ里だとも、魔物が棲むとも、住人が秘密をばらす者を皆殺しにするのだなどと、さまざまな噂が流れている。

その噂の一部でも本当だったら……

「シレン、顔がほころんでるよ」

コッパに指摘されるまでもなく、胸は高鳴っていた。旅をしていると、ときおり湧きあがるこの感覚。これを味わいたいがために、風来人になったと言っても過言ではないのだ。

「こんなところでジーッとしてても、しょうがないや」

言うなり、コッパは駆け出した。

「今日は、久しぶりに温かいメシが食えるなあ。シレンも早くしろよ！」

胃袋が軽く鳴った。自分の腹の虫とはいえ、現金なものである。

食糧の蓄えは充分だが、炊きたての銀シャリとは比べものにならない。

「あそこに見える村まで競走しようぜ。どうせ、オイラには敵わないだろうけどね」

コッパの軽口に、苦笑しながら走り出す。

陽の光を充分に受けた草木の匂いを、そよ風が運んできた。このクロンの風さえあれば、自分はどこまででも行くことができる。

ここにはある。風来人たる自分を満たしてくれる夢が。

旅の神クロンは気まぐれだが、いつも期待を裏切らない。

第一幕　風の流れ着く谷

「ハアアアアッ」

うっそうたる杉林の中、お竜は腹の底から気合をこめ、ゲイズの単眼に、小太刀を突き出した。

モンスターの断末魔。それを聞きながらも、左後ろに気配を感じた。反射的に右前方に飛びすさる。

背後で軽い地響きと鎖の軋む音。さきほどまで自分がいた場所に、アイアンヘッドの緑色の頭が投げつけられていた。相手は頭と胴体を結ぶ鎖を勢いよく回転させている。

腰の袋に入った粉を掴み、アイアンヘッドの、ただ一つの目にぶちかます。

瞬時に視力を失ったアイアンヘッドは、ところかまわず頭を振り回し始めた。そんな鈍い攻撃など、恐れるに足りない。

もう、ここは大丈夫。次は……

「コレでも、くらいやがれ！」

遠くから、旅仲間のハッタリの鋭い声がした。乱戦に巻きこまれ、いつの間にか引き離されてしまったが、ハッタリは健在だ。

反射的に耳をふさぐ。

刹那。

大きな爆発音。そこにモンスターの絶叫が混じる。

ハッタリの周囲にいたゲイズたちが、バタバタとなぎ倒された。ハッタリ得意の焙烙玉——すなわち爆弾だ。

土煙で、わずかのあいだ視界が遮られる。

右手の小太刀を構え直す。

やがて風が吹き、煙が飛ばされる。
目の前に、浮遊する鎧が見えた。緑の肩当て……ということは、セルアーマーか!?
「おりゃあっ！」
粉とは別の袋から礫を取り出し、投げつける。
一瞬セルアーマーが、体勢を崩した。
「はあああっ！」
気合一閃。
すかさず小太刀で薙ぐ。
セルアーマーの頭と胴が、逆方向に流れて地に落ちた。
新たなモンスターを求め、目を泳がせる。そして見出した敵に、手当たり次第に斬りつけていく。
「はあ、はあ、はあ……」
すでに四半刻（約三十分）も戦っている。何体倒したのか、憶えていない。
呼吸で胸と肩が揺れ、太刀筋がブレる。
混乱攻撃をしかけてくるゲイズが、まだ目の前をウロチョロしている。うかつに突進しても、袋叩きにあうのが関の山だ。
木々の軋む不吉な音。同時に、付近の杉が倒れる。焙烙玉の爆発で、根本を破壊された木々が耐えきれなくなったのだろう。
鋭い風切り音。
身体を横へひねった。
すぐ脇を、木の矢が通り抜ける。
ボウヤーが、杉の梢から狙いをつけていた。
退路も、逃げこむ場所もない。それに敵は無尽蔵ときている。これが俗に言う、モンスター・ハウスなのか？
頬を伝って、汗がこぼれた。思案をめぐらす時間もなく、アイアンヘッドが二体、左右から

迫る。どちらも頭を、ブンブンと振り回している。

背後からはモンスターの気配を感じない。ここは、さがるしかない……が、思わず踏みとどまる。そちらは崖になっていた。

アイアンヘッドが、鉄球のような頭を一斉に放った。

タイミングを見きって、跳ぶ。

その頭が二つ、地面に叩きつけられた。

着地と同時に、左手で粉を摑む。

視界のすみで、ボウヤーが再び矢を放った。

無理やり身体をねじる。ボウヤーの矢が脇腹をかすめた。皮膚を裂く鋭い痛みを感じた瞬間、もう一つの風切り音。

思わずたたらを踏む。

そのとき、足元には何もなかった。

「くっ！」

身体が宙に浮き、裾が風に舞う。

目の前の風景が、転倒していく。

手を伸ばした。

しかしそれは、空(くう)を切る。崖の縁に届かない。

死ぬ？　まさか、こんなところで？　やりたいことなんて、まだなにも、していないっていうのに！

瞼(まぶた)の裏に、過去の記憶が浮かびあがった。

最初に浮かんだのは、たくましい父の背中。幼い自分にとって最高の寝床だった。

肩車をせがんだことがある。父は一瞬難しい顔をしたが、すぐにわずかに口元をゆるめ、肩に乗せてくれた。そしてあっちといえばあっちへ、そっちといえばそっちへ、自分が望む場所に連れていってくれたものだ。

頭を撫(な)でられたときは、嬉しかった。髪がく

しゃくしゃになるのには閉口したが、父の掌（てのひら）は大きくてなにより温かかった。
成長するにしたがい、触れ合う機会は減った。父も口数の多いほうではなかった。それでもいつも自分を気にかけてくれたことは感じていた。母を幼い頃に亡くした自分にとって、父はとても大きな存在だった。
父の急死後、自分は〝風来人の元締め〟に引き取られた。いろいろとよくしてはもらったが、心にぽっかりとあいた穴は、簡単に癒えはしない。満たされない心を抱え、苦しむ日々が続いた。
〝風来の元締め〟に、ようやく一人前だと認められたころ、〝あの男〟があらわれた。信じた自分を裏切り、帰るべき家までも奪った風来人。憎んでも憎みきれない……
そのとき左腕に、衝撃がはしった。

「えっ⁉」
落下が止まった。自分の手首をしっかり握る、たくましい男の手があった。
ハッタリなのか？　一瞬そう思ったが、違っていた。
目に映ったのは三度笠。澄みきった眼差しと、その下で食いしばった白い歯が見える。なぜかその歯には、笹の葉らしきものがくわえられていた。
掴まれた部分が熱く痛い。そこから生命力が伝わってくるようだ。
そう思ったとき、強い風が谷底から吹きあげた。一気に崖の上まで引きあげられ、地面にへたりこむ。混乱した意識のまま、その男を見た。
全身を縞合羽でつつみ、腰にはカタナを差している。典型的な風来人の格好だ。飄々（ひょうひょう）としていて、表情を読むことはできなかったが、その

精悍な顔つきは、どこか〝あの男〟に似ていた。
しかし〝あの男〟であるはずがない。
「あんたは……いったい？」
相手も、真っ直ぐな視線を返してくる。
かと思うと、その風来人は目礼を済ませ、背を向けながらすらりとカタナを抜いた。身体がわずかに沈みこむ。次の瞬間、風が生まれた。
分銅のような頭を振っていたアイアンヘッドが、崩れ落ちる。
なんという早業だろう。
そこにセルアーマーが、剣を振りかぶる。
一閃。
モンスターの右腕が斬り離され、剣が地面に転がる。
強い……
その風来人が駆けぬけた後には、ただモンスターの残骸だけが残っていく。
不意に、木陰から青い物体が現れた……ゲイズだ！　風来人に眼力攻撃をしかけようと目をふくらませた。
「あぶない！」
声を発するより早く、風来人は背中に左手をまわしていた。縞合羽の中から取り出されたのは、逆三角形の防具……〝やまびこの盾〟である。
ゲイズの目が怪しく光った。その寸前、風来人はその盾をかかげていた。
発せられた光は、ゲイズ自身に跳ね返る。混乱したゲイズは、フラフラとほかのモンスターの群れへと分け入っていく。その眼力攻撃で、モンスターたちが同士討ちをはじめた。
風来人はその一角を無視し、別の群れに斬りこんでいく。迷いはなく、一撃一撃、確実に敵

を倒す。
……とお竜は、自分がただ、風来人の戦いを見守っていることに気づいた。
大きく深呼吸。もう息は、あがっていない。いける。
そのとき杉の枝に、矢を引き絞るボウヤーの姿が見えた。狙いは、あの若い風来人だ。させるかとばかりに、礫を放つ。
「ウギャッ！」
ボウヤーはバランスを失い、地面へと落下した。
そこに影が飛びかかり、止めを刺した。
「お竜さん、大丈夫でやすか⁉」
旅仲間のハッタリだった。
「ああ、なんとかね。あんたこそ無事でよかった。あたしゃ、てっきり……」
ハッタリの顔は土煙と硝煙で真っ黒になっていて、本来なら目立つ左頬の刀傷も、すっかり隠れている。藍染を着流してこざっぱりしていたはずだが、あちこち斬り裂かれて、血がにじんでいる。殴られた跡もひどく、全身ボロボロだ。それでもその長身はビシッとしていて、気力が衰えたようすはない。
「へっへっへ。こちとら、そんなにヤワじゃありませんぜ」
頼もしい相棒であった。
「焙烙玉は残ってるかい？」
モンスターが大混乱しているという得難い機会を、見過ごすわけにはいかない。
うなずきながら、ハッタリは焙烙玉に火をつけた。
「これが最後の一つでやすがね」
空に放り投げ、大きな声で告げる。
「そこのダンナ、耳をふさいでくだせえ！」

風来人はこちらを見ると、焙烙玉の弾道を見極めて跳んだ。
ハッタリの爆弾が、モンスターの群れの中心に吸いこまれていく……
轟音とともに爆風が吹きつけ、モンスターが吹き飛んでいく。
もうもうとたちこめる黒煙。
それが薄くなったあとには、放射状に転がる何体ものモンスター。意識があるものも、ほとんどは呆然としており、戦意が失われている。
すると、どこからともなく白いイタチがやってきた。
「どうだ、まいったか!」
なんとそのイタチは、二本足で立ちあがり、人間の言葉を叫んだ。
「イ、イギーッ」
モンスターの一匹が、恐怖に引きつった声をあげたかと思うと、背を向けて我先にと逃げ出した。たちまち視界から見えなくなる。
「えっへん! どんなもんだい」
白イタチは、大きく胸を張っている。
そうか。これが噂に聞く〝語りイタチ〟……。
もう何年も人里に現れていないと伝えられる、ほとんど伝説と化した存在だ。まさかこの目で見ることができようとは……
ともかく戦闘は終結した。ふところから懐紙を取り出し、小太刀の刀身を拭うと、後ろ腰にある鞘に収める。
「さすがは、お竜さんでやすな。傷ひとつねえ」
ハッタリは膝立ちで、愛用の〝矛の盾〟で身体を支えている。この攻防一体の盾があったからこそ、幾多の戦場で生き残れたのだ。
一陣の爽やかな風が杉林を駆けぬける。
風上から、カタナを収める音。

その方向には、例の風来人がいた。
その肩に、さっきの白い語りイタチが、ちょこんと乗る。
「まあ、ちょろい敵だったねえ、シレン」
シレンと呼ばれた風来人が、こちらを見つめてくる。表情はよくわからない。
「あちらさんも大きなケガはないみたいだし、早く温かいご飯を食べに行こうか？」
イタチがそう言う。
シレンという男も踵(きびす)を返し、立ち去ろうとした。
「ちょ、ちょいと待ちなよ！」
思わず声をかけると、シレンが向き直った。
尋ねてきたのは、イタチだった。
「どうしたの？」
「まだ、あたしたちは礼も言ってないのに、名乗らずに行っちまうなんて、水臭いじゃないか」
一気にまくし立てると、再びイタチが口を開いた。
「それもそうだね。オイラはコッパ！　こっちのぶっきらぼうなのは、シレンっていうんだ」
やはりそのシレンという男は口を開かない。
「よろしくね。ええと、そっちは？」
「あたしはお竜、こっちはハッタリだよ。さっきは助けてくれて、ありがとう」
脇でハッタリも頭をさげる。目は油断なく光っている。
「かまわないよ。どうせ、シレンが好きでやったことだからね」
コッパが言いきった。
勝手にやったことだから、勝手に去る……ということか。助けると称して、金品を要求する輩(やから)が多いなか、いまどき珍しい存在だ。
間違いない。このシレンのような男こそ〝お

鷹〟に必要な人材だ。

お鷹とは、お竜の妹分にして山賊のかしらである。

いまのお竜は、お鷹のために働いていた。こばみ谷の玄関口にあたる〝渓谷の宿場〟を拠点に、役に立ちそうな人材とその情報を送るのが任務だ。このあいだも、自称〝あんま師〟の座頭ケチという男を紹介したところだ。

ハッタリも、お竜の腹心だ。つきあい自体はお竜とのほうが長いのだが、ハッタリはお鷹の砦（というより、お鷹自身）を気に入って、身辺警護と称して居ついてしまった。

今回はたまたま、お竜が〝風来人の元締め〟のところまで使いに行かなければならず、その長旅を心配して、お鷹がハッタリをつけてくれた。大げさだと思わないこともなかったが、いなかったら今の修羅場は乗りきれなかったわけである。お鷹の配慮に、改めて感謝の念がこみあげてくる。

というわけでこのシレン、腕の立つところといい、欲のないところといい、是非とも味方に引きこみたい。素直に事情を告げて誘うのもいいが、まだその気にはなれなかった。もっと試して、真の実力を見極めたいという気持ちが勝(まさ)っていく……

「じゃあ、そういうことで、オイラたちはそろそろ……」

考えがまとまらぬうち、コッパが別れを告げてきた。

「待ちなってば。本当にせっかちだね。あんたのその腕を見こんで、ぜひとも頼みたいことがあるんだ」

気がつくと、そう言っていた。

「頼み？」
コッパが首をかしげる。
ハッタリも、奇妙な表情でこちらを覗きこんでいる。とはいえ、人生の裏街道を歩いてきた仲間だ。何か考えがあると察して、余計な口は、はさまない。
シレンは、あいかわらずこちらを見つめているものの、何を考えているかわからない。その眼差しに心の奥まで覗かれそうな気がして、つい早口になる。
「あ、あたしの妹が、山賊にかどわかされちまったんだよ」
シレンの眉がわずかに動いたかと思うと、距離を詰めてきた。
思わず生唾（なまつば）を呑みこむ。
「うーん、山賊ねえ……」
コッパは疑っているようだ。
額（ひたい）から汗が噴き出してくる。
このまま黙っていては、疑惑を強めてしまう。騙すときは、相手に考える暇を与えず、次々と情報を与えるべきなのだ。
「それであたしは、誰か強そうな御仁がいないか、探していたんだ。さきほどの腕前を見て、確信したよ。助けてくれるのはシレンさん、あんたしかいないってね。どうか、力を貸してほしい！」
すがりつくように、近寄る。
シレンはさほどの間もなく、確かにコクリとうなずいた。
「シレン！　まだ、ろくすっぽ話も聞いてないだろ！」
コッパが文句を言うが、シレンはどこ吹く風という感じで、わずかに微笑（ほほえ）んだ。
「はーあぁ」

コッパがため息をつく。
「ありがとう……」
その言葉は、偽りなく本心から出たものだった。
「しょうがないなあ、でも報酬はちゃんともらうからね」
そう言うコッパを、今度はシレンが、力こめて睨み返す。
「え？　まさか、今度もタダ働き？　だぁーっ、きっちり報酬もらわなくちゃ、旅なんかできないでしょ！　今は少し余裕があるとか思ってタカをくくってると、またすぐに食いつめちゃうんだからね。わかってるの、シレン、シレン！」
コッパが反論するが、シレンの眼力の強さは変わらなかった。
睨み合うこと、数瞬……
コッパはガックリと肩を落とした。

「やれやれ、シレンは一度言いだしたら聞かないもんなぁ。ところでさぁ、お竜さん。その山賊とやらの目星はついてるの？」
「ああ、居場所の見当はついてる。だからあたしが案内を……」
「えっ、ついてくる気なの？　場所だけ教えてもらえれば充分だよ」
コッパは単純に驚いていた。シレンも意外そうな顔をしている。
シレンの実力を見極めるための策略なのだから、最後まで一緒に行動しなければ意味がない。それに見くびられているのも、しゃくである。
「妹が今ごろどんな目に遭っているかと思うと、居ても立ってもいられないんだよ」
シレンを見つめ返した。
「何がなんでも、ついてくるって感じだなあ」
コッパが、あきらめたように言う。

「じゃあ、決まりだね？」
そう問い返すと、シレンは白い歯を見せた。
「しょうがない。なら、行こうか」
コッパの言葉を合図に、みな歩き出した。
そのとき、一つの疑問が頭に浮かんだ。なぜシレンは、一言もしゃべらないのだろう？
察したように、コッパがふり返った。
「シレンが無口なのは、性格だから気にしないでやってよ」

まだ陽が高いうちに杉の並木道を抜け、人々の往来でにぎわう渓谷の宿場に着いた。あのモンスターの大群との遭遇戦の後だっただけに、その平穏さはありがたかった。
「それじゃオイラたちは、ちょっと準備があるから。一刻(約二時間)後、またここで会おうよ」
宿場に着くなり、コッパはそう言って、シレンと共に去っていく。振り返りもしない。
その姿が見えなくなると、今まで黙って控えていたハッタリが、声をかけてきた。
「なんだか、妙な雲行きになってきましたなぁ」
「まあ、心配ないさ。それよりも、今のうちにお鷹のところまで、知らせに行っておくれ。馬は、隠れ家につないであるから」
「へいへい、わかりやした」
ハッタリはうなずき、去ろうとする。
と、なにかを思いだしたように立ち止まった。
「そういえば、お竜さん？」
「なんだい？」
「あのシレンとかいう風来人。マユツバの野郎と、どことなく似てやがる。俺は、気に入りやせんぜ」
久しぶりに聞いたマユツバという名前は、ズキンと胸を刺した。それは〝あの男〟の名だ。

耳にするだけで、なんともいえない切迫感と忌々(いまいま)しさがこみあげる。
「なにを、バカなことを……」
「いや、こいつは失礼しやした」
それだけ言うと、ハッタリは目線を下げて駆けて行った。
「まったく……」
確かに、通りすがりに危ないところを助けてくれたのは一緒だ。違うのは、その後である。
〝あの男〟はにこやかな笑顔を浮かべ、言葉巧みに近寄ってきた。後から思えば、前々から自分に近づく機会を窺(うかが)っていたのだろう。
シレンは無愛想であり、詳しい事情も告げずとも協力を約束してくれた。報酬もいらないとは、お人好しもいいところだ。そんなことを考えていると、なんだか心苦しくなってくる。最初から正直に、包み隠さず語って誘ったほうがよかったのだろうか？
しかしあのとき目に映ったシレンは、まさに風そのものだった。風は、いつ何がきっかけで吹く方向を変えぬともかぎらない。風来人であるという事実そのものが、相手を信頼しきることに二の足を踏ませていた。「無愛想だが情に厚い」というのもまた、欺瞞(ぎまん)のための仮面でないとは、言いきれないのだから。
シレンにした話は口からデマカセだが、かといって完全なウソというわけでもない。自分の妹分であるお鷹の前に、連れていくことには変わりはないのだから。
お鷹は、直接その目で確かめてみないと、気が済まない性分だ。砦でシレンの腕を試してみるのは間違いない。一番の腕利きのハッタリが、おそらくシレンの相手をすることになるだろう。自分はそれまでの道中で、しっかりとシレ

ンの器量を見定めるのだ。砦で不要ないさかいになっても、自分が仲介すれば、すべて丸く収める自信があった。

そういう結論にたどり着くと、心が少し落ち着いてくる。なんでさっきからこんなに悩んでいるのだろう？　悩むより足と手を動かすのが、自分の信条だったはずだ。

シレンの去った方角を一瞥すると、頭を振ってモヤモヤした考えを追い払う。

自分も、さっさと道中の仕度を整えよう。

一刻後、約束どおりシレンとコッパが戻ってきた。

「おまたせー、お竜さん。あれ、ハッタリさんは？」

コッパが気楽に話しかけてきた。

「ハッタリは、医者にあずけてきたよ。ここに来て傷がうずきだしたんでね」

「そうか……じゃあ、しかたないなあ」

コッパは、あっさりと引きさがった。

シレンはといえば、今までの古いものの他に、新しい道中袋をかかえている。

「それは、なんだい？」

指さすと、コッパが答えた。

「ああ、これね。食糧を入れてあるんだ」

「そうかい」

それにしては、大きすぎる気もするが……

後ろから、荷車を曳く音が聞こえてきた。

「お待たせしました」

車屋だ。大八車を使って荷物を運ぶのを生業としている、年かさと若い者のふたり組。きっと師弟関係にあるのだろう。

「じゃあ、よろしく！」

コッパが勢いよく答え、うながしてきた。

「お竜さんも早く乗って、さっそく出発するよ！」
シレンが、二つの道中袋を大八車に結びつけて、ひょいとその荷台に乗った。
躊躇していると、コッパが説明する。
「これだったら、いざというときでも戦えるからさ」
馬でもなく、駕籠でもなく、大八車とは……
食糧が多いのも、このふたりの分か。
「なるほどね。わかったよ」
そう言って、その上に乗りこむ。
「それじゃ、出しますよ」
年かさの車屋が声をあげた。
「やっちゃって！」
コッパの声。
走り出した大八車は、ひどく揺れてたまらない。

その日は無事に暮れた。
翌日も好天で、車屋たちの足取りは軽い。暖かな風が身体を吹き抜け、爽快だ。
見あげれば、すでに太陽は中空にある。この調子でいけば、明日のうちには、お鷹のいる砦に着くのではないだろうか。
そんなことを思っていると……
「おわぁあああああ！」
大八車が急停止した。
「ひぇぇぇぇぇぇ、お助け！」
車屋は、叫び声をあげながら、後方へと逃げ出した。
見れば、車屋たちの足元に矢が突き刺さっている。
素早く大八車から飛び降り、ボウヤーの姿を探した。

あの梢の上か！
「おりゃあっ！」
狙い違わず礫が当たり、敵は真っ逆さまに転落する。
「おお、お竜さん、やるぅ！」
いつのまにか、シレンの道中袋から抜け出したらしいコッパが、大げさに誉めてくる。
まんざらでもないと思っていたところ、あちらこちらの杉林の樹上や下生えから、ボウヤーが次々と姿を見せた。
自分も杉林に駆けこみ、木を背にする。
「や、や、やばーい！」
コッパは、言うなり大八車の陰に逃げこんだ。
刹那、何本もの矢が放たれた。
シレンは大八車を盾に身を防いだ。ひとしきり矢の雨が止むと、コッパが、そのシレンの懐に飛びこんだ。シレンは大八車から素早く道中袋を外し、身を護りながら突進した。その先には、最初に倒したボウヤーが転がっている。
その援護をしようと、礫をまとめて手に取った。一投ごとに、シレンを狙える位置にいるボウヤーを、確実に仕留める。
シレンは転がっているボウヤーから弓と矢筒を拾うと、杉林に入っていく。
あらためてボウヤーの位置を確認し、礫を握る。
木々の間から次々と矢が飛び出し、ボウヤーに吸いこまれていく。発射地点はそのつど違うので、シレンは絶えず場所を移動して射っているのだろう。その腕前は、まさしく必中。自分と同じく〝百発百中の腕輪〟を身につけているかもしれない。
負けてはいられない！　そう思って再び礫を投げようとした瞬間……

大地を震わせる地響きがした。街道のど真んなかに、いつの間にかオヤジ戦車が出現していた。付近には切りたった崖がある。あそこから飛び降りてきたのか？

妙に偉そうにヒゲを生やしたオヤジ戦車は、シレンがいるあたりに砲身を向けた。砲身が膨れあがったかと思うと、弾丸が勢いよく飛ぶ。すでにシレンは飛びのいて別の木の裏に移動していた。砲弾は、シレンがたった今いたばかりの杉の幹で炸裂し、その木がメリメリと音をたてて倒れていく。

オヤジ戦車の登場に勢いづいたボウヤーが、シレンに向かって再び矢を放ちはじめた。間断ない矢の雨が、シレンの逃げる方向を限定していく。

オヤジ戦車は次弾をこめ、シレンを探す。その周りに、ボウヤーが集結していく。

「シレン、危ない！」

コッパの叫び。

オヤジ戦車はそれに反応し、砲身の向きを変える。

ふと、無数の矢が突き刺さって転がっている大八車が、目に入った。大八車に向かって駆け出し、オヤジ戦車に向かって全力で押し出す。

オヤジ戦車の発砲の瞬間、大八車は狙いどおり、車輪を石に乗りあげ、横転した。

砲撃は、まともに大八車の床板に当たった。爆風が広がる。オヤジ戦車のいたあたりは爆煙で覆われ、何も見えない。静寂がおとずれ、気配が感じられない。

仕留めたか？

煙が晴れてくると、オヤジ戦車の周りにいたボウヤーは、みな倒れていた。そしてオヤジ戦車は……

真っ赤になって怒り、頭からシュウシュウと煙を立ち上らせていた。なんとガンコ戦車を飛び越えて一気に二段階レベルアップし、イッテツ戦車になっていた！

そのイッテツ戦車の後背に、風来人の姿があった。風に縞合羽をなびかせているその若い男は、まぎれもなくシレンである。

シレンは懐からなにやら杖を取り出し、振った。それに対応して、イッテツ戦車が砲身を向ける。そして砲身を膨らませて……

轟音と爆発や、それに付随する恐るべき破壊を予想して、身の毛がよだった。ところが、イッテツ戦車の砲身からは、貧弱な煙しか出なかった。とすると、シレンがいま振ったのは〝封印の杖〟か!?

あきらめたイッテツ戦車は、肉弾戦を挑もうと、シレンのほうに前進をはじめる。

シレンは、矢を一発ずつ放ちながら、一歩一歩後退していく。しかし、その距離は徐々に詰められている。

「これでも喰らいな！」

袋の中から、ありったけの礫を握りこみ、続けざまに投げこんだ。礫と矢によって痛めつけられたイッテツ戦車は、苦痛と怒りとでうめいている。何発目かの礫を放ったとき、ようやくイッテツ戦車がシレンの目の前に辿り着いた。

シレンがカタナに手をかける。

刀身がきらめいた。

イッテツ戦車の断末魔が、あたりに響きわたった。戦車の進行は、ピタリと停止する。

杉林のあちこちから、怯えた叫びが聞こえた。親玉であるイッテツ戦車の敗北を知ったボウヤーの足音が、次々と遠ざかっていく。

カタナを鞘にしまう音がした。シレンの目は

「やるな」というように、こちらを見つめている。「あんたもね」と、同じように視線で返すのが、精一杯だった。

「さすがはシレン。お竜さんもスゴいねえ！」

言いながら、コッパが木の上からするすると降りてくる。

その呑気な声に、なんだか拍子抜けした。すると、少し離れた茂みから、ふたりの車屋が這い出てくる。

「大丈夫かい？」

駆け寄って声をかける。

「あ、はははは、オレは大丈夫なんだけどよ……」

若い車屋が、震えながら言った。

「わ、わしらの大八が……」

年配の車屋が、啞然としていた。その視線の先には、オヤジ戦車の砲撃をまともに受けて、砕け散った大八車があった。

「これはいくらなんでも、弁償しなきゃねえ……」

コッパは唸りながらも、軽く言った。

とっさの判断だったとはいえ、思わず唇を嚙む。

「大八車もなくなっちゃったし、もうここまででいいよ」

コッパの言葉に、シレンがギタンの詰まった袋を二つ取りだし、年かさの車屋へ手渡した。

車屋は、我に返ったようにその重さを確かめている。

「これじゃ……多すぎるんじゃありませんか？」

年配の車屋は、戸惑っていた。

「大八車を壊しちゃったからね。多いのはその分と、危険手当だよ」

コッパが言うと、ふたりの車屋の顔色が明る

くなった。

「あ、ありがとうございます」

若いほうが深々と礼をした。もう震えてはいない。

ふたりの車屋は、何度も頭をさげながら、宿場町へと帰っていった。

「それじゃ、気をつけてね！」

コッパがその背に大きく手を振る。

自分も一緒に、振っていた。

コッパが斥候（せっこう）を務め、どんどん森の中へ分け入る。

その後を、ぴたりとシレンが追う。

心地いい山道の陽射しも強くなる。そう感じたとき、風のかたまりが身体を通り過ぎた。そこはもう砦が一望できる開けた場所だった。

お鷹の砦は、至るところに柵が設けられ、歩哨（ほしょう）が立っている。この警戒厳しい砦を前に、シレンはどうするつもりだろう？

これまでの戦いで、腕は存分に確かめた。だがその腕が通用するのも、白兵戦に限られるだろう。砦という施設を、どう攻略する？　まあ、お手並み拝見……

といったところだが、実際には「隙を見つけて忍びこむ」というのが定石だ。勝手知ったる砦であり、シレンを適切な場所に誘導できるのは自分しかいない。いざとなったら、囮役（おとりやく）を買って出たっていい。

そしてそのシレンの侵入は、お鷹たちにとっても、よい非常訓練になるだろう。あとは適当なところで真実を明かして、互いに血を見る前に、自分が争いを止めればいいのだから。遭遇戦でいきなり刃傷沙汰（にんじょうざた）にならぬよう、ハッタリにお鷹宛の文（ふみ）を持たせてある。お鷹のことだか

ら、いろんな意味で歓迎の準備をしているだろうし。
ともかくシレンの出方を見て、こちらは臨機応変に対応しよう。
先ほどまで砦を観察していたシレンとコッパは、道中袋から携帯食を取り出した。シレンは自分でもおにぎりを頬張りながら、こちらに一つ差し出してくる。
「あ、ありがとう」
いちおう受け取ってはみたが、唐突なことに、どうしていいかわからない。
「腹が減っては、戦はできない……ってね」
そう言うコッパに、シレンは干し肉を渡した。
「うひょー」
コッパは食欲の権化のごとく、それにかぶりつく。シレンも瞬く間に一つ目のおにぎりをたいらげ、二つ目に手を伸ばしている。
それを見ているうち……こちらの腹の虫が、つられて鳴いた。
「う……あ、あはははは」
コッパがシレンと目を合わせて笑う。
「な、なんだよ……もう。あたしも食えばいいんだろ、食えば……」
恥ずかしいやら腹が立つやらで、自分の笹の包みを開けて、負けじとかぶりつく。冷たくて少し固いが、確かに腹がすいた旅人にとっては、かけがえのない糧食だ。
喉につかえないよう、腰の竹筒から水を飲んで流しこむと……とたんに頭がクラクラしてきた。
「効き目はどうかな?」
そんなコッパの声が……したような気がした。睡魔が猛然と襲ってきた。
シレンのほうに手を伸ばそうとするが、距離

感がつかめない。はるか遠いところにいるような感じだ。そのシレンはと言えば、気にしたようすもなく、食事に集中している。これは、どういうことだろう？

「あんたたち……まさか」

騙された？　このシレンも〝あの男〟と同じ穴のムジナだったのか？

今まで不審なようすは、ちっとも見せなかった。今度こそ自分の勘は、正しいと思っていた。しかしやはり自分は、人を見る目がなかったということなのか？

目頭が熱くなる。悔しい。せめて、せめて一矢報いて……

腰の袋から礫を取り出そうとするが、腕に力が入らない。掌から取りこぼしてしまう。

「そんなに心配しないでも大丈夫だって」

声は既に遠かった。

シレンの横顔。ゆっくりと目を閉じていく。なんだかそれは奇妙にも苦しげで……

最後の力を振り絞り、恨み言の一つでも口にしようとした。

「シ……レン……」

目の前が真っ白になり、何もわからなくなった。

水滴だけが闇に響いている。高いところにある、通気口から漏れる月の光だけが、唯一のあかりだった。

部屋には自分ひとりしかいない。戸は固く閉ざされ、見張りが立っている。ときおり遠くのほうから、男の高笑いが聞こえてきた。そのたび怒りがわきあがった。

やがて戸が叩かれ、食事を持った男が入ってきた。膳が床に置かれたが、食欲などない。

「お竜のあねご。そろそろお覚悟を決めたら、どうですかい？」
冗談ではない。答える気にすらなれない。
「みんな今じゃ、マユツバ親分のやりかたに賛同してますぜ」
その名が出たとたん、ついかつての部下を睨みつけていた。
「おお、怖い怖い……早く決心なさったほうが、身のためですよ」
それだけ言うと、男は逃げ出すように出ていった。
悔しい。それでも涙は出なかった。
「あたしが、このまま引き下がるとでも思っているのかい」
ここから脱出するのが先決だ。しかしそのためには、体力をつけなくてはならない。
箸を手にとり、屈辱を押し殺しながら、かっこむ。それを、うまいと感じたことにまで腹が立つ。あとは涙が流れ、視界がかすんで……

頬のあたりに水滴が落ちたのを感じて、はっとして目を覚ます。
こめかみが脈打ち、頭痛がする。だがその痛みは、もうろうとした意識をはっきりさせてくれた。
あたりの光景に、徐々に目の焦点が合っていく。空には、今にも満ちようとする月が浮かんでいた。顔の前には、露に濡れた尖った葉があり、そこから雫が滴り落ちた。
ハッとして身体を起こす。あれは夢だったのか……
頭を振り、過去の記憶を吹き飛ばす。すると同時に、気絶する寸前のことを思い出した。
「シレン！」

あたりを見回すが、誰も居ない。ここは最後に憶えている場所に程近い。毛布をかけられ、木陰に横たえられていた。
ふと、自分の道中袋に挟まっている手紙が見えた。
開けるとなかは、自由闊達な字でこう綴られていた。

『さっきの〝特製おにぎり〟には、
睡眠草をしこんでおいた。
すまないが、危険な目に遭わせたく
なかったからだ。
必ず妹さんを連れて帰ってくる。
だからここで待っていてくれ。
シレン』

読みながら、唇をかみしめていた。思わず立ちあがって、お鷹の砦のほうを眺めた。
夜なので篝火が灯されていたが、その数は異様に多く、しかも動き回っていた。曲者に対する捕り物だとするなら、シレンはすでに砦に潜入し、それが騒ぎになっているのだ。
爆発音が轟いた。しばし思考力を奪われたが、すぐに背筋に震えがはしった。
シレンはたったひとりと一匹で、本気でお鷹の砦を攻略するつもりなのだ。しかも忍びこむというより、これは正面突破に近い。なんて無謀なマネを！　どうして一言、相談してくれなかったのだ！
むろん、そんな計画を聞かされたら必死で止めたわけだが……それがわかっていて、もしかして薬を盛ったのか？　なんというクソ度胸だろう。
再び爆発音。どこから火薬なんて持ち出した

んだ？　ハッタリが対応しているのか？
あの戦闘力が、可愛い妹分やその部下に対して、思いのままに発揮されたら……
「お鷹、無事でいておくれよ」
口から、呟きが漏れていた。取るものも取りあえず、砦に向かって走り出す。
腕試しをするつもりが、甘すぎた。ここまで徹底的にやるとは……。もしお鷹に万が一のことがあったら、シレンを許しはしない。しかしそれ以上に、自分自身が許せなかった。あの風を解き放ったのは、このお竜なのだから。

第二幕　獄中の男たち

　ペケジは牢の格子を摑み、力をこめてゆすった。

「うおおおおおー」

　ビクともしなかった。

　おかしいと思って何度か軽く叩いてみると、木でできた格子は、内側を鋼で強化してあるようだ。いくら力にものを言わせても、これでは太刀打ちできない。そう悟ると、思わずため息が出た。

「はあぁ……」

　思い浮かぶのは、いとしいあねご〝お鷹〟の顔だけである。

「あねごぉ！　ここから出してくれよぉ！　お願いだよぉ！」

　ありったけの声を出した。

「うるせえぞ。ちっとは、おとなしくしやがれ！」

　返ってきたのは、牢番の野太い声だ。

　ペケジには、閉じこめられたという事実より、それを〝お鷹〟が命じたということのほうが、応えたのである。

　いつのまにか目の前に牢番が立っていた。

「メシの時間だ。さっさと後ろにさがれ！」

　ご飯が食べられるのか……そう思うと、少しは元気が出てきた。

　言われたようにすると、誰かにぶつかりそうになる。そういえば、もうひとりの男が、一緒の牢にいたんだったっけ。

　牢番が、くぐり戸から二つの膳を押しこんで

きた。ご飯は、たった一杯しかない。あとは、胡瓜入りの味噌汁と蕪の糠味噌漬けだけ。

「これじゃ、ぜんぜん足りないよ！」

「なんだと、こら!!　おまえさっき、どんだけ食い荒らしたと思ってんだ!?」

牢番の怒鳴り声が返ってきた。

「どれだけって……あれ？　遠慮してたのバレてた？　だったら、もっと食っとけばよかったな、あははは……」

言いながらも、腹が鳴った。いけない。このままでは、飢え死にしてしまう。

牢番の目は、なぜか怒っている。

「おまえのせいでな。あんだけあった茄子が、みんななくなっちまったんだ！　おかげで、好物のシギ焼きも食えねえし、粕漬けのしこみもできねえだろが、こんちくしょう！」

牢番は、乱暴にくぐり戸を閉めた。

「そ、そんなぁ……」

「まったく〝はらぺこペケジ〟とは、よく言ったもんだ……」

そんなことをつぶやきながら、牢番は行ってしまった。

「はーあぁ」

気を取り直し、箸に手をつけたものの、三口でなくなってしまう。

ふと見ると、もう一つの膳には、まったく手がつけられていない。思わずよだれが、こみあげてくる。とはいえ、これはこの牢にいる別の人のものである……

「ペケジさんと、おっしゃったかね？」

不意に、その男から声をかけられた。

「えっ？　う、うん」

ドキドキしながら、首を回す。

男は背を丸め、あぐらをかいていた。暗くて表情まではわからない。確か名前は……そうだ、座頭ケチだ。

「ケチさん……食べないの？」

「あいにく、あっしは食欲がありやせん。ペケジのダンナ。よろしかったら、あっしの分まで、召しあがっていただけると、ありがてえんでやすが」

それはまるで、天からの声だった。

「ほ、ほんとに？　いいの？」

喉がゴクリと鳴った。

「遠慮なぞしないで。さあ、おあがんなさい。残すなんて、もったいねえでやすから」

ケチの右手は、顎の無精ひげにふれていた。

「た、助かったぁ！」

すぐに膳にあった飯と蕪をかっこみ、味噌汁を具の胡瓜(きゅうり)ごとすする。やはり、三口しか保(も)たなかった。いつもなら、ここでおかわりができたのに……

空になった二つの膳を見つめていると悲しくなったが、腹は少し落ち着いた。

「ごちそうさまー」

「どういたしやして」

ケチは目を細めて、少し笑ったようだった。その目は、ずっと閉じられたままである。

今まで気づかなかったが、ケチの赤い外套(がいとう)はボロボロだ。だれも繕ってくれる人がいないのか？

そういえば凄腕(すごうで)の〝あんま師〟が、お膳のところにやって来たと聞いていた。だとすればそれが、この座頭ケチなのだろう。

「ケチさんは、どうして牢なんかへ？」

「へへへ、『部下にならねえか』ってお誘いを、断ったんでね」

「ええっ、どうして？」
お鷹の願いを聞かない人間がいるなんて、信じられなかった。
「あっしは、独り旅をしていたほうが性に合ってやすから」
「そうなんだ……」
独り旅なんか辛いことしかないのに……変わった人だ。
「あっしなんかを気づかってくれて、かたじけねえ」
ケチが軽く頭をさげた。
「いや、そんな……」
なんだか照れくさくて、頭を掻く。
「そういうダンナは、またどうして牢へ？」
ケチの質問で、また悲しくなってきた。そうだ、自分はお鷹に見捨てられたんだ……
「辛いことは、ひとりで溜めこむもんじゃありやせんぜ、ペケジのダンナ。こんなところで一緒になったのも、なにかのご縁。話したいことがあれば、この座頭ケチ、喜んでお相手いたしやす」
その穏やかな声を聞いていると、ついホロリとなってしまった。
「あ、ありがとう……ケチさん」
でも、何から？　深く考えてもうまくいかないので、思いつくまま話すことにした。
「ええと……オレはもともと、独り旅をしていたんだ。アニキを捜して」
「捜して……でやすかい？」
「うん。生き別れでさ、手がかりもロクにないんだ。でも、会えばきっとわかる。なんたって、オレのアニキだからね」
「そりゃ……運命というヤツでやすなあ」

言われてみれば、何だかんだと、自分は何度も運命の出会いをしている気がする。きっとそういう星の巡り合わせなのだろう。
「それでいつだったか、オレのことを好きだって言ってくれる、女の人が現れて」
「ははあ。それはそれは、うらやましいかぎりで」
ケチの反応が照れくさくて、つい右手で鼻の下をこする。
「すぐに所帯をもって、店をやろうって話になってさ。でもお金はそんなになかったから、あちこちから借金して、かき集めたんだ」
「そりゃ、一大決心をしなさった」
そう。そこまでは、よかったのだけれど……
「そのお金を預けたら、その子は急に、どっかに行っちゃったんだ。そのときはオレも、メシを食うのを忘れてまで捜したんだけどね」
「それはまた……気の毒な話で」
「うん。でも本当に大変だったのは、それからだよ。返すお金なんかないのに『おまえが、判を押したんだろう！』って、毎日のように借金取りが押しよせてきて……どうしようもなくなって逃げたんだ」
だんだんと目頭が熱くなった。
「そうだったんでやすか」
ケチが嘆息した。こういう話をしても、自分をバカにしないケチが、無性にいい人に思えてきた。
「行く宛もないから、山に籠もったんだけど、ある日とうとう力つきて倒れちゃって……それで気づいたら、ここにいたんだよ」
「ほう。それはまた、どういったわけで？」
「それは……」
まさしく運命の出逢いだった。

「あとから聞いたんだけど、倒れたところの近くで、お鷹のあねごが狩りをしていたんだ。それでオレを見つけて、ここまで運んでくれたんだよ」

そう。初めてお鷹の顔を見たとき、驚きのあまり固まってしまった。動きやすそうな服に包まれた、ぬけるように白い肌。印象的なくりっとした大きな瞳……

ずっと微笑みを投げかけてくれたし、なによりも自分を助けたのは、「当たり前のことだよ」と言いきってくれたのが嬉しかった。

「ほんとにあねごは命の恩人だよ。オレにとっては、天女そのものなんだ！」

「な、なるほど」

「それだけじゃない。あねごは『オレの力がほしい』って言ってくれたんだ！」

思い出すだけで、胸が高鳴る。持っているお金じゃなくて、自分自身のことを必要だなんて言ってくれた人は、おっかさん以外にはいなかった。

「だからオレは〝まっとうな山賊〟として生きようと、決意したんだよ。もう、この人についていくしかない！」

思わず熱く拳を握りしめた。

「なるほど、そういうイキサツだったんでやすか」

ケチは、しきりに感心している。

「この気持ち、あねごにもわかってほしくてさ。ふたりっきりになったとき、用意しておいたかんざしを渡したんだ」

「それはまたペケジのダンナ……男でやすな」

「あははは」

なんだか、顔から火が出そうだ。

「そ、それでさ、オレ、あねごがそれを挿して

くれるのを、ずっと待ってたんだけど……いつまで経ってもしてくれなくて。理由を訊きたかったけど、機会もなかなか訪れないし……」
モジモジしていると、ケチは催促もせず、静かに次の言葉を待っているようだ。聞き上手とは、こういうことを言うのかもしれない。つい安心して、先を続けてしまう。
「そのうち、やたらと腹が減ったから夢中で食べていたら、みんながオレを止めるんだよ。それを振り払っているうちに、誰かをケガさせちゃったらしくて……それで、ここへ」
お鷹に対する想いと空腹で、どうしていいかわからなくなったんだ。
「ダンナ……そう落ちこむことなんてありやせんぜ。きっと誤解は解けやす」
こんな温かい言葉をかけてくれるなんて、お鷹に続いてふたり目だ！ それにここまで深く話ができたのは、初めてと言っていい。
「う、うん……ありがとう。ケチさんが優しい人で、ほんとよかった」
ケチは、ただ微笑んで頷いていた。
翌日、ペケジはケチの指圧を受けていた。もまれているうち全身が温かくなり、すごく気持ちいい。春の陽射しのなかにいるようで、ここが牢の中というのも忘れて、うたた寝しそうだった。
とそのとき、外が騒がしくなった。
「こんな汚ねえところに、わざわざおみ足をお運びいただかなくても」
いけすかない、あの牢番の声だ。なにやら恐縮しているようである。
「よい、入る！」
その歯切れよく透き通った声は……

うおおおおおおおおおおおお！　間違いない、お鷹だ！
気がつくと身体が勝手に動き、格子にとりついていた。その瞬間、脳天をぶん殴られたような衝撃がはしった。
うがあああああああああ！　いつもは若武者のような動きやすい格好をしているのに、なんと今日に限って桃色の振袖である！
あねご！　ぺ、ぺケジは、惚れ直しました……
「ぺケジ、元気だった？」
お鷹は、いつもと変わらずニッコリ笑って、優しく声をかけてくれる。
「は、はい、あねご……よくお似合いで」
感動のあまり、声が震えて、うまく言葉にならない。
「そうか？　まあ、たまにはこういう格好をするのも悪くない。みなも喜んでくれるしな」
お鷹はからからと笑う。その声を聞いているだけで、幸せだった。
「あ、あ、あねご……それは」
しかも髪に挿しているのは、あのかんざしじゃないですか！
「ああ、せっかくだからつけてみた。どうだ、ぺケジ？」
お鷹の力強い瞳が優しくなる。
たまらず、つい駆け寄ってしまうと……
「やっと、オレの気持ちをわかって……あでっ」
頭を思いきりぶつけた。
なんでこんなところに壁が……って、ここは牢屋だった。あまりの嬉しさに我を忘れていたみたい。
「ははは、あいかわらずぺケジはおもしろいな」
「あはっ、あはっ……あっはっはっはっ」
お鷹の弾(はじ)けるような笑顔に、つられて笑って

いた。
と……
「そこまでで、ございます」
お鷹の脇から、いきなり長老が顔を出した。妖怪かと思った。あやうく腰をぬかすところだった。
「かたいこと言うな、じい」
お鷹が眉根を寄せた。その表情も、可憐すぎる。
「いいえ、お鷹さま。この点だけはハッキリさせておかねばなりません」
長老がギロリと睨みつけてきた。なんだか雲行きが怪しい。
「よいか、ペケジ。お鷹さまはわれらの首領であり、みなの憧れでもある。配下のなかでも新参のおまえばかり、ひいきにするわけにはいかんのだ」
意味が分からなかった。つまり長老は、自分の邪魔しているのか？　確かにお鷹の父親代わりのような人であるから、気になるのもわかるけど。
「じい。慕ってくれる者をいたわって、なにが悪いのじゃ？」
お鷹が怒っているのが、なによりも嬉しかった。
しかし長老のほうも、引くようすはない。
「お鷹さま、若者は誤解しやすいもの。そのお優しさが仇（あだ）となることもあります。ペケジだけを特別あつかいするのは、お控えくだされ」
なんという横暴な言いぐさだろう！
「で、でも」
あねご、ひるむな。がんばれ！　拳をきつく握って力を送る。
「だいたいですな、お鷹さまは無防備すぎます

ぞ。男衆のなかで育ったせいですかな。まったく嘆かわしい限りです。それもこれも、それがしの教育が至らなかったばかりに……ううっ」
長老は、ふところからいきなり懐紙を取り出し、洟をかんだ。
お鷹が、大きなため息をつく。
「ふう。わかった、わかったよ、じい。さて……と」
お鷹の視線が、自分を通り過ぎて後ろに行ったような気がする……
「ケチさんは、まだあたいの配下になる気はないの？」
え？　自分のことは、もう解決済みなんですか？
「…………」
ケチは何も答えない。
お鷹のこめかみがピクピクしはじめた。これはヤバい。キレる直前のしるしだ。
そのとき、外からでかい声がした。
「お、おかしらは、こちらでやすか！」
このしわがれ声は……ハッタリだ！　ハッタリは、荒い息で駆けこんできたかと思うと、お鷹に手紙を差し出した。
あれ？　ふだんのハッタリは藍染を着流しているのだが、今日は妙に薄汚れている。どうしたのだろう。まあ、いつものスカした感じは好きではないから、今日くらいのほうがいい。
「お竜さんから、急ぎの知らせでやす」
「ねえさんから？」
お鷹はすばやく封を切り、それを読みはじめた。
「なんだって？　気に入った男がいるから推薦したい？　ねえさん自ら、連れてくる？」
お鷹の顔が、見る間に真っ赤になっていく。

「おかしい。こんなこと、今まで一度もなかったのに……」

そういえば確かにそうだった。今までだったら、使いの者に便りを持たせるだけで、済ませていたような気がする。じっさい、ケチのときもそうだった。

「よほどの腕の持ち主なんだね？」

怒りを押し殺してお鷹が言う。

「へ、へい。俺もこの二つの目で確かめやしたが相当な使い手で、並み居るモンスターをバッタバッタと……」

「そうか」

お鷹の口からつぶやきが漏れ、全身が震えている。

ハッタリが、続けた。その目には、なぜだか禍々しい光が宿っていた。

「あの腕……味方になろうというなら、まあそれでいいのかもしれやせんが、もし敵に回ろうものなら……」

お鷹は、最後まで言わせなかった。

「じい、歓迎の準備だ！」

「はっ」

「すぐ腕利きの者を召集せよ。警戒も怠るな。その腕前、とくと見てやろうじゃないか」

抑揚のないお鷹の声。思わずゾッとした。

「は？　……はっ、直ちに」

長老は即座に応じ、駆け出していく。

「ハッタリ、よく知らせてくれたね。今日はゆっくり休むといい」

「へ、へい」

ハッタリはすっかり畏まって、長い背を深々と折った。

お鷹は、まだ震えたままだ。なんとか勇気を奮いおこして、声をかけようとすると……

「ペケジ、明日にでも出してあげるからね」
お鷹は急に優しい声になって、またニッコリと笑う。震えは完全に止まり、怒りもどこかにいってしまったようだ。むしろ、戦いに向けてウキウキしているという感じだ。
「ハッタリ、いくよ！」
「へい！」
お鷹は、香しい匂いだけを残して、去っていった。このとき初めて、なんだかお鷹の笑顔が怖いと思った。

夕食後、すぐに横になった。浮かんでくるのは、お鷹のことばかり。
もうすぐ出してもらえる。でもお鷹が、急に遠い存在になったような気がする……
ドッゴ―――――ン！
不意に、鼓膜を震わす、爆発音が轟いた。
牢内が振動し、思わず転げそうになる。
「い、いったいなに？」
つい立ちあがる。
外から怒号が聞こえてきた。
「おまえらは、あっちを探れ！」
「わかりやした！」
「俺たちはこっちだ、ついてこい！」
「おう！」
ドタドタといくつもの足音が聞こえ、遠ざかっていく。
「どうかしたの!?」
気になって大声を出すが、牢番の反応はない。
それからまもなくして、馬の嘶きがした。
「なにが起きたんでしょうねえ」
ケチが、独り言のようにつぶやく。
「そうだね……おーい、外のようすは、どうなってるの!?」

ガンガンと格子を叩きながら、再び声を張りあげたが返事はない。いないのかな？
もう一回呼びかけようとしたとき、再び轟音が鳴り響いた。今度は身構えていたので大丈夫だったが、外はいっそう騒然となった。
「ど、どうなってるんだよ！　誰かいないの！」
返事の代わりに、連続して巨大な炸裂音がする。
続いて怒鳴り声が飛び交った。
「敵襲だ！　敵が忍びこんだ！」
「どこだ？」
「仲間に紛れこんでる」
あちらこちらで、刃を交える音がしはじめた。
なんか、すごくやばそう……
「あ、あねごは無事なの？」
四度目の爆音。
「小頭のもとに、まとまって行動しろ！」
「知らない顔のヤツは斬れ！」
「止めろ！　俺たちは味方だ！」
「わかるもんか!!」
「う、うわあああ！　キサマらあ。こうなったら……」
外の混乱は、どんどん広まっている。
お鷹はどうしてる？　早く確かめないと。
「っせい！」
格子に体当たりをかますが、鋼で強化されているせいで、軋んだだけだ。もう一度、思いっきり体重をのせてぶつかったとき……
あたりが大きく揺れた。
「あだだだだ！」
重心を崩して、右膝を床に打ってしまった。
「いくらダンナでも、無茶ってもんでやすぜ」
ケチが近寄って声をかけてくれた。ありがたいが、だからと言ってジッとしてはいられない。

「いまオレが行かなくちゃ、誰があねごを守るんだ!?」
突進を続ける。
「それっ！」
汗がにじみ出し、肩口に痛みがはしるが、格子はビクともしない。何度目かの突撃をかまそうとした瞬間……不意に、牢の扉が開く音がした。
牢番？　そう思ったが、入ってきたのはなぜか、ところどころ黒く汚れた白イタチだ。そのイタチは二本足で立ったかと思うと、首をひねりながら突然しゃべり出した。
「うーん、女の人はいないみたいだなあ」
その声にかぶさる感じで、ケチがつぶやくように言った。
「いったい、どちらさんでやすかね？」
「どちらさんって……あはは、人間じゃないんだよね。どっからどう見てもイタチにしか見えないんだけど」
説明すると、当の相手はへそを曲げたようだ。
「失礼だなあ。オイラにだってコッパという、れっきとした名前があるんだからね」
「ふーん、コッパねえ……」
吹けば飛びそうな名ではある。
「まさか……語りイタチでは!?」
ケチが驚いたように言っていた。
へええ、語りイタチというの？　なるほどなあ。つい感心していると、その背後から若い男が現れた。何本ものカタナを、背中や腰に差している。
味方か？　それとも敵？　とりあえず、仲間と同じような山賊ふうの服を身に着けているが……
その若い男は、スーッとくぐり戸に近づき、

無言で閂（かんぬき）を引いた。

「助けに来たんだ。いまのうちに早く逃げてよ！」

しゃべったのは、またしてもイタチだった。

とはいえ、そんなことはどうでもいい。お鷹の危機に、このペケジを差し向かわせるように仕組んだお天道（てんとう）さまに感謝しよう。

「助かったぁ！」

さっそく、くぐり戸に飛びつく。

ふと男と視線が合った。その眼光は尋常ではない。思わず、息を呑む。な、なにか声をかけなくては……

「えっと、あ、ありがとう！」

「…………」

男の口は堅く閉ざされていて、なんの返事もない。

「助かりやした。いってえあなたさまは？」

背後から、ケチが質問する。

「こっちのはシレン。風来人だよ！」

男ではなく、イタチが応じた。

「うわっ、すごっ……」

久しぶりに見た砦は、一変していた。多くの建物は壊れるか燃え、あちらこちらに乱雑に物が散らばっている。斬り合いに混じって、怒鳴り声が聞こえる。

「ペケジ！　いつ牢から抜けだしやがった！」

いきなり、仲間の山賊たちが迫ってきた。

「ち、違う。オレは脱走したんじゃなくて……」

否定したが、相手は聞く耳を持たなかった。

「こいつが手引きしたんじゃねえのか？」

「怪しいヤツは斬る！」

「ま、待ってよ！」

はねのけようと手を振ると、相手が吹っ飛ん

だ。
「あれ？」
「……っきしょう、やりやがったな！」
ほかの連中が群がってくる。みな殺気が立ち、まったく話を聞いてくれそうにもない。
でもここで自分が怯んでいたら、いとしいお鷹の命が危ない！
「ペケジのダンナ！」
ケチの声に、振り返る。背後から、刃が襲いかかろうとしていた。
卑怯な！
「どっせえええええ！」
思いきり踏み出し、そのカタナが当たる前にぶちかましをかける。
「ぐへっ」
そんなへなちょこな構えで、倒せるとでも思ったか！
「くっ……こうなったら、囲んでヤっちまおうぜ！」
仲間が物騒なことを言い出す。その目は、まさしく殺気に満ちていた。
しかたがないか。本気で仲間と闘う覚悟を決めたとき……
シレンとかいう男が、すっと前に飛び出してきた。
「あがっ」
「うわっ」
瞬く間に、ふたりが地に伏した。
さらにひとりが、シレンに斬りかかる。
「あぶない！」
だがシレンの姿は、もうそこにはない。別な山賊の胴を払っている。すさまじき強さだ。
思わず見とれていたが、よくよく考えると、こんなことしている場合ではない。奥まったと

ころにあるお鷹の屋形のほうは、まだ火の手はあがっていない。早く行って、賊から守らなくては！
走ろうとすると、コッパとかいうイタチの声が飛んだ。
「そっちは危ないよ！」
冗談じゃない！　無視することにする。
「まったく何考えてるんだよ！　シレン、早く行こうぜ！」
「ダンナがた、待っておくんなせえ！」
後ろから、ふたりの足音が追いかけてきた。
もう爆発音は止んでいた。お鷹の屋形に近づくにつれ、静かになっていくのが不気味だ。
門が見えた。その中に、山賊の仲間たちが駆けこもうとしている。あれを抜ければ、お鷹のところに辿り着ける！
目の前で、門が閉じられようとしていた。
「待ってくれよ！」
「閉めろ、急げ！」
聞く耳を持たないようだ。しょうがない。そのまま体当たりをかます。
「どっせーい！」
閉じはじめの門は、あっさり開いた。勢いあまって、こけそうになる。
「まさかペケジ、この騒ぎの原因はおめえか！おかしらの大恩を忘れやがって……おめえだけは生かしちゃおけねえ！」
ハッタリが怒鳴った。
「ペケジだって!?」
続いて、麗しきお鷹の声がした。今のお鷹はぴったりとした動きやすい服を着ているが、その憂いを秘めた視線が、まっすぐ自分に向けられている……

「あねご、ペケジがただいま参上しました！」
誇らしく名乗りをあげる。お鷹が肩を震わせた。
「な、何も考えてないような顔をして、あたいを騙すなんて……この裏切り者！」
そ、そんな！　あねごだけは信じてくれると思ったのに……
「問答無用！」
ハッタリが抜き身で駆け寄ってくる。その太刀筋は鋭く、他の仲間とは比べ物にならない！
「ちょ、ちょっと、待……」
「覚悟、決めろや！」
反応する間もなく、凶刃が襲いかかってくる。
もはやこれまでか……
目を閉じたとき、脇を疾風が駆けぬけた。痛みはやってこなかった。
「え？」
金属がぶつかる音がし、見ればシレンのカタナが、ハッタリと刃を交えていた。
「くっそう……シレンとやら。やっぱり、おめえだったのか！」
ハッタリが、声をかける。
「あ、ハッタリじゃない!?　なんでこんなところにいるの？」
シレンの懐から顔を出したコッパが、そんなことを言っていた。
……ということは、みんな知り合いなの？
「ふん、答える必要はねえな。っせい！」
ハッタリは、体重を乗せて剣を押し出す。
シレンが呼応して飛びのいた。
そのスキにハッタリは剣を捨て、背負っていた矛の盾を身構える。本気になった証拠だ！
「お鷹さま、ここはハッタリにまかせて、早くおさがりくだされ！」

長老がお鷹をうながす。
「そ、そうだよ。早く逃げなきゃ」
後ろには砦の本丸がある。そこへ逃げこむべきなのだが……お鷹は動かない。
「ふんっ！」
ハッタリは矛の部分を前方に繰り出し、シレンを串刺しにしようとする！
シレンの姿が揺らぐ……と思った瞬間、ハッタリの左肩に、カタナが振りおろされる。
「なんの！」
ハッタリは盾の部分で、それを防いだ‼　さらに矛を回して斬りかかる。
シレンはハッタリの右側に回りこんだ。その脇腹を、シレンの刃が襲う。
「ちぃ！」
ハッタリは柄（つか）のギリギリのところで受け止め、シレンを弾きとばす。シレンは宙で体勢をととのえ、ひらりと距離をとる。
す、すごい。速すぎて見ているだけで、精一杯だった。
ふたりは間合いを読みあって、互いに相手のまわりをグルグルめぐり始める。その腕は、互角と言っていい！　リーチの長い攻防一体の武器を使いこなす点ではハッタリが有利だが、シレンの機動力もバカにできない。どっちが勝ってもおかしくなかった。
ハッタリが腰に片手をやる。次の瞬間、短い竹筒が投げられた。
シレンが軽く身をひねったとき、竹筒が破裂し、姿勢が乱れる。
「そこだ‼」
ハッタリが、黒煙のど真んなかへ強烈な突きをはなち、そのままシレンの胴があったはずの部分を、真一文字に払う！

「ああっ！」
思わず目をおおったが、肉を斬り裂く音はしない……
「なにっ！」
目を開けるとハッタリがたたらを踏んでいた。矛を突きだして間合いを崩したハッタリの右肩に、煙のなかから現れた風のような刃が打ちおろされる。
「ぐっ」
ハッタリの身体が、ゆっくりと大地に沈んだ。
「無念……」
一瞬、時が止まった。あたりは水を打ったように静まり返る。
そして……
「はっ、ハッタリのアニキが……」
誰かが、つぶやいた。
「や、やっちまえ！」
その叫びで金縛りを解かれたように、仲間たちがいっせいに斬りかかった。
シレンは避(よ)ける気配も見せず、むしろ軸足を踏みこみつつ、一閃。
「ぐおおおおおっ！」
仲間がバタバタと崩れていく。
「ほう。手紙にあったとおり、見事な腕だな」
お鷹が、驚嘆するように言った。その瞳は、なにかの期待に満ちて輝いていた。蠱惑的(こわくてき)なその色に、ついドキリとするとともに背筋が寒くなる。
「お鷹さま、感心している場合ではありません！」
長老が身体を盾にして、ジリジリと下がっていく。いつのまにかその手には、妖刀かまいたちが握られていた。
周囲を蹴散(けち)らしたシレンが長老に向かって行

く。
「ぬっ！」
長老は、妖刀かまいたちを振りおろした。その三方向への攻撃は、右に避けたシレンの服を斬り裂く。
だがシレンは、気にしたようすもなく刃を振るう。
「ぐむ！」
長老は、打撃を流しきれない。
「お、お鷹さま……お逃げくだされ」
言いながら、倒れこむ。
お鷹は仁王立ちだ。恐怖で動けないのだろうか……と思ったが、そうではない。瞳の奥に、炎を宿していたのだから！
「シレンとやら。おまえの実力は、よく見せてもらった。あたいの名は、お鷹。冥途(めいど)の土産に覚えておきな。だてに山賊のかしらをやってるんじゃないってことをね！」
お鷹は、得意のモーニングスターを構え、頭上で勢いよく振り始める……
シレンは、その武器の間合いとタイミングを計るように、目を鋭く光らせていた。
いまやお鷹のそばに立っているのは、自分だけだ。
そうか、分かったぞ。砦を騒がせていた賊とは、まぎれもないこのシレンだったのだ！　沸騰するかという勢いで、頭に血が昇った。その激流は耐えられないほど激しく、熱くこみあげてくる。怒りという名の、大逆流である。
シレン！　自分を助けるふりをして利用するとは、とんでもない男！
「うおぉぉお！」
思わず突っこんでいた。
「食らえ、食らえ、食らえ！」

無我夢中で殴りつける。ところが渾身の打撃は、他の仲間と同じように空を切るばかり。まるで、風とでも闘っているようだ。

「ペケジ、おまえ……」

お鷹が息を呑むのが聞こえた。

今、お鷹を守れる者は自分しかいない。こうなったら相討ち覚悟だ！　男ペケジ、あねごのために、命を賭けます！

「うおおおおおおりゃあああああああああ！」

喰らえばだれもが吹き飛ぶ、ぶちかまし。むろん、当たるとは思っていない。

「がっ……」

右肩に鈍い痛みがはしる。その痛みを耐えて……肉を斬らせて骨を断つ！

「ふんぬ！」

おもむろに左腕を伸ばし、伸びきったシレンの右腕をガシリと掴んだ！

「ぐふふっ」

そのまま引き寄せる。肉弾戦になってしまえば、相手のカタナは使いようがない。片腕とはいえ、腕力で自分が負けるはずもない！

だが……

「うごおおおおっ！」

一瞬、何が起こったのかわからなかった。何も考えられなくなるほどの痛み。

シレンは惜しげもなくカタナを捨て、渾身の膝蹴りをみぞおちに叩きこんできたのだ。

ふらついていると、シレンの拳が、自分の顎に吸いこまれて……

今度は、どこか遠くへ導かれていくような、気持ちよい痛みだ。意識がスーッと、なくなっていく。空には、きれいな月がきらめいている。心配そうなお鷹の姿が見えた。あの時……初めて逢ったときと同じ表情だ。

やっぱり、お月さまより美しいや。
あとはもう、目の前が真っ暗になった。

なんだか、ふわふわ暖かい。ここが天国ってところなのかな？　女の人の柔らかい香りまでする……。
目を開けると、ずいぶんと大きな部屋に寝ていた。
「おっ、気がついた？」
枕元には優しく微笑むひとりの女性がいた。
「ここが天国？　オレを迎えに来てくれたの？」
やっぱり極楽では、願いが叶うみたいだ。
「どーも、寝ぼけているみたいだね。ここはあたいの家だよ」
女性はからからと笑いながら続けた。
「あんたは行き倒れになってたんだ。あたいは狩りをしてたんだけど、まさかこんな獲物が得られるなんて、思いもよらなかった」
まだ生きている……というか、行き倒れ!?
「あ、ありがとう」
わけがわからず、躊躇しながらお礼を述べると、
「当たり前のことをしただけだから、礼はいらないよ」
笑顔のまま、嬉しいことを言ってくれた。
その言葉を聞いて、すっかり思い出した。これは初めてお鷹と逢ったときのことだ。とすると今は、夢でも見ているのだろうか？
このとき、目頭が熱くなったのを覚えている。天国じゃなかったけど、お鷹はホンモノの天女だと思ったんだ。
ほっとすると、腹が鳴った。
「ははは、快復に向かっている証拠だね。おーい、誰かいないか！」

「お呼びですか？」
すぐに襖が開き、老人が現れた。身なりはしっかりして、難しそうな顔をしている。この老人が、みんなから長老と呼ばれていると知ったのは、もっと後のことだ。
「じい、客人に食事の用意を頼むよ」
「かしこまりました」
それだけ言うと、長老は去っていく。
「それじゃ、あたいは用事があるからそろそろ行くけど、すぐに食事が来るから、好きなだけ食べなよ」
「え。ほんとにいいの？」
「お鷹に二言（にごん）はないさ。ま……でも、食べ過ぎないようにね」
そう言うと、お鷹は立ちあがる。
「気が済むまで、ゆっくりしていきな。あとで話も聞きたいしね」
「あ、うん」
またニッコリと微笑むと、お鷹は部屋を出た。
この人だったら、自分のなにもかもを受け容れてくれるという感じがする……そういう想いが浮かび、心が温かいもので満たされたんだ。

なんだかあたりが騒々しい。
ふたたびお鷹の姿が見えた。なにか思い悩んでいるような顔だ。
包帯を巻いた長老やハッタリもいて、その脇に正座している。それ以外の仲間は、あちこち忙しく歩きまわって、傷の手当てや砦の修理をしていた。
気づけば、砦の中の大広間に横たわっていた。
しかし、みんな生きているってことは、これも夢の続きなのかな？
ハッタリが深い息を吐いた。

「しかし、すべて峰打ちとは……格が違いやしたな」
え？　そうなの？
長老がゴホンと咳払いをする。
「お鷹さまにケガがなかったのが、不幸中の幸いです。シレンさま、ご配慮かたじけない」
そう言って、頭をさげる。確かに、お鷹だけはケガをしたようすが見られない。
長老の視線の先には、三度笠に縞合羽という風来人ふうの若い男……シレンだった。その左肩には、イタチのコッパがちょこんと乗っている。とすると、山賊ふうの服装は変装だったのだ。
「まあまあ、そんなにかしこまらなくてもいいよ。なにか誤解があったみたいだからさ」
答えたのは、コッパだった。語りイタチは先を続けた。
「それよりもさ、さっき話した件は、どうなの？」
「ああ、そうだったね。屋形もメンツも、ムチャクチャにされちまったしねえ……」
お鷹は品定めをするように、ジッとシレンを見つめている。なんだか淋しくなってきた。
「お鷹さま……」
左右に控えている長老とハッタリは、顔色をうかがっている。
シレンは気(け)おされるでもなく、鋭い目で油断なくお鷹を見ているようだ。
すると突然、お鷹はとろけるような微笑を浮かべ、立ちあがった。
「決めたよ。みんな聞いておくれ！」
その一声で、場が静まった。
「今日からあたいたちは、正義の味方になるん

だ！」
突然のことに、なんのことか理解できなかった。それはみなも同じらしく、長老などは大きく口をあけている。
「山賊稼業は止め、このへん一帯を護る自警団になるんだ。旅の者の護衛や、店の経営をして、まっとうに生きていく！」
今までだって、ちゃんと生きてきたと思うけど……そんなことを思っていると、また場がざわついてきた。
「どうする、おい？」
「うーん、そうだな……」
近くからいろいろな声が聞こえてくる。あまり賛成したいという感じはしない。
お鷹は山賊たちの顔をひとりひとり見ながら、言葉を続けた。
「いやなヤツは去りな。ぜいたくはできなくなるかもしれないしね。それでも、あたいについてこようと思う者だけ、残ればいいさ」
さらに大きなどよめきが起こった。
「オレは、あねごに一生ついて行くよ！」
いち早く手を挙げた。
「ペケジ……」
お鷹の嬉しそうな笑顔。ああ、真っ先に賛成してよかった。
「俺も、もちろん賛成でやす！」
ハッタリも同意するが、ジロリとこちらを睨む。
「ハッタリ！」
お鷹の笑顔は、もっと大きくなる。なんだか、気に食わない。
そこで長老が立ちあがる。
「みなの者！　先代の遺言、努々(ゆめゆめ)忘るるなかれ。我らはすべて、忠誠を誓った身であるぞ！」

場の雰囲気が変わってきた。そういえば先代である父親の急死後、若くして後を継いだのがお鷹だっけ。
「確かに……先代には世話になったしな」
「はあ、しかたねえなあ」
「もうちょっとつき合ってみるか」
あちらこちらから、不承不承ながら賛成の声があがる。
それを満足げに眺めていた長老は、お鷹を見て言いきった。
「おかしらに逆らうやからは、ひとりもおりません」
そして、自らお鷹の前に平伏する。慌てたように、みなもそれに倣った。
「ま、こんなもんか」
お鷹は大きくうなずき、シレンを見る。
「これでどう？」
シレンは無言でうなずいた。
「へーえ。なかなかどうして、大したもんだね」
コッパが妙に感心していた。
するとお鷹が、再び質問をする。
「そういえば、ねえさん……お竜ねえさんは、どうしてるの？」
「ああ、そうそう。お竜さんだったら」
コッパが口を開いたとき……

「無事かい、お鷹！」
出口のほうから、鋭い声がとんできた。みないっせいに、そっちを見る。
「ねえさん!?」
お鷹が明るく叫んだ。その視線の先には、髪を振り乱し、必死の形相で小太刀を構えているお竜がいた。
「お鷹……無事だったんだ。よかった。それに

しても……」
お竜は顔をほころばせたものの、戸惑ったようにあたりを見回した。
「これは、どういうことだい？」
「ねえさん、また会えてよかった！」
お鷹が、飛びついた。
「な、なんだい……藪から棒に。どうしたんだい？」
お竜は小太刀をしまい、お鷹の頭を優しく撫ではじめた。その表情は慈愛に満ちており、まるで母親だった。
それを見てあちこちで笑いがおこり、それが徐々にあたりに伝染した。

それから再会を祝い、互いの行き違いや事情を話す時間があった。
夜もしらじらと明けたので、朝食ということになる。久しぶりのまともなメシ……なにより、おかわりができるのが嬉しい！
ペケジにはよくわからないことが多かった。分かるのはただ一つ。お鷹も、お竜も、ハッタリも、長老も、そしてシレンやコッパも、みな仲良くなったということだ。
「オッホン」
コッパが大きな咳払いをした。
「お竜さん、嘘を言ってオイラたちを試したね」
その言葉に、お竜はすまし顔で答えた。
「あーらそんなこと、食べ物に薬を仕込んで、言人のことを無理やり黙らせるような連中に、言われたかないね」
それから落ち着いて大根の味噌汁を口にふくんだ。
「そ、それは……」
コッパが言葉につまると、お竜はシレンに視

線を移した。
「だいたいあんた、山賊っていう稼業に『捕らわれていた』あたしの〝妹〟のお鷹を、無事まっとうな道に『救い出して』くれたんだろ？」
シレンの目が鋭く光る。コッパが飛びあがった。
「えええええ？　そういう意味だったの？」
お鷹が目を丸くする
「そうなの、ねえさん？」
お竜が、少し恥ずかしそうにほほを染め、うつむいた。
「まあね。終わりよければすべてよしだよ」
お竜は、なに気なく言って、箸を別の椀に伸ばした。
「フッ」
シレンがうつむいて、笑いをこぼした。すべてを見透かしたような、あるいはだまされたつもりもないというような表情。
「なっ！　シレン……あんた」
そのようすに、お竜が顔を真っ赤にした。
「あっははははは」
お鷹が、つられるように笑った。
「なんだい、お鷹まで！」
責めるお竜に、お鷹が目配せする。
「シレンさんは、腕っぷしも強いし、知恵もある。なにより男気があるよ。もう最高。いうことない。そう思わない、ねえさん？」
「なにが最高なもんか。こんな、いけ好かないヤツ」
むきになって言うお竜。
「ふーん、そうなんだ……」
お鷹は、お竜の顔とシレンの顔を交互にまじまじと見つめる。
「じゃあ、あたいがもらっちゃっても、いいん

だ？」
「な、なにをバカなことを！」
そうだよ、急に何を言ってるの？
当のお鷹は、いたずらっぽく口の端をゆがませる。
「あたいは、いずれ婿をもらわなくちゃいけないからね。そんなら、自分でこれはと思う男を選ぶのが当然でしょ？」
そうそう。
「それはそうだろうけど……」
珍しくお竜が言いよどむ。いい機会だから、ここは自分がお鷹の相手役に立候補しよう。
勢いよく手をあげると同時に、お鷹が立ちあがった。
「みんな、聞いてくれ。山賊を廃業するついでに、あたいはシレンさんと婚約するよ！」
えっ、そ、そんな⁉　この挙げた手のやり場は、一体どうすればいいんですか？
また頭のなかが真っ白になる。
「おっ、なんだいペケジ？　真っ先に賛成してくれるとはね」
どええええ⁉　こ、こ、この手は違うんですって‼
「ありがとよ」
お鷹は、心の底から嬉しそうにうなずいて、自分の肩に手をおいてくれた。
「は、はひ……」
もう何も言えなかった。なんだか泣けてきた。
「お、お待ちください、お鷹さま。物事には順序というものが……」
束縛を解かれたように、長老が慌ててあいだに入った。
「い、一時の感情に身を任せてはなりやせんぜ、おかしら」

ハッタリも、戸惑っている。
そうだよそうだよ、ふたりともがんばれ！
「なに言ってるんだい、善は急げっていうだろ。世継ぎを得るのに、シレンさん以上に適してい る人材がいるってぇんだったら、見せてもらおうじゃないか！」
「よ、世継ぎ!?」
ハッタリが、顎をわななかせた。
「だいたい『おてんばすぎると、嫁の貰い手がなくなりますぞ。お鷹さまには、頭目として立派な世継ぎを残すと言う使命がございますのに』って、いつも口をすっぱくして言ってたのは、じいじゃないか！」
ドンと足を踏み出し、見得を切るお鷹。
「そ、それはそうですが……」
長老もタジタジとなっていた。そして救いを求めるように、お竜に視線を泳がせた。
お竜は、心を落ち着かせるように咳払いをした。
「いつも破天荒なことを言いだす娘だねえ。ま、それが大物の証拠だとは思うんだけど、シレンだって困っていることだし」
続けて、語りイタチのコッパが、お鷹の前に立った。
「そうだよ！　それにそういう話は、ちゃんと仲介役のオイラを通してもらわなきゃね！」
「そ、そうなのか？　そいつはすまなかった」
お鷹は神妙にも素直に謝り、それから思案げな表情をする。
「ところでコッパさんは今、ひとり身なのかい？　人間と旅しているなんて、ずいぶんと珍しいね」
「そうだけど、それがどうかしたの？」
コッパはお鷹の問いに、うさんくさげに答え

た。
「そういえば風のうわさで『この近くに語りイタチの棲みかがある』という話を、聞いたことがあるんだけどねぇ」
「えええ、ほんとに!?」
コッパが、目玉を飛び出さんばかりに驚いている。
「この縁談を承知してくれるっていうなら、その場所を教えてあげてもいいよ?」
お鷹はニッコリと笑う。そうだ、オレもこの笑顔に、いつもやられちまうんだよなあ……
コッパは、たちまちシレンに向き直った。
「シレン、これはもしかしていい話なんじゃない?」
あーあ。コッパもたちまち、丸めこまれてしまったのか……
「あんた、簡単に前言撤回するんじゃないよ!」
お竜がコッパに、軽く手刀を入れた。
「あてっ。何するんだよ、お竜さん!」
コッパが噛みついた。
「あだだだ、放し。その牙を、お放しって言うんだよ!」
なんだか、楽しそうなふたりだ。
でも当の本人はどうなんだろう? シレンのほうを見ると……何事もなかったかのように、味噌汁をすすっている。続いてタクアンに箸を伸ばし、バクバクと口に運ぶ。
すげえ! まったく動じてないよ! それにあのあねごを、こんなにも短い時間で振り向かせるなんて!
「アニキ!」
ペケジは思いがけず、そう叫んでいた。
あれ? アニキ……って?
シレンが振り向いた。その精悍な顔は、脳裏

にかすかに残るアニキの面影にふさわしい。自分は、このセリフを言う瞬間を、ずっとずっと待っていたのだ。ひょっとして、アニキについて行ったら、自分の女運も好転するかもしれない。それに借金を返すことだって……

「アニキー！」

嬉しくなって、ついアニキに抱きつきたくなる……

「あぶっ！」

見事な肘鉄で、すっ飛ばされた。

「あはっ、あはっ、あはっ……さすがはアニキ、スキがない。やっぱり、こうでなくちゃ」

頬がひりひりするが、何だか心地よい。なつかしい痛みだった。

なのにコッパが睨んでくる。

「変なヤツ……ま、これで用も済んだようだから、オイラたちはそろそろ行くよ」

シレンはというと、爪楊枝で歯のあいだを掃除して、おもむろに立ちあがった。

「え？　行っちゃうの？」

お鷹が、不安げな表情を浮かべる。

「アニキ、オレも連れて行っておくれよ！」

思わず叫んでいた。自分でも意外だが、さっきから考えるより早く言葉が出てくる。

お鷹は苦しそうに口をへの字に結んだあと、しばらく考えていた。そしてやがて何かを決心したかのように晴れやかに笑うと、背中をバンと叩いてくれる。

「そうだね。ペケジ、シレンさんの力になっておやり」

「うほっ」

温かいものが全身にこみあげて、何がなんだかわからなくなる。

感慨にふけるまもなく、シレンが背を向けて

歩きだした。急いで後を追わねば！
シレンの肩の上から、コッパがちらっとこちらを見る。続いてため息を吐くと、なにやらシレンに耳打ちをした。
お鷹の言葉もある。殴られようが蹴られようが、絶対ついていく！　何が何でもついていく！
「ちゃんと、ここへ、帰ってくるんだからね！」
お鷹が、微笑みながら声をかけてきた。
「ペケジ、ヘマすんじゃないよ！」
叱るような、お竜の鋭い声。
「わ、わかってますって！」
気合を入れなおし、元気に返事をする。
「シレンさま、いろいろとありがとうございました。その武勇、その心意気。これからも決して忘れませんぞ。旅の無事を、お祈りしております」
そう言う長老の顔はホッとしていた。
ハッタリは黙ったままだ。どうにも苦虫を噛み潰した顔をしていた。
「シレンさーん、きっとだよぉー」
お鷹がいっそう声を張りあげる。
その声に驚いて先を見ると、シレンは立ち止まってなどいなかった。いつのまにか、ずいぶん先へ行っている。
「待ってくれよ、アニキ！」
その背中を追って、駆けだす。
吹いてきた追い風が、シレンの縞合羽を揺らした。
そのとき、不意に心に引っかかるものがあった。そういえば座頭ケチは、どこへ行ったのだろう……

第三幕　旅は道連れ、世は……

その日はいろいろなことがあったせいか、お竜はよく眠れなかった。

まさしく風のように来ては、去っていったシレンという男。そのせいで妹分のお鷹とその一味が、一夜にして変わってしまった。

なにかが心の奥底でうずき、息づいている。ようやくまどろみがおとずれても、妙に眠りが浅い。記憶が螺旋（らせん）を描いて、過去へ過去へと飛んでいく……

あれは、月のない夜だった。戸の開けられる音がして、目を開ける。

「お竜さん」

ハッタリのひそやかな声に応じて、立ちあがった。閉じこめられていた土蔵から出て、ひと月ぶりの地面を踏む。

この日に備えて体力を温存していたので、久しぶりに歩きまわっても、それほど不自由はなかった。すでに愛用の小太刀と目つぶし用の粉も受け取っている。

見張りの者は、地面で眠りこけている。ハッタリが酒に仕込んだ薬のためだ。

「お竜さん、こちらでやす」

ハッタリは塀の近くまで行くと、茂みを探り、かぎ爪のついた縄を取り出した。軽く振りまわすと、塀に向かって放り投げる。

あたりを警戒するが、今のところ気づかれたようすはない。

「さ、早く。俺は後から行きやす」

ハッタリが差し出した縄を伝って、塀の上に

登った。そのあいだも、ハッタリは油断なくあたりを見張っている。
「あんたも早く」
声をひそめながら言うと、ハッタリは無言で続く。
「どうやら、うまくいきそうでやすな」
塀を飛び降りたところで、ハッタリがそう言った。そのとき……
「なっ」
あたりが明るくなった。反射的に、目を手で覆う。
うす目を開けて見ると提灯で囲まれていた。
裏切られたのか？
しかし、ハッタリの目もまた、驚きに見開かれていた。
「マユツバのアニキ、おいらが言った通りでやしたでしょ？」
マユツバの腰巾着（こしぎんちゃく）であるイカサマが、脂ぎった顔で口を卑しくゆがめ、こちらを見ている。
「ああ、まさかハッタリが裏切るとはな」
むろん、憎きマユツバの姿もあった。父のように優しくて包容力のある男。最初はそう思わされ、騙された。うわべの優しさの底にある、冷徹さといやらしさ。まるで別人と言っていい本性は、詐欺師の名こそふさわしい！
「ハッタリ、こばみ谷の三悪人の名が泣くぞ」
マユツバは、あざけりの表情を浮かべている。
「俺はあんたの汚ねえやり口には、もううんざりでね」
ハッタリが、吐き捨てるように言う。
確かに悪知恵のはたらくマユツバとイカサマは、両方ともその名にしおう悪党だ。ところがハッタリは、義理がたくスジを通すところがあり、今回は自分の窮状を見かねて、力を貸して

くれたのだ。
「言葉じゃわからねえバカどもか……ものども、かかれ！」
マユッバの合図の寸前、イカサマが目配せをした。その先には、水桶を構えている男がいた。ハッタリ得意の爆弾も、水に濡れては使いものにならないということだ。
間髪いれずに、そちらに目つぶしを放った。
「ぐあっ」
「うげっ」
水桶を持っていた連中が、苦痛に転げ回る。
「ハッタリに火薬を使わせるんじゃねえ！」
マユッバの指示が飛ぶが、わずかに遅い。ハッタリの手には、すでに点火された焙烙玉（ほうろくだま）があった。
「そうら置き土産だ。たんと喰らうがいいや！」
焙烙玉が空に向かって放たれる。タイミングを合わせて、耳をふさいだ。
「うがああああああっ」
震動と閃光。地響きとともに、あたりが揺れる。
「お竜さん、こっちに馬の用意がありやす」
ハッタリに続いて、駆け出した。
「に、逃がすんじゃねえ！」
マユッバの声に、ちらりと後ろを振り返る。晴れかけた煙の向こうで、バッの悪そうな顔が見えた。それが初恋の男を見た最後だった。
ぼんやりと目を開く。涙が頰を伝わっていた。
「また、この夢……」
最近は見ることも減っていたのだが……今頃になって、どうして？
思い当たることは、ひとつしかない。シレンである。

シレンとマユツバには、なんとも言えない風来人特有のにおいがあった。そして最初に出逢ったとき、マユツバも本心から情け深い人間に見えた。しかしそれは錯覚でしかなかった。自分はマユツバの、うわべだけを見ていたに過ぎない。

果たしてシレンは、本当にさっきまで見たままの、無欲で仁義にあふれる人間なのだろうか？　自分はシレンの本質を見極められているのだろうか。もし違うとしたら、一緒に行ったペケジが危ない。ひいては無心に信じる、お鷹の身にも危険がないとはいえない。

疑り深くなっている。しかし自分は姉貴分だ。妹を守る義務がある。

そう、あれは……

初めて出会ったのは、自分が十二で、お鷹が八つ。自分の父親代わりだった〝風来人の元締め〟に連れられ、お鷹の砦に行ったときのこと。当時健在だったお鷹の父から「仲良くしてやってくれ」と紹介されたのだ。

「遊ぼう！」

出会った早々、お鷹は自分の袖を引っ張って、武器庫まで連れていった。

「好きな得物を選んでよ！」

面食らう自分に、そうするのがさも当然というように迫ってくる。見てみると、ただの山賊の砦には似つかわしくないくらい、豊富な武器があった。

「あたいは、これ！」

お鷹が手にしたのは、木の柄に、丸めた布を紐でつなぎあわせた、見慣れぬ武器だ。

「いざ、勝負！」

躊躇する自分を尻目に、お鷹はその武器を振

り回しはじめた。
そこで、近くにあった短い木の棒を、二本取った。
物心もつかぬうちから、よく男の子と混じって、チャンバラごっこをしたものだ。剣術の手ほどきも受けていたから、多少は使える。
「たあっ！」
「やあっ！」
お鷹の振りまわす布のかたまりが、頭を、喉を、胸元を狙って伸びてくる。
「む……」
そのセンスのよさに唸りながらも、棒でそれらをさばく。
「ええーい！」
焦れたお鷹が、大振りになった。しめた！
「とう！」
気合一閃、思いきり弾き飛ばした。
「あっ！」
お鷹の得物が、すっぽ抜ける。
「お鷹さま、そろそろお食事の用意が……」
ちょうどそこへ、後に〝長老〟と呼ばれるお鷹の侍従が現れて……
「ぐほっ！」
飛んだお鷹の武器が、その顔にまともに当たった。
「だ、大丈夫か、じい？」
お鷹が、近寄った。
顔を押さえていた侍従は、身を起こして怒鳴りだす。
「ふだんから危ない遊びをしてはなりませんと、あれほど申しあげているではありませんか！」
すると、お鷹はとんでもないことを言い出した。
「なんだ無事か。この武器も、もっと改良しな

いとなあ」
「な、な、な……それがしの話を、聞いているのですか！」
侍従は真っ赤になり、その叱責はさらに激しくなる。しかし……
「じい、食事の時間なんだろ。父上が待ってる。急がないと」
お鷹は、そう言ってうまく逃げた。
食事の席では、お鷹の隣に座った。お竜に負けたというのに、お鷹は上機嫌で、食が進むようすだった。
それが終わってふたりきりになると、お鷹が弾けるような笑顔で話しかけてきた。
「家の者はさ、誰も真面目に相手をしてくれないからつまらない。でも、ねえさんは真剣に立ち合ってくれたしね」
その「ねえさん」という言いかたに、少しの恥ずかしさと、大きな喜びを感じたのを、今でも覚えている。

そんな回想を終えると、想いはいつの間にか、また同じところへと戻っていた。
シレンにはマユツバにはない侠気と、みんなの心を唸らせる器がある。あの強気なお鷹を感服させ、ペケジの人生行路を変え、お竜自身のメンツまで立ててくれた。そんな状況を、偽りの仮面だけで作り出せるとは思えない。
そのとき自分が、今までシレンを「疑おう、疑おう」と思考していたことを悟った。また昔のように傷つきたくなくて、心の奥で感じとったことに、あえて逆らおうとしてきた。だが騙されるのが、そんなにいけないことなのか？　何度も体を張って、自分たちを助けてくれたシレン。そんなシレンにだったら、いっそ騙され

てもいい。
そう心を決めると、なんだか無性にくだらないことを考えていた自分がおかしくなった。その瞬間、光が射しこんだように、なにかの筋道が見えた気がする。
しょせんシレンは風来人。風の通り道を誰が知ろう？　だとすれば、その風が再びこの場所に吹きこんでくることは、ないのかもしれない。今ここで見過ごしてしまえば、もう二度と……
風の行く先を見たい。あの風がどんな運命を切り開いていくのか、この目で確かめたい。それは本能から突きあげてくる、耐え難いまでの衝動だった。
ふと障子ごしに外を見た。まだ闇は濃い。間に合うだろうか……
決心は固まっていた。文机に向かい、墨を磨る。

『お鷹、あたしはシレンを追う。
そしてその本性を見届ける。
勝手なねえさんを許しておくれ。
お竜』

手早く書き置きを残すと、荷物をまとめて外に出る。
かろうじて道を探れるくらいには、月が輝いていた。
自分には、ただこうする〝理由〟が必要なだけだったのだ。

早朝〝竹林の村〟に辿り着く。まずは村一番の酒場《酔いどれ亭》に足を運んだ。旅人の宿にもなっているので、方角から見て、シレンが立ち寄っている可能性は高い。ここでなんらか

の情報でも、仕入れられればいいのだが……
店の名を墨で大書したのれんをくぐったところで、二階から叫び声が聞こえてきた。
「なんだこりゃあああ！」
これは……コッパの声。大当たりだ。思わず運命の神リーバに、感謝の念を捧げていた。
急いで中に入ると、朝食の用意をしている店主がいた。
「シレンの連れの者だよ」
そう言って、強引に二階まで上がりこむ。

部屋の戸を開けると、コッパが頭を抱えて右往左往していた。
シレンが、いぶかしげにこっちを見る。まあ、当然だろう。
「細かいことは、後から話すから」
そう促すと、シレンは置き手紙らしきものをよこした。

『お金ありがとう。さすがはアニキだ。
これですべての借金が払えるよ。
この次に会ったとき、きっと返すから。
それまで元気でね。

ペケジ』

読んでいるうち、笑いがこみあげてきた。
「こりゃまた、ペケジもたいした盗賊になったもんだねえ」
そう言うと、コッパはキッとこちらを睨んだ。
「笑いごとじゃないよ、お竜さん！　あいつ、全財産を持ち逃げしやがったんだ！」
そう言われて見回すと〝やまびこの盾〟や〝封印の杖〟も見当たらない。ペケジは外見に似合わず、抜け目ないようだ。

「ああ、宿代どうしよう……いや、それよりも朝飯代！」
コッパが頭を抱えている。
シレンは憮然としたままだ。いや、これはこれで好都合……
「そういうことなら、ここの払いはあたしがもつよ」
そう宣言すると、シレンとコッパがいっせいにこっちを向いた。
「ほ、ほんと、お竜さん！」
コッパは、輝きに満ちた目でそう叫んだ。
「あたしのせいで、大八車を弁償することになったじゃないか。かまうことはないよ。旅は道連れ、世は情けってね。ふふふっ」
ようすを伺うが、シレンはいい顔をしていなかった。ともかく、階段をおりることにする。
香ばしい肉の匂いが鼻孔をくすぐった。そういえば、この店は猪肉が名物だった。
「ああ、にくぅ……じゅるるる……」
シレンの肩のコッパは、恍惚とした表情で、涎を垂らさんばかりだ。
階下に着いたとき、ちょうど店の小僧さんは、その猪肉を運んでいるところであった。
「ああ、にくうううううううう！」
コッパは叫びながら、小僧さんに向かって跳んだ。
「ひゃあああ！」
小僧さんの声があがった。
「うおおおお。こたえられないぃぃぃぃぃ！」
そのまま肉にかぶりつくコッパ。
「ふーう、まずは、食事にするしかなさそうだね」
わざと自分の巾着袋をジャラジャラ鳴らしながら、大げさにため息をついてみせる。

シレンは口にした笹の葉らしきものを噛み、あきらめたような視線で食卓についた。
「さあ。好きなだけ、たーんとおあがりよ」
ニッコリと笑って勧める。
「うわーん、お竜さん大好き！」
言いながら、コッパはさっそく新しい猪肉をほおばる。じっくり煮こんだ、肉汁がたっぷりの上物である。
「ううっ、うまい。うまいよ……お竜さん、サイコー。愛してる！」
コッパの世辞に、思わず苦笑してしまった。
シレンはというと、不機嫌に豆腐の味噌汁をすすっている。そしてじゃがいもと大根の煮物に箸を伸ばし、モグモグと白い飯を食べる。
初めこそ、そのペースはゆっくりぎこちないものだったが、やがて食事自体に夢中になったのか、あっという間に飯の碗が空になった。
「こっちにご飯の大盛り、おかわり！」
コッパが追加注文をする。呆気にとられた。
道中、このひとりと一匹は粗食で満足していた。しかし今は、すごい食べっぷりである。我慢するときは耐え、食べられるときには目一杯食べておく、それが風来人の心構えということか。
もう一度、シレンの表情を見つめてみる。うまいのやらまずいのやら、喜んでいるのか怒っているのか、よく分からない。ただ口元が、少し緩んでいる気がした。
「お竜さん、シレンもうまいってさー」
コッパは肉を噛みながら、説明してくれた。
「ふーん、いまの反応は、そういう意味だったんだ」
感心していると、コッパがシレンを指さした。

「その証拠に、ほら」
シレンが、猪肉の煮込みに箸をつけている。
「うまくなかったら、こんなに箸運びは早くないよ」
「なるほどねえ」
シレンの動きが止まった。何をするのか……
次の瞬間、大口を開けてバリバリと大げさなポーズで食べ始める。それはまるで「うまいからじゃない。滋養をつけるために、仕方なく食ってるんだ」とでも言いたげな感じだった。
ふたたびシレンが飯の碗を空けた。それでもおかずに手を伸ばしていたので、小僧さんに注文を頼む。
「御飯のおかわりを、こちらに」
シレンの目が、わずかに見開かれた。表情を変えない人物かと思っていたが、じっくり観察すると、やはり微妙に変化している。呰で確かに笑い声は聞いたから、しゃべれないということはあるまい。シレンがしゃべろうとすることを、全部コッパが取ってしまうので、しゃべらないクセがついてしまっているようだった。
「やっとあんたの、人間らしい姿が見れた気がするよ」
そう言うとシレンは目線をさげ、ますます食事に集中しだした。たぶん照れているんだろう。
「ふふふ……」
少しずつシレンのことがわかってきて、なんだか楽しくなってきた。完全に心を許したわけではないが、一つだけ確かなことは、シレンといると妙に心が落ち着くのだ。
「お竜さんは、お腹すいてないの？　冷めちゃうよ？」
「ああ、そうだね」
コッパから声がかかる。そういえばシレンの

ことばかり気にかけて、自分は全然手をつけていなかった。
箸を手にしたとき、不意に後ろから声がかかった。
「お隣、失礼してもええかのぉ?」
奇妙な壺を抱えた老人だった。髪は真っ白だが、頬はほんのり赤い。右手には酒を注いだ碗があり、朝から上機嫌である。
「うっふっふ。おまえさんがた、ええのお。らぶらぶじゃのお」
「な、なにをいきなり……違いますよ、おじいさん」
思わず、老人の背を叩いてしまった。
「げほごほっ……な、何をする。この〝変化の壺〟が割れたら、どうしてくれるんじゃ?」
変化の壺といえば、入れた物品をまったく別なものにしてしまう魔法の逸品である。なんでそんなものを持ち歩いているのだろう?
「たとえばじゃなあ……ハアッ!」
老人は、目にも留まらぬ速度で猪肉を一切れ取ると、壺の中に放り入れた。
「なにするんだよ!」
コッパが叫ぶが、壺の老人に気にしたようすはなかった。
「ほれ、見てみい」
なかを覗くと〝大きなおにぎり〟に変わっていた。
「へー、すごいですね」
効果は知っていたが、いちおう驚いてみせた。
「どうじゃ、おもしろいじゃろ?」
壺の老人の笑い声が、カンラカンラとあたりに響き渡る。
「わしはこういう壺を集めるのが趣味なんじゃ。ほかにもいろいろあるぞい。最近のオススメは

〝合成の壺〟かのう。同じ種類の物品を入れると、合わさって基本能力が強化されるという優れものじゃ……しかし」
急にシュンとしたかと思うと、ポツリとつぶやいた。
「ガイバラ先生も、最近は全然新作を発表してくれん」
シレンの箸が、茶碗にぶつかる音が響いた。今の今まで、この老人を無視していたはずのシレンが、その顔をまじまじと見る。
確かガイバラとは、有名な陶芸家で人間国宝にも選ばれている人物だ。シレンが知っていたとしても不思議はないが、この反応は尋常ではない。
一瞬、上にあげられたシレンの右腕に、何かの腕輪が見えた。見なれない代物で、前に予想していた〝百発百中の腕輪〟ではなかった。

「な、なんじゃあ？　わしはただ……」
壺の老人が、しどろもどろになる。
するとシレンは、興味を失ったかのように視線を外し、再び食事にとりかかる。
「小僧さん、猪肉、追加ぁ！」
コッパが、シレンに対抗するように注文をはじめた。
「わ、わしも負けんぞー！」
老人も再び箸を動かすと、人間業とは思えない速度で、並んでいるおかずに手を伸ばした。
「うわっ、なんてことを⁉」
けっきょく、このおじいさんはたかりにきただけ？　いずれにしろ、みなの食欲には呆れるしかなかった。

第四幕　沼地の探索行

コッパはいつものように、シレンの肩に乗っていた。あたりには薄い靄がかかっていて、久しぶりのお日さまが台なしだ。
遠くのほうからは、間断ない水音が押しよせてくる。滝かあ。ということは、もうここはテーブル・マウンテンのすぐ近くなのだ！
「ずいぶんと奥地に来たねえ」
お竜が感慨深げに、あたりを見回している。
そのとき……
「おっ、ヒトがいる！」
長く幅広い板の上を、幾人かが歩いていた。
その木の道は、空に突き出た何本もの細い岩のあいだを縫うように、ずっとつながっている。
ここではみな大地ではなく、タナの上を進むらしい。
「桟道に作られた小集落ってとこだね」
お竜は、したり顔だ。
岩の下部には、ぽっかりと縦長の穴が空いていた。そこを守るように庇がつけられている。ここでは人が、動物と同じように、岩のなかで暮らしているというわけ。
「へんちくりんなところだなあ」
思わず、そんな感想が漏れた。
「ここが世に聞く〝奇岩谷〟ってところじゃないかい？」
お竜が続けた。
「ペケジ……ここまで辿り着いたのかな？」
そう問いかけると、シレンは黙って小集落のほうへ視線を送っていた。

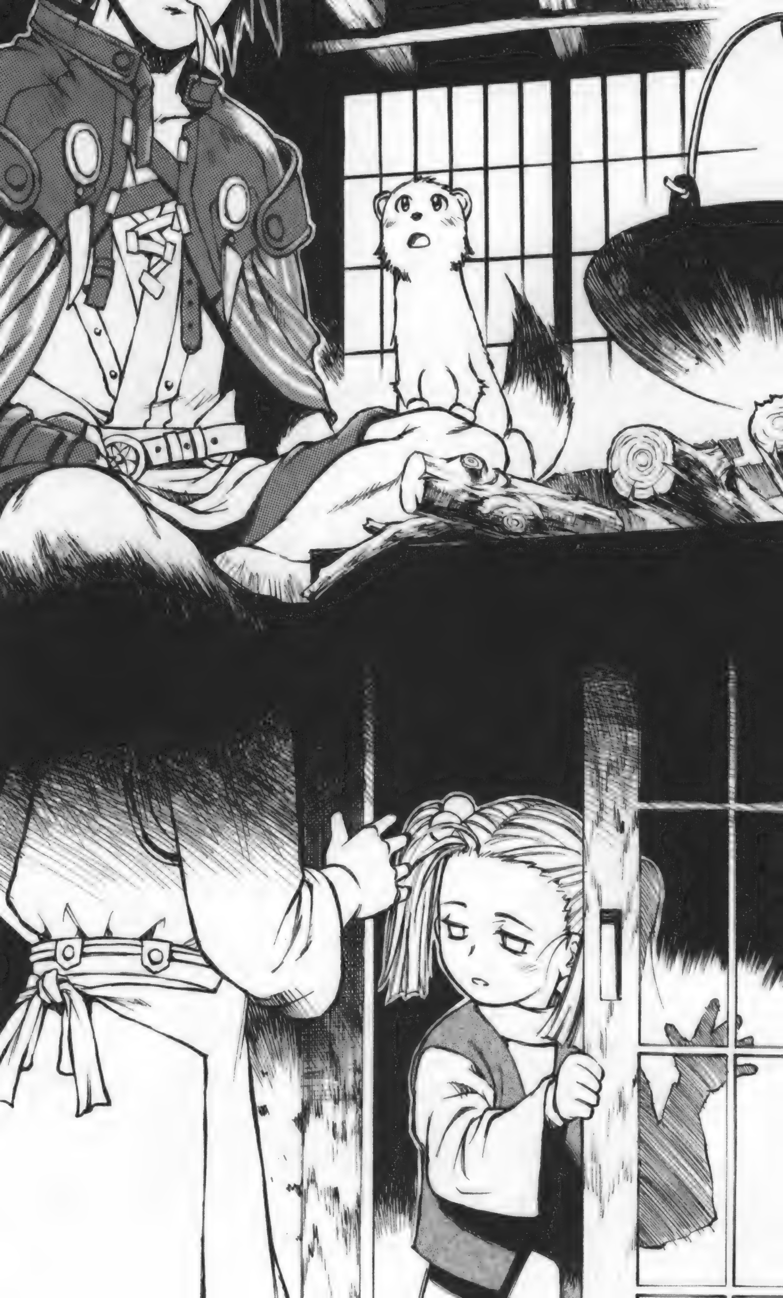
今回の旅の目的は、ペケジ捜し。ペケジをとっちめるという点で、珍しくお竜と意見が一致した。シレンはというと、ペケジの性格がどうも気に入っているらしい。なんだかなあ。
竹林の村を拠点に、聞きこみをおこなったところ、すぐに情報が得られた。考えてみれば、ペケジほど目立つ男はいないのだ。目撃証言によると、ペケジは借金を返したあと「いまは廃坑になっている、ネブリ鉱山に眠る財宝を掘りに行く」と言っていたそうである。
そういうわけで、鉱山の中をいろいろ探ってはみたのだが、とうとう発見できなかった。ただときおり、おにぎりを包む笹の葉など、真新しい〝食べがら〟が大量にあったので、情報自体が間違っているわけでもなさそう。
「ま、気にしても始まらないさ。それより茶屋にでも行こうよ」
お竜が嬉しいことを言う。確かに、今満たすべきは食欲だろう。
「いいね、いいね」
お竜は軽く頷く。
不意に身体が揺れた。シレンは、もう歩みだしていた。
「あ、シレン。待ちなよ！」
すぐにお竜が、シレンの横に並んだ。
滝のほうから、水気をふくんだ風が流れてくる。全身の毛が、なびいて気持ちよかった。
最初の岩山の適当な高さのところに、《預かり場》を意味する「預」の看板がかけられていた。
「預かり場が茶屋を始めるとは、目のつけどころがいいよ。この場所だったら、繁盛するはずだ」

お竜が、そんなことを言っている。なのに……
「座る用意もないってのは、どういうことなの？」
どう見ても、営業しているとは思えない。
「本日休店……だってさ」
お竜が戸口を見て、ガッカリしていた。
「うーん、しかたないなあ。ひとまず宿を探そうか？」
そのとき……休業中であるはずの店の中から、豪快に食器の割れる音がした。
お竜は、無言のまま唇に人差し指を当て、ひそやかに言った。
「ちょいと、ようすをみてみよう」
耳を澄ますと、店内から声が聞こえてくる。
「おまえさん、いい加減にしなさいよ！」
「ほっといてくれ！」
「こんなとき、いちばんしっかりしなきゃいけないのは、おまえさんじゃないか！」
お竜が、声を落として言う。
「どうやら……夫婦喧嘩らしいね」
不意にシレンが、近づいていった。
「ちょっと待った」
……と止める間もなく、戸口を二度叩いている。
あたりが静まりかえった。ちょっと間があって、女の人の声が聞こえた。
「どちらさまですか？」
シレンは黙って、ようすをさぐっている。慌てたお竜が、シレンに代わって訊ねた。
「あの、こちらお茶屋さんですよね……」
「まあ、ちょっと待っていてくださいまし！」
足音が遠ざかって行ったかと思うと、今度はドガッと大きな音がした。

「なにするんだ、ララ!」
「いいから、お客さんだよ。さっさと顔洗ってきな!」
「ううう」
再び近づいてくる足音。錠を外す気配があり、ようやく引き戸が開けられた。
「お待たせいたしました。どうぞこちらへ」
ララと呼ばれた、店のおかみさんの顔が見えた。パッチリと大きな目が印象的で、その下にできた隈(くま)が痛々しい。
「こちらは、あたしの連れです」
お竜は説明しつつ、なかに入った。シレンも後に続いた。
まだ朝だというのに、室内は薄暗い。それを補うために灯りもつけられていた。すぐ近くに、頬のこけた男が座っている。生気がなく、目はうつろだった。

囲炉裏(いろり)を囲んで、シレンと一緒に腰をおろすことにする。
「粗茶ですが、どうぞ」
ララが、シレンとお竜の前に茶を置いた。
「オイラには?」
「語りイタチさんには、こっちのほうがいいと思いまして」
驚いたふうもなく、ララはすぐさま水を入れた笹の器を、置いてくれる。その水面はキラキラと輝き、早く飲めと誘惑していた。
シレンの肩から降りて、その水を舐める。笹の香りのする清流の水。
「うん。お茶なんかより、こっちのほうがよっぽどいいよ!」
ようやくひと心地ついた。
ララは気が強いが、そのぶん気配りもする、いいおかみさんのようだ。なのに主人のほうは

……落ち着かない感じで、片隅で手をさすっている。
「こちらは主人のボボロです」
ララはわずかに微笑むと、ボボロの脇に座る。灯火が揺らめくかすかな気配があたりを支配し、ときおりそれに、お茶をすする音が混じる。
ボボロはしばらく震えていたかと思うと、やがて側にあった徳利（とっくり）に手を伸ばし、手酌で猪口（ちょこ）に注ぎ始めた。ララの目が、鋭くなった。
どうにもこの茶屋はおかしい。何があったのだろう？　シレンは先ほどから、油断なく観察し続けている。
「おかあさん？」
そのとき家の奥のほうから、ゆっくりした足音とともに、可愛らしい小さな声が聞こえてきた。
「スララ！」
ララは悲鳴のような声で、娘に駆け寄った。
「ダメでしょ、ひとりで歩いちゃ！」
「家の中だから、心配しなくても大丈夫だよ、おかあさん」
スララと呼ばれた少女は、なぜか母親とは関係ない、あさっての方向に手を伸ばしている。
「もしかして……」
お竜が言葉尻を濁した。ボボロは酒をあおり、吐き捨てるように言う。
「スララの目は、光を失ったんですよ……」
やりきれなさが、こめられていた。
「そんな……」
お竜の言葉には〝やっぱり〟という響きが混ざっていた。
「お客さん、いるの？」
スララは耳ざとく聞きつけたらしい。うつろ



な目がこちらを向き、ふらふらと近づいてきた。
「あぶない！」
ララの叫び声。スララが脇に置いてあった盆を踏んだ。
「あっ！」
足を滑らせたスララが、前のめりに倒れそうになる。その先には囲炉裏がある。マズイ！
「きゃぁあああ！」
スララの悲鳴。シレンが片膝をたてた。
それより早く、お竜が跳んだ。
「ええいっ！」
ふわりと囲炉裏の灰がまき散らされ、視界が霞む。続けてボフッという、人と人とが重なりあう音がした。
「くっ！」
声をあげたのはお竜だった。スララの下に仰向けに滑りこみ、抱きかかえる形で床に、転がっている。
スララは無事のようだ。
「ふーう、ひやっとした……」
思わずため息が漏れた。
「ご、ごめんなさい」
スララは、そのままの姿勢でかたまっていた。
「あたしなら大丈夫だよ、スララちゃん」
お竜は全身灰だらけだが、ニッコリとそう言った。
「お、おねえちゃん……ありがとう」
スララの言葉の後のほうは、ほとんど聞き取ることができなかった。

ララがスララを部屋に連れ戻した後は、再び沈黙が訪れた。
ボボロはまた、猪口に酒を注ぎはじめる。
お竜は身体から灰を落としていたが、眉を寄

せていた。
ふだんはあまり表情に変化のないシレンも、口元に怒りをあらわにしていた。
こんな状況は耐えられない。
「でもさ……」
話しかけようとしたところ、ララが戻ってきた。
「スララは眠りました……ご迷惑をおかけしてしまいました」
そう言って、頭を下げてくる。
「いいえ。お気になさらなくても、けっこうですよ」
お竜が慌てて言う。そしてボボロに真剣な眼差しを向け、ふたたび口を開いた。
「それより、事情を聞かせてもらえませんか？ここで逢ったのも何かの縁。お力になれるかもしれません」
ボボロは徳利を床に置き、じっとお竜の顔を見つめる。それから視線を外すと、重い口を開き始めた。
「一月(ひとつき)ほど前のことです……娘を連れて仕入れの旅に出ていた途中、モンスターの襲撃に遭いまして。護衛もいたので、撃退はできたのですが……おばけ大根の投げた毒草が、スララの目に当たってしまいました。命に別状はなかったのですが……」
その程度なら、方法はいくらでもありそうなものだ。お竜が提案した。
「〝めぐすり草〟があれば、すぐにでも治るんじゃないですか？」
ボボロとララの表情は、こわばったまま。
「もちろん私も商人のはしくれ。それは存じておりますが……手に入らないのです」
ボボロは拳を握りしめ、身体を震わせている。

「どういうこと？」
自生しているから、入手は簡単だと思ったけど。
「四方八方手を尽くしたのですが、どこの市場にも出まわっていません」
それは初耳だ。
「でも、何か手があるんじゃない？　直接、野山に採りに行くとかさ」
「もちろん行きました……ですが」
ボボロは再び酒をあおった。その左腕の袖口から、なにか白いものが見えた。包帯のようだった。
お竜が問いかける。
「それじゃ、足は運ばれたんですね？」
それには、ララが沈んだ声で答えた。
「ええ……後から助けが行かなかったら、主人もどうなっていたことか……」

ボボロは酒を再び注ぎながら、後を続けた。
「この奇岩谷を降りると、テーブル・マウンテンに向かって〝瀑布湿原〟が広がっています。〝めぐすり草〟は、昔からそこに群生しているのですが、道も視界も悪くて迷いやすい。それだけならまだしも……今ではモンスターがはびこっているため、私ごときでは、どうすることもできないんです」
不意にシレンが立ちあがり、家が少し揺れた。いつもは止め役にまわっているが、今回ばかりは、シレンに大賛成だった。
「それだけ聞けば充分。後はオイラたちに任せておいてよ！」
シレンの気持ちを代弁すると、ボボロの手から猪口が落ちた。
お竜が後を続ける。
「すぐ戻ってきますから、ちゃんとお酒、ぬい

ておいてくださいね」
ララの目は、驚きで満ちあふれていた。
「ほんと……ですか？」
「ええ、安心して待っていてくださいな」
お竜が大きく肯くと、ララが黙って頭を下げた。ボボロが遅れて、ララと同じことをする。
シレンはすでに出口にいた。それを追って、右肩に乗る。
戸口を抜けると、追い風がシレンの背中を押した。まだ日は高い。うまく行けば今日中にも、戻ってこれそうだ。
「さあ、行くよ。シレン！　お竜さん！」
「あいよ！」
お竜の威勢のいい声。
シレンは黙って、歩みを速めていた。
テーブル・マウンテンの巨大な柱から流れ落ちるしぶき。瀑布湿原の名前のとおり、一面が水で覆われていた。深い霧がたちこめ、足元すらかすむほどだ。
その足場も悪い。水気を帯びた雑草のせいで、非常に滑りやすくなっている。さらにあちらこちらに、大小の沼が点在していた。
「こりゃ確かに、すごいや。ふつうの人間じゃ、どうしようもないね」
さっきからシレンは、長めの樫の棒で、少しずつ地面の先を探りながら進んでいる。慎重になるのはわかるが、いつまで経っても捜索が終わらないいんじゃないか？
「ここはオイラの出番だね」
シレンの肩を蹴って、地上に降り立った。そのあたりは、ひどく柔らかい。
クンカ、クンカ。
〝めぐすり草〟だったら、前に匂いを嗅いだ

ことがある。視界が悪くても、こうすれば大丈夫。
「間違いない。こっちだよ!」
シレンとお竜に呼びかける。
「へえ……あんた、やるじゃない。ただの大食らいなイタチじゃ、なかったんだね」
お竜が、驚いたように目を丸くしている。
「オイラを何だと思ってたんだい!? 減らず口たたいてるだけなら、置いてくよ!」
そう言って、先を急ぐ。
「はいはい、わかったよ。なんだか、いつもと立場が逆だねぇ……って!」
そのとき、お竜の言葉が止まった。かと思うと、礫(つぶて)が前方に飛ぶ。
少し先の草むらで、何かが倒れた。
「あれは……めまわし大根だね」
紫の葉っぱの巨大な大根。その手から、なにか草がこぼれ落ちた。"混乱草"に違いない。
「モンスターは、あたしとシレンに任せておきな」
"めぐすり草"の匂いに集中していたので、そんなものがいるなんて気づかなかった。やっぱり、お竜は侮れない。
シレンが前に出た。
「危ないよ、シレン。オイラが先導するって!」
少し不満そうなシレンの顔。追い越して先頭に出る。
「さあ、しっかりついて来て!」
そう言って、匂いをたどるのに集中する。
イタチの通れる道ならたくさんある。人も通れる道を選ぶのが厄介だ。自分だけなら、もうとっくに着いているはずだが……それではモンスターに対応しきれない。

クンクン……クンッ？
〝めぐすり草〟の匂いに混じって、前方から人間のそれがする。
「なにか、聞こえないかい？」
お竜も気がついていた。立ち止まって、耳を澄ます。
「誰かぁー、助けてぇー！」
間違いない。遠くから悲鳴が聞こえる。かん高いが、男の声だ。
「この先に、誰かいるよ！」
「なんだって!?」
お竜が驚くのと同時に、その横をシレンが通り過ぎた。
「急に飛び出すなよ、シレン！」
慌てて追うと、後ろからお竜の足音が追いかけてくる。
シレンに追いつこうと、力をこめて地面を蹴った。
「はっ！」
ようやく並んだとき、必死の、それでいて妙に間延びした声が、ハッキリと聞こえてきた。
「助けて！　ブクブク、プハー、誰かぁ！　うー、ブクブク……」
「この声は……ペケジだね！」
お竜の鋭い声が飛んでくる。
「急ごう！」
全速力で、その声の方向へ駆けた。

そこには、すでに首のあたりまで沼に沈んだ男がいた。頭の真ん中に、ちょこんと髪が載っている。まさしくペケジだ。
「あ、アニキ……それにお竜さん！　やっぱり、助けに来てくれたんだね！」
盗人(ぬすっと)のくせに、なんて調子がいいんだろう！

「自業自得だから、放っておいてもいいんじゃない？　少しは反省するよ、きっと」
そう言うと、お竜が反論する。
「この状態じゃ、そうも言っていられないだろ」
シレンの顔色は〝助ける〟から一貫して変わらない。
ペケジはなにかしがみつくものを求め、あたりを見回している。
お竜が荷物を探った。
「シレン、こいつを使おう！」
そう言ってお竜は荒縄を取り出すと、先端に石を結びつけた。その縄をグルグルと回す。石つきなので勢いがよい。
「はっ！」
ペケジの手前に落ちる。
「こいつに捕まりな！」
「う、うん。ありがとう、お竜さん」

その縄を、ペケジが摑んだ。
「いくよ」
シレンもその縄を、両手でがっしりと握る。
そしてお竜とともに、歯を食いしばって縄を引っ張りはじめた。
「うん……くぅ」
さすがに力仕事は無理なので、応援だけする。
「がんばれ！　がんばれ！　よいしょ！　よいしょ！」
引っ張るごとに、ペケジの小太りの身体が見えてくる。
「アニキ！　お竜さん！　あと少しだあああ」
ペケジは、ちょっと涙声になって叫んだ。
そのとき、背後で茂みが揺れた。前に突き出た鎌のような腕。黒光りする体から大きな頭が突き出し、赤い目が光っている。
「後ろっ！　モンスターがいるよ！」

ペケジに気をとられて、接近を許してしまった。
その黒いモンスターは四本足を巧みに動かし、近づいてくる。
「くっ……シレン、ここは頼んだよ！」
お竜が縄から手を離した。
「うわっ！」
ペケジがバランスを崩す。
シレンが一層力をこめ、縄を引っ張る。
お竜の礫の二連撃。
黒いモンスターは声をあげるが、倒れない。
再び地面を這うように前進してくる。
お竜が小太刀を抜き、踏みこむ。
そこへ黒いモンスターの腕が続けざまに振りおろされる。
「危ない！」
お竜は横っ飛びして、その攻撃を避けた。
「ちっ」
お竜の衣服が、わずかに切られている。鎌のような手は鋭い。蟷螂（かまきり）のようなモンスターだ。
「はーあ、助かった！」
呑気な声が聞こえてきた。ペケジは沼の縁で、ひと心地がついたといった風情だ。
シレンの姿はすでにそこにはない。モンスターの背後にまわり、カタナを抜いていた。そして、風のように迫る。
それに気づいたのか、黒いモンスターは振り返って、狙いをシレンに定めた。
「シレン！」
お竜の金切り声。
二つの鎌が振りおろされる。
シレンのカタナが振られたかと思うと、鎌が地面に落ちた。返す刀で、シレンはもう一方の鎌も断ち落とす。

モンスターは四本足をバタバタさせて、苦痛にうめいている。まだ倒れないのか？
その背には、お竜が迫っていた。小太刀が突き刺さる鈍い音の後、黒いモンスターは地に伏した。
シレンは刃を懐紙で拭うと、鞘に収める。
「ふーう、助かったよ」
小太刀をしまったお竜が、シレンに礼を言う。シレンは、軽く視線を外した。いまさら、恥ずかしがることないのにな……
「なかなかしぶといヤツだったね」
お竜もそのモンスターの骸を、しげしげと眺めている。礫は確かに二つとも当たっているのだが、殻を貫くまでには至っていない。
「もうすこし強力な飛び道具を、仕入れたほうがいいかなあ……」
そうつぶやいた。

「ああっ！」
いきなり叫び声がした。ペケジだ。今度はなんだっていうんだ？
「どうしたんだい？　ケガでもしたのかい？」
お竜が、気づかうような声をかけた。
「おにぎりが……オレのおにぎりが、デロデロになってる！」
ペケジはいまにも泣き出しそうな顔で、自分の腰袋の中を見ていた。
「そんなこと言ってる場合かよ！」
反射的に、声を荒らげてしまう。
「なんて人騒がせな……」
お竜がガックリと肩を落とした。
シレンは、今にも吹き出しそうな顔をしていた。呑気すぎるぞ、シレン！
「ところで、オイラたちから盗んだ路銀はどこ？」

少しきつめに、問いかけた。
「えっ？　あれってオレにくれたんじゃなかった？　もう全部、使っちゃったよ」
ペケジは、ケロッとそんなことを言う。数年はゆうに暮らせるだけの金を……そんなに借金あったのかよ！　なんだか、思いっきり疲れてしまった。
シレンの顔はサッパリしたもの。それもなんだか、やるせない。
「なんでこんなところにいるんだい？　鉱山に潜ってたんじゃなかったのかい？」
お竜がペケジに訊く。
「そうそう！　鉱山でお宝を探してたんだけど、なーんにも見つからなくて、メシもなくなったから町に戻ったんだ。そしたら『金返せ！』とか言って、オレをいじめるヤツらがいたんで、逃げてるうちにここに来ちゃって……ははは」
ペケジは少ない髪の毛をかいている。笑ってる場合なのか……借金は全部返したんじゃ、ないのか？
「はーあ」
もうなにを言う気力も出てこなかった。
お竜も、口をポカンと開けている。
当のペケジは、ヘラヘラとした顔をシレンのほうに向けた。
「でもアニキにまた会えて嬉しい。助けてくれてありがとう！」
泥まみれのまま、シレンに抱きつこうとした！
瞬間、シレンの裏拳が、ペケジの左頬に決まる。ペケジはよろめいて、尻餅をついた。
「ううっ、アニキ……これが愛の鞭（むち）ってヤツ、なんだ、ね」
ペケジは、わけのわからないことを言いなが

ら気絶した。
ところで前から思っていたが、なんで「アニキ」なんだ？
シレンはさっさと振り返り、歩き始めた。すべてが解決したという態度だ。確かに、もうこんなヤツとかかわるのは、やめにしたい。
「お竜さん、行こう」
「ああ、でも……」
お竜はペケジを気づかって、ためらっている。
「いいよ、放っておこうよ」
シレンを追うと、お竜も何度か振り向きながら、ついて来た。
そのとき、背後からペケジの声が聞こえてきた。
「待ってくれよ、アニキ！　オレも連れてってくれ！」
もう意識が戻ったのか⁉　すごい回復力だ。
背後からドタドタと足音が追いかけてくる。
しばらく無視して歩くけれど、ドタ足はずっとついてきた。
「シレン……ここはハッキリしておこうよ」
ガツンと一言、言うべきだ。
しかしシレンは……どこ吹く風で、気にしていない。
「ま、いいんだけどさ。後でまた何か起きても、オイラ知らないよ」
先が思いやられる。
思わぬ道草をくったが、ようやく〝めぐすり草〟の匂いに迫った。目の前には、巨大な沼がある。
ペケジが、ヌッと大きな顔を突き出した。
「うわ、こんなの渡れそうにないなあ」
その神経の図太さだけは見習いたい。

「うーん、いったん戻って、別の道を探すしかないんじゃない？」

あたりを見回しながら、お竜が言う。そんなバカな。

「ここを越えたすぐのところに、あるんだよ！」

沼の先を指し示す。間違いなく、そこに生えているのは〝めぐすり草〟。とはいえ、向こう岸までは一丈半（約4～5メートル）。いくらシレンが身軽でも、跳び越えられるものではない。

シレンは、持っていた樫の棒を沼に突き刺した。手が浸かるギリギリのところまで入れ、引き抜く。

「これはまた、ずいぶんと深いようだね」

お竜は、なおも考えている。

その脇では、ペケジがボケッとしていた。

「ところで、みんなしてなにしているの？」

コケそうになった。

「あそこにある〝めぐすり草〟を採ろうとしてるの！」

説明すると、ペケジの生返事が返ってきた。

「ふーん、そうなんだ」

なんて手応えのないヤツだ！　もういっぺんくらい、沼に突き落としてやろうか？

「はっはーん」

そのときお竜が、何か思いついた顔つきをして、こちらを見た。

「コッパ……ここは、あんたにやってもらうよ」

その表情に、一瞬、怖気（おぞけ）をふるった。

「そ、それはかまわないけど……なにか秘策でもあるの？」

お竜は道中袋から、再び荒縄を取りだす。泥は落としてあったが、まだ湿っていた。

「これに縛りつけて、あんたを投げるんだ」

言うが早いか、お竜は縄を巧みに操っていた。
「冷たっ……って、え？　え？　え？」
理解が追いついてきた頃には、すっかり腹に結びつけられていた。なんだか魔法みたいだ。
「……ちゃんと向こうまで届くの？」
縄を巻きつけられたことはともかく、途中で沼に落とされては、たまったものではない。
「見な」
お竜は左腕の袖をめくり、輝くいぶし銀の腕輪を示した。
「この〟百発百中の腕輪〟がある限り、心配ないよ。そしてこの縄が丈夫なのは、さっきのペケジの件で証明済みだろ？」
そういえば、今までお竜さんが狙いを外したのを、見たことがなかった。
不意にお竜が、真剣な目つきをする。
シレンもジッと見つめてくる。

ペケジは……向こう岸の〟めぐすり草〟を眺めたままだが。
ここでやらなきゃ、男がすたる。
「心配ないさ。必ず取ってくるよ！」
胸を叩くと、シレンが軽くうなずく。
お竜から声をかけられる。
「準備はいいね！」
「いつでも！」
すると、お竜が縄を引っ張った。
「ぐはっ」
縄を巻いた腹の部分が、引っ張られて痛い！　しかもあろうことか、お竜は縄を振り回しはじめた。
「目が、目が回るぅうううう」
なにがなんだか、わからなくなってきた。
「いっけぇー！」
お竜のかけ声と共に、宙に舞いあがる……

今は"めぐすり草"を取らなくちゃならない。思わず腰が引けそうになるが、このまま尻尾を巻いて逃げたんじゃ、その名がすたる。みんな見ててくれ。イタチ一匹コッパは漢でござる！

「ぬぬう」

なるべくモンスターのことは気にしないようにしながら、渾身の力をこめた。

その間にも、ギャザーは腹を地面に摺りながら、何本もの足を動かして近寄ってくる。

「抜けろ、抜けろ、抜けろ!!」

ギャザーの巨大なハサミが、恐ろしい速度で接近してきた。

頼むから、抜けてくれ!!

ギャザーの目がこちらを向いて、怪しく輝く。

ううっ、イヤだ。

ハサミが持ちあげられた。真っ二つだけはごめんだ！

「うぐっ」

気づいたら、向こう岸だった。

「よっしゃあ！」

お竜の声。

「うううううっ」

朦朧とした目で、前を見る。そこはまさしく"めぐすり草"の宝庫である。

一気に駆けて、それを摑む。

「うぬう」

踏んばったとき、背後から草ずれの音がした。

「うん？」

振り向くと、大きな目を鈍くきらめかせたギャザーがいた。や、やばい！　ボボロが言った通り、本当にモンスターが多いんだ！

「コッパ、急ぎな！」

お竜の切迫した声が飛んで来た。

「わかってるってば！」

ギャザーのハサミが両脇から襲ってくる！
後ろは泥沼で、逃げ場はほとんどない！
助けてぇ！　こんなところじゃ、死にきれないよ！　死んだら、化けて出てやる！
思わず目をつぶる。
一巻の終わりかと思った瞬間。
「一、二の三！」
お竜のかけ声。
腹に衝撃が来た。〝めぐすり草〟だけは、死んでも放すものかと抱えこむ。
「ぬわぁぁぁあああ！」
宙に浮いた。
背後で、ハサミの閉じられる嫌な響き。
全身の毛を、爽やかな風がなでていく。
ゆっくりと目を開ける。まだ生きていた。この爽快感！
「んべっ……」

「はっ！」
その瞬間、尻餅をついた。前足には〝めぐすり草〟がある。どうやら、根ごと引き抜くことができたようだ。
大地をえぐる鈍い音がした。股間から一寸（約三センチ）も離れていない場所に、ギャザーのハサミが突き刺さっていた。
「うひゃあ！」
しかも、もう一方のハサミがなおも追いかけてくる。息つく暇などない。
転がって、なんとか身をかわす。
「お竜さん、手に入れたよ！　早く早く！」
声を張りあげた。
「シレン、ペケジ！」
それだけで、ふたりには伝わっていた。
「任せておいてよ！」
ペケジは調子よく応じ、お竜の後ろについた。

そんなものを感じる間もなく、口のなかに泥が入る。
「ぺっぺっ！　いったー、それに冷たっ……」
落ちたのは、沼と足場の境目だ。
向こう岸では、ギャザーが悔しそうに、ハサミをシャキンシャキン鳴らして地団駄を踏んでいる。冷や汗がにじみ出た。
「んもう……もっとちゃんと引っ張ってくれよ。尻尾が泥で汚れちゃったじゃないかあ」
ふさふさの自慢の毛が真っ黒だった。体を起こし、前足で可能な限りの泥を払うと、すぐさま文句を言ってやる。
「やったぁ、成功だよ、アニキ！」
まったく聞こえていないペケジ。
「うまくいったね！」
お竜はシレンの手を握りしめ、上下に振っている。
「あのさ。喜びのところ、申しわけないんだけど、がんばったのは、オイラじゃないの？」
頭に血がのぼったが、なるべく声を抑えて言った。
「あ、大丈夫だった？」
声をかけてきたのは、意外にもペケジだ。こいつ割といいヤツなのかもしれない。
「よかったねえ、シレン！」
お竜はやっぱり、こっちを見ていない。どうもシレンやお竜には、自分の声は聞こえてないらしい……許せん！　ふたりの前に出て、尻尾をブルブル振ってやる。
「ひゃあ、何すんだよ。このバカイタチ！」
飛び散った泥が、お竜の顔を直撃した。
「へっへーんだ。ここまでおいでー」
お竜は顔を手の甲でぬぐいながら、追いかけてくる。

「待ちな！　ゆるさな……ああっ」
お竜が見事にぬかるみにはまる。そこは、イタチしか通れない道なのだ。
「あっはっは、ひっかかった！」
「うくぅ」
膝までつかったお竜に、シレンが手を差し出す。
「シレン、あたしは大丈夫だよ」
言いながら、素直にシレンの手を取るお竜。
「あっはっは。みんななんだか、楽しそうだね」
なんでこいつは、そんなに笑ってられるんだ？
ま、いいか。みんな無事だったし。今は自分がおとなしくしておこう。それが大人というヤツだ。
帰り道は、もと来た道を辿ればよいだけなので、ラクだった。
奇岩谷に戻ったときには、日が地平線に消えようとしていた。
「たっだいまぁ！」
大きな声を張りあげる。
「アニキ、ここが今日の宿？」
あいかわらずついてきたペケジが、妙に間の抜けた声で言った。
シレンは応えず、ボボロの家の戸を叩いた。なかから、駆け寄ってくる音がする。
「いま開けますから……」
声の主は、ボボロだった。戸が勢いよく開けられる。
「ああ、よくぞご無事で……」
さっそくお竜が中に入った。
「ほら〝めぐすり草〟だよ」
ボボロの身体からは、もう酒の臭いはしなか

った。
お竜は〝めぐすり草〟をすりつぶして煎じると、茶碗へと注いだ。
それが冷めるのを待つ。
「はい、スララちゃん」
受け取ったスララは、臭いに顔をしかめている。
「くさーい。ほんとに効くの？」
半信半疑のようだ。
「くさいのは、効き目のある証拠だよ」
お竜は、そう言って勧める。ボボロとララは、祈るようにスララを見守っている。
「わかった。わたし、つける！」
スララは覚悟を決めると、大きく目を見開いて、まっすぐ上を見あげた。
「ようし、いい子だね」
お竜は、その煎じた液体に右の薬指を浸すと、スララの濁った目の上でゆっくりと動かす。緑色を帯びた透明な液体が、しずくとなって落ち、少女の瞳の上で弾けた。そしてもう一回。
スララは、目をパチパチさせた。
思わず身を乗り出して、訊ねていた。
「どう？」
「そんなに慌てるんじゃないよ。少しおとなしく待ってな！」
お竜が言う。スララは何度かまばたきし、それから思いきったように目を開けた。
「ここは、お家なの？　わたしの部屋？」
つぶやきながら、スララは視線を左右にさまよわせている。まだ、よく見えないのか？
「スララ……」
ララは今にも泣きそうな表情で、ゆっくりとスララを抱き寄せる。それからしゃがんで目線

をスララと同じにし、一生懸命、娘の表情を読み取ろうとし始めた。
「おかあ……さん？」
スララは、何度も目を開けたり閉じたりする。
「そうだよ、スララ。お母さんはここだよ」
懇願するようなララの声。なんだか、見ていられない。
「スララ、大丈夫だ。焦らなくてもいい。ゆっくり、ゆっくりな」
力強いボボロの、励ます声。
「うん」
スララは、また目を閉じた。
もう、本当にじれったい。薬は本当に効いてるの？
そのとき、スララの目が、今度こそはっきりと見開かれた。
思わず息を呑む。眼球の白いくもりは、もうなくなっていて……
「ああ……おとうさん、おかあさん、見える。見えるよ！　みんなの顔が見えるよ！」
スララの顔がパッと明るくなった。目に光が戻ったのだ！
「スララ……よかった」
ララが娘を抱きしめた。ボボロは、こちらを向き、深々と頭をさげた。
「みなさん、本当に言葉もありません……ありがとうございました」
ララもスララを抱えながら、それにならう。
「あたしたちは、したいと思ったことをしただけだよ。それに……」
お竜は言葉を切ると、こっちをジッと見つめた。なにやらイヤな予感がした。
「一番がんばったのはコッパだよ。匂いを嗅ぎわけて、その〟めぐすり草〟の生えてる場所に

導いてくれたし、単身、草を摘み取ってくれたし……もう大活躍！」
あら？　沼地にいたときとはえらい態度の違いだ。ようやく自分のすごさを理解してくれたのだろうか？　だったら体を張って、がんばったかいがあったというものだ。
「なーに、オイラにかかれば、このくらい楽勝だよ。えっへん」
胸を張ってみせると、ボボロが感嘆の声をあげた。
「そうでしたか……コッパさん、重ねてお礼を言わせていただきます」
ララもボボロに合わせて、頭をさげる。
「本当に、ありがとうございました」
「そんなに畏まらなくても、いいってば」
と言ったものの、正直悪い気分ではない。
「コッパちゃんって……イタチなの？」
パッチリとした瞳が、正面からこちらを見つめていた。
「そーよぉ、語りイタチって言って、とっても頭がいいんだよ」
お竜が、ニヤニヤ笑いながら言う。
「ま、まあな」
言っていることは真実にしても、お竜の優しげな声色は、とてつもなく不気味だ。
「すごーいイタチさんなんだね？」
そこまで驚いてもらうと、やはり鼻が高い。
「触らせて、抱かせてよ！」
「えっ？」
スララの申し出の意味が、理解できなかった。
いきなり、わきの下に手が伸ばされる感触があって、自分の体が宙に浮いた。
「こら、お竜さん、なにすんだよ！　はーなーせー！」

暴れてみるが、いつになくしっかり摑まれている。

「はーい、スララちゃん」

な、なんですと？

「わーい」

抵抗する前に、スララに抱きしめられていた。

「うわ、ふさふさしてるね。それに柔らかーい」

「ぎゃあっはっは！　くすぐったい！」

スララが、体のあちこちを触り始めた。それが妙にこそばゆい。

「へえ、そうなんだ？　いーなあ、それ」

ペケジが、指をくわえながらものほしそうに見ていた。よ、よせ。スララはともかく、おまえはよせ！

「おやおや、噛まれなくてよかったねえ、スララちゃん」

お竜が、さもビックリしたという顔をする。

だから、その演技はやめろ！

「え？　コッパちゃん、噛むの？」

「噛まないよ！　オイラ知性だけじゃなく、良識もあるイタチなんだぞ」

「だってさ。紳士なイタチでよかったねえ」

またまたお竜が、妙なことを言い出す。

「そうなんだぁ？」

首をかしげて感心するスララの顔もまた、なかなか賢そうだった。

「そ、そうだよ。そんじょそこらのケダモノと、一緒にするなってんだ！」

お竜を睨んでやると、またニヤッと笑い返される。

「そうだよね。紳士なんだったら、女の子のささやかな願いを無下に断ることはできないよねえ」

「ぬぬぬぬぬ……」

「コッパちゃん、だーい好きぃ！」
「うほっ！」
さっきにも増して、スララのくすぐり攻撃は激しくなる。
「や、止めろって！　ぎゃははははは」
い、いかん。このままでは笑い死にしてしまう。そんなことにでもなったら、語りイタチとして末代までの恥だ。
「ぬぁぁああ。ぐぁあああ！」
なんとかその魔の手から逃れようと、必死で身を翻したとき……
「ぐすん」
「え？」
見れば、スララが泣きそうになっていた。
「コッパちゃん、わたしのことキライなの？」
「違う違う！　そうじゃなくてさ……」
「よかった」
スララの顔が近づいて、その唇がほっぺにあたって……
ちゅっ。
「コッパちゃん、ありがとう！」
あれ？　何が起きたんだ？
「えへへ」
スララは無邪気に笑っている。なんだか、尻尾のあたりがくすぐったい。
「い、いや……だから、礼なんていらないんだけど」
「あれ、コッパ？　顔、赤くなってる」
お竜が、一段といやらしい顔をしている。
「な、なに言ってるんだよ　だいたい、この程度のことで、このコッパさまが動揺するわけないだろ！」
「ブッ！」
シレンが吹き出した。

「おい、シレン。何がおかしいんだよ！」
なんでシレンは、こういうときだけ大げさに反応するんだ！
「コッパ。本当に尻尾の先まで、真っ赤になってるよ。ふふふふ」
続けて、お竜の笑い声がする。
ボボロとララ、そしてスララも笑い出す。
「あはははは……」
ひとりペケジだけが、意味がわからずポカンとしていたようだが、やがてつられて笑い出した。
「がははははは……」
なんでこうも、さらし者にならなくてはいけないんだ？
怒りは収まらないし、さっきからずっと尻がムズムズしてしかたがなかった。
「くそぅ、もう勝手にしなよ！」

けっきょくこの日はボボロの家に泊まり、ナオキとかいう〝伝説の料理人〟直伝の焼鳥を、たらふくご馳走になった。そのおかげで昨日の悪夢も忘れ、気分よく起きることができた。
「おじさん。焼鳥、ごちそうさま！」
出がけに、ボボロに礼をいう。
「お世話になりました」
お竜がボボロたちに深々と頭をさげると、ペケジもそれにならってゾウリ頭をさげた。シレンは軽く頷いただけだ。
「それはこちらのセリフです」
ボボロはあくまで丁寧である。
「これもお持ちください」
ララが包みを差し出してきた。
「今日の昼御飯です。コッパさんには、焼鳥も詰めておきましたよ」

「ううっ……感激だぁ！」
いたれりつくせりとは、このことだ。峠の茶屋というものは、いつもこうであってほしい。
「ところでみなさんは、これからどちらへ？」
ボボロが訊ねてくる。その目には意味深な色がある。ここは無口な仲間のために、自分が探りを入れてやらずばなるまい。
「まあ、風の吹くまま、気の向くままの風来人だからね。ただこのあたりに、伝説の〝黄金郷〟があるっていう話には、興味があるよ」
「オーゴンキョー？」
ペケジが素っ頓狂な声をあげた。ボボロは、真剣な顔つきになった。
「はい。テーブル・マウンテンの頂上、そこは黄金の大地と呼ばれ、昔から〝黄金郷〟であると言い伝えられています」
やはりボボロは知っていたのか。茶屋はうわさが集まる場所だけに、そうであってもおかしくはないのだが……
「その地を踏んで、帰ってきた余所者はおりません。土地のものでも、最近は行く者が絶えました。しかしあなたさまなら必ずやそこに到達して、そこに巣くう呪いを解くことができる……そんな気がいたします」
シレンの目が輝きだした。真の冒険を嗅ぎつけたときに見せる、特有の表情だ。
「呪いか……なんだかおもしろそうだね」
不謹慎なことに、お竜もすでに乗り気だ。
「アニキが行くなら、どこでもついて行くよ！たとえ火のなか水のなか。あ、泥のなかは、もうこりごりだなあ」
ペケジの調子のよさは、あいかわらずだ。黄金郷が何かも、わからないだろうに。
「もし、その土地の呪いを解いてくださるとい

うのでしたら、〝黄金郷の血統〟を引く人々の住む村への道を、お教えいたします」

ボボロの目には、これまでにない光が宿っている。茶屋の主人としては、異常なほど鋭い眼差しだった。

「ははーん」

お竜の目も、それに劣らない輝きに満ちた。シレンはというと……唇の端に薄笑いを浮かべている。

「どうかなさいましたか」

こちらの怪訝な表情を読みとったのか、ボボロが訊ねてきた。

「あ、うん。なんでもないよ」

とっさに、そう答えていた。ボボロはなにやら切ない顔になると、

「私も一度、その土地を拝んでみたいと思いましてね。……何か商いのタネでも仕入れられるのではないかと、密かに期待してるのですよ」

とってつけたようにそう言うと、あとは黙ってしまった。

「むむーう」

ボボロが本当は何を想っているか、正直よくわからない。しかし、もともとこの噂を聞いて、こばみ谷を目指したのである。ここで出会ったのも何かの縁。その願いを叶えてあげるのも一興だろう。なにより呪いごときに尻ごみしていては、風来人の名が廃るというものだ。

「シレン、ようやく目的の場所への手がかりが聞けたね」

そう言うと、シレンは力強くうなずいた。

「では、引き受けてくださると……」

涼しい風が届き縞合羽がザザッと音をたてた。クロンの追い風である。

お竜が答えた。

「まあ、何ができるかはわからない。けど、行ってみなくちゃ、何もできないだろ。すべては、それからだよ」
「しかし、命の保障は……」
ボボロの声が低くなる。シレンがさっと近づき、男の肩に手を乗せて言った。
「生死は風が決める」
「シ、シレン……」
「アニキぃ……」
お竜とペケジは、開いた口が塞がらないといったようすだ。実のところ、自分もマトモなシレンの言葉を聞いたのは、何ヶ月かぶりなのだ。それだけ本気ということだ。曇りのないシレンの視線を、真っ向から受け止めるボボロ。するとボボロは、肩の重荷がすべて下りたような顔をして軽くため息をつくと、笑顔を返した。
「わかりました。シレンさん、あなたに預かりものがあります」
シレンが怪訝(けげん)な顔をする。昨日まで、ボボロとは知り合いでも何でもなかったのに、いきなり預かりものとは？　いったい誰が何を用意してくれたというのか？　やはりボボロは、〝血統を引く者〟なのか？
ともかくクロンは、これから極上の冒険を用意してくれそうだ。それが待ち遠しい。

ボボロが倉の奥から取り出してきたのは、壺であった。ちょっと見、なんの変哲もないように思えるが、不思議なことに、何度見てもいつまで見ても飽きがこない。
「あまり芸術のことはわからないけど……この壺からは、なんだか〝凄い〟っていう気が漂っているね」
お竜が寸評した。確かに不思議なにおいが、

プンプンする。ハチミツのような甘さに、クラクラするような深い芳香がある。
「おわかりになりますか。これはワナ師でもある、陶芸家のガイバラ先生の最新作です」
竹林の村の《酔いどれ亭》で出会った、壺の老人との一件を思い出した。
「え？　ガイバラって、あのガイバラ？」
思わず、そう言っていた。
「ええ。これはガイバラ先生の〝完璧な合成の壺〟です」
ボボロの言葉に、今度はお竜が声を荒らげた。
「ええっ！　あの〝合成の壺〟が完璧に!?」
ふむふむ、お竜は壺について、少し知識があるのだな。
シレンは黙ったまま、壺をまじまじと見ていた。シレンには違いがわかるのだろうか？
ペケジはその後ろから、同じくらいマジメに観察しようとしていたが、何度も何度も首をかしげている。何も理解していないようで、ハテナ・マークが頭のまわりを飛び交っていた。ペケジだから、しかたない。
ボボロは、神妙にお辞儀をしてから続けた。
「ガイバラ先生から『〝ワナ師の腕輪〟を持つものに授けよ』と、言いつかってあります。預かり場を続けて十五年の私の鑑定眼に狂いがなければ、その右腕にしっかりはめられている腕輪が、まさにそれではありませんか？」
シレンは、ゆっくりと腕をまくり、それをボボロに見せた。
「なんなの、アニキ？」
ペケジが食い入るように見つめる。声こそ出さないが、それはお竜も同じだった。
腕輪には、ぐるぐる回る迷宮のような印が描かれていた。それは深いダンジョンの底で、手

に入れたものである。
ボボロはゆっくりとうなずき、壺をシレンに手渡しながら言った。
「ガイバラ先生は『真に必要なものがあるとき、いちばん大切なものを二つ入れるのだ。それらは合成され、思いもよらぬ力を宿すであろう』とおっしゃっていました。私が思うに、普通の〝合成の壺〟のように単に強化するだけでなく、より完璧なものに変化させてしまう力があるのではないでしょうか？」
シレンは無言のまま、試すようにさまざまな角度から壺を覗きこんだあと、無造作とも言える態度で、道中袋の中にそれを放りこんだ。
「うわっ」
「そんな乱暴に……」
ボボロとお竜が、呆気にとられていた。
シレンは「心配ない」というように、道中袋の上から壺を軽く叩いた。うつろだが深い音がした。
シレンとは、そういう豪快なところもあるヤツなのだ！

「よし、それじゃ行こう！　またねえ！」
見送るボボロ一家に手を振る。
残念なことに〝黄金郷〟の秘密について、ボボロもそれ以上知らなかった。ともかくテーブル・マウンテンにある村までの道は聞いて、地図も描いてもらった。あとは現地で訊くしかない。当たってくだけろだ。
「また遊びに来てね。コッパちゃん！」
スララが家の奥から飛び出して、手を振り返してくる。
「うう……気が向いたらね！」
このコだけは、どうも苦手だ。

「今日も追い風だね」
お竜が軽やかに言った。朝靄もごく少なめで、太陽がよく見えた。昼がくるのが、じつに待ち遠しい。

第五幕　故郷への帰還

「戻ってきたでやすな……」

ケチは頭上を見あげるが、聖地テーブル・マウンテンは薄い雲の膜に覆われて、その山容はぼんやりとしか拝むことができない。頂から流れ落ちる清らかな水音だけが、あたりを支配していた。

その根元に、ぽっかりと空いた洞窟がある。いまでこそ天然の穴に見えるが、もともとは人間によって穿たれたものだ。ここのほかに登山口はない。入ると緩やかな傾斜が続き、やがて頂上に行き着く。

あまりのんびりしてもいられない。シレンたち一行が到着する前に、すべてを済ませておく必要がある。

足を速め、ひとり洞窟に踏みいった。

テーブル・マウンテン内部の洞窟は、不思議なほど明るい。むろん灯りがあったほうが好ましいが、なくてもさほど行動に不自由しない。

「へへへ、あったあった」

かねてより隠しておいた大八車を横転させると、積み荷がダンジョン内に散った。そのほとんどはガラクタだが、役立つものも混じっている。

「次はと……」

仕込み杖を抜き、刀身を確認する。念入りに研いでおいたため、曇りひとつない。

刃を収めると、散乱した荷物から〝困ったときの巻物〟を取り出し、懐に入れた。続いて〝かなしばりの杖〟を手に取り、通路へ向かって歩

き出した。
　次の広間には、おあつらえむきにミノタウロスとマスターチキンがいた。牛と鳥のモンスターだ。こちらの存在に気づかせるため、わざと通路から出る。
　ミノタウロスは斧をかまえ直して、マスターチキンは四本の腕をほぐし、それぞれ近づいてくる。
「鬼さんこちら……でやすぜ」
　背を向けて駆け出す。先ほどの荷物をぶちまけた部屋まで戻ると、モンスターのほうを振り返った。
　マスターチキンを先頭に、モンスターが部屋に侵入してくる。"かなしばりの杖"を振ると、鳥のモンスターは一対の腕を組んだまま、動きを止めた。
　その後ろから現れたミノタウロスが斧を振りかぶる。もう一度杖を振る。牛のモンスターも、その姿勢のまま停止した。
「ふーう」
　使い終わった杖を地面に置く。これで準備は整った。あとはシレンたちがやってくるのを待つだけである。
　不意に身体に震えが走った。無理もない。自分の、いや一族の宿願がかなうかどうかの瀬戸際だ。
「さてと……行きやすか」
　覚悟を決め、まっしぐらに入口に向かって歩き出した。

　何刻ほど経っただろう。山の中では、時間感覚がうまくはたらかない。
　お鷹の砦でシレンと出会って以来、陰ながらそのおこないを観察してきたが、最初に感じた

とおり、恐ろしいほど腕がたつ。人柄も優れており、奇岩谷でのボボロ一家への振る舞いには、感服すらした。このとき、自分の勘は正しかったという確信が生まれた。

　そんなことを振り返りながら身を潜めていると、人の気配がした。

「これがテーブル・マウンテンかあ。間近で見ると、やっぱすごくデカいや！」

　この声は、語りイタチのコッパの声だ。

「そうだね……さて、松明の準備をしなきゃいけないね」

　これは、抜け目のないお竜。

「入る前に、メシにしようよ！　なかに入ったら、なにが起きるかわかんないんだし」

　力じまんのペケジも、ちゃんとついてきていた。これは好都合だ！

「がまんしな！」

「えー！」

「さっき食べたばかりだろ。準備はいいね」

　やはり、お竜のやることは手早い。

「よし。行こう、シレン！」

　コッパがうながしている。

　これで、シレンがいる確証がとれた。もはや、ここにいる必要はない。忍び足で、その場から去った。

　ここまでは一本道なので、迷うことはない。シレン一行の進行速度を考えると、もうやって来るころ合いだ。

　適当な石を二つと、〝かなしばりの杖〟を拾う。金縛りにしたモンスターから距離をとる。

　そのモンスターに石をぶつける。たちまちミノタウロスの荒い鼻息とマスターチキンの怒号が響き渡った。モンスターたちは警戒しつつ、

ジリジリと近寄ってくる。
それに合わせ、少しずつ後ずさる。大きく息を吸った。
「誰かいやせんか！　助けておくんなさい！」
耳を澄ます。
「助けを呼ぶ声だよ！」
「シレン、急がなきゃ⁉」
「何かおいしいもの、持ってるかな？」
声はすぐさま、複数の足音に変わった。予想通りだ。
〝かなしばりの杖〟を、あさっての方向へ投げる。杖は水のなかへ落ち、モンスターたちの歩みが速まった。
「おまえら、こっちだよ！」
お竜だ。目を閉じる。ここから再び、音だけの世界が始まる。
「くらいな！」
お竜の威勢のいい声のあと、モンスターがうめいた。斧や拳が風切り音を発しているということは、目つぶしを放ったか。
鯉口（こいぐち）がきられた。マスターチキンの絶叫と、地響きが続く。この疾風のようなカタナの冴えは、シレンに間違いない。
「ええぇい！」
ペケジの大喝に、ミノタウロスの低い苦痛の声。大地が揺れた。
カタナが収められるのが、気配でわかる。シレンたちの水際だった手並みは、見こんだ通りだ。
「あんた、大丈夫……」
お竜の声がそこで、止まる。
「どなたか、存じやせんが、助かりやした。ありがとうございやす」
「ケチさん⁉」
お竜は、驚いていた。

「ひょっとして、お竜さんでやすか？」
それにあわせて、自分も驚いてみせる。今まで演技の人生を送ってきたのだから、まあ軽いものである。
「そうだけど……」
お竜はいぶかしがり、歯切れが悪い。
「ああ、ケチさんだ！　久しぶりだね！」
ペケジが近寄ってきたので、明るく応えた。
「おお、この声はペケジのダンナ。ご縁がありますなあ」
「オレもケチさんに会えて、すごく嬉しいよ！」
本当に喜んでいるようだ。根が単純なのだろう。
「そのケチさんが、なんでこんなところに居るの？」
コッパの声には、疑いの色がある。気をつけねば。
「じつは……故郷に還ろうと旅商人にくっついて行ったんですが、モンスターに邪魔されやして……あっしはひとり、おいてけぼりを食らってしまいやした、というわけで」
「なるほど……確かに、こりゃヒドイね」
お竜は、ぶちまけておいた荷物を見ているようだ。
「へえー、この山に故郷があるんだ？」
コッパの質問は遠慮がない。
「へい……」
一瞬、言葉を濁す。むろん、これも演技だ。
「このテーブル・マウンテンの中腹あたりに、あっしの生まれ故郷がありやす」
「そうだったのかい」
お竜の声には、納得した響きがある。どうやらこのまま、うまくいきそうな気配だ。
「それじゃさ、オレたちと一緒に行こうよ。こ

の頂上を目指してるんだ！」
ペケジが元気な声をあげる。
「えっ……そいつは助かりやす。ひとりでどうしようかと、途方に暮れてやして……」
あと一押し。
「うーん、ついでっていえば、確かについでなんだけど……」
コッパが首をかしげている。そこにお竜が割って入る。
「まあ、いいじゃない。それに一緒に来てもらえれば、いろいろとね……って、シレン？」
シレンの足音は、すでに先の通路に向かっていた。
「ふーう、ケチさん。遅れないようについてきてね」
コッパが、シレンの行動を解説してくれる。
「ありがとうございやす」

「さ、行こう！」
お竜が軽く背中を叩いてきた。
「ケチさん、後ろはオレが守るから任せておいてよ」
ペケジの声が、大きく山の中にこだました。
「へい、お願いしやす」
そう言って、みんなの後に続いた。
モンスターに関してはシレンがいるので、自分から動く必要は何もない。すべては怖いくらいに順調だった。

村に近づくにつれ、慣れ親しんだ水流の音が大きくなってくる。
細く冷たい風を感じる。出口はすぐそこだ。
「これがケチさんの故郷だね」
お竜が口を開く。
「へい。〝地下水脈の村〟と言いやす」

ゴソゴソと、革が擦れる音がして、コッパがシレンの袋から出てきた。
「静かだけど、ずいぶん暗いところだなあ……」
〝地下水脈の村〟は、天然の巨大な鍾乳洞に作られているので、目が見える者は、イヤでも陰鬱な暗さを感じるてしまう。それに比べれば、盲目の闇のほうがいくらかマシだ。だいたい我らが太陽を拝めないのが、気にくわない。
不意におとずれた沈黙を、誰かの腹の虫が破った。
「腹減ったなあ」
ペケジが素直に自分だと認めた。
「みなさまがたのおかげで、ようやくここまで辿り着けやした。ありがとうございやす」
そう言って頭をさげる。
「このくらい、どうってことないよ。道中、何度も指圧してもらったしさ」
お竜の声には明るい響きがある。
「ま、オイラも、楽しかったから問題ないよ！」
コッパは楽観的だ。そしてまわりに号令する。
「さてと……こんなところでじっとしてないでさ、早く入ろうよ！」
シレンが歩み始める。シレンとコッパは、一緒にいるのが当たり前というくらい自然な動きだ。
「知りあいのところへ、ご案内いたしやす」
そう言って、先頭に立つことにした。
「なんか、注目されてるね、オイラたち」
コッパはキョロキョロしているようだ。
「そうだね」
お竜が同意した。
「お気にさわりやしたか？　めったに人が来ないんで、珍しがっているんでやすよ。勘弁して

やってくだせえ」
　じっさい、村の住民はよそ者を嫌がる。
「でも、せっかく帰ってきたっていうのに、誰も声をかけてこないね？」
　ペケジが、妙に鋭い質問をした。
「……狭い村でやすから、みんな知りあいといえばそうでやす。でもまあ、あっしの場合は、長いあいだ外に出ていたもんでやすから」
　当たり障りのない答えを、返すことになる。
「ふーん、淋しいなあ」
　ペケジの素直な言葉が、胸に痛かった。ともかくここまで来た以上、一刻も早くことを進めたい。
「シレンのダンナ、ご足労ねがえやすか？」
「どうしたの？」
　コッパが訊ねてきた。
「いえね。村長（むらおさ）に帰還の挨拶に行かなけりゃならないんで、よかったらご一緒にどうかと思いやしてね」
「うーん、そんな必要あるの？」
　コッパには、なかなか疑りぶかいところがある。
「シレンのダンナには、二度も命を助けてもらいやした。ですから、その素晴らしい御方のご尊顔を、ぜひとも村長に見てもらいてえと思っておりやす。あっしには見えませんからな」
　そう言うと、シレンが頭をかいているようすが、伝わってきた。しばらくの間のあと、コッパが代弁した。
「シレンは、かまわないってさ」
「じゃあ、あたしも行こうかね」
　お竜も乗り気である。
「そりゃもう、よろしかったらぜひ」
　断る理由はなかった。一緒に紹介できるのは

好都合だ。
「じゃあオレは……そこの宿で寝て待っているから、食事どきになったら起こしてよ」
さっきからペケジは、そればっかりだ。この村には、旅人用の宿は《白滝》一軒しかない。必然的に、そこへ泊まることになる。
「いいから一緒に行くんだよ！　あんたひとり、置いてけるわけないだろ！」
お竜はペケジを引ったてる。
「そうだ！　そうだ！」
コッパが、はやしたてた。
「うううううっ」
ペケジひとりが落ちこんでいるが、温かい声をかける者は誰もいなかった。
「終わったら、たっぷり食えやすから」
「……きっとだよ」
何とかペケジも、納得してくれたようだ。

村長であるヤブメの家は、村のほぼ中央に位置している。門の前には、警護の者もいた。
「あ、ケチさんじゃないですか!?」
その男から声がかかる。
「お久しぶりでやす。ヤブメさまに、取り次いでもらえやせんか？」
「ええ、もちろんですとも」
男はそう言うと、なかへ消えた。
「しっかし、たいそうなもんだねえ」
コッパが、警護のことを皮肉っている。
「少し黙ってなよ」
お竜がたしなめた。
「お待たせしました。ご案内します」
「ごくろうさまでやす」
その先導で、家の中へ入った。

ヤブメの座するところは、ロウソクがやたらと灯されているので、奇妙な熱さを感じる。

「ただいま、もどりやした」

「ようやくか」

ヤブメの声は、以前と変わっていない。薄目を開けると、顔のしわが、一段と深くなっているのがわかった。

「して、その者たちは？」

「道中、あっしの護衛を引き受けてくださった、志篤（こころざしあつ）いかたがたでやす」

ひとまず、そう紹介しておく。

「オイラがコッパだよ」

「オレ、ペケジ！」

「お竜と申します。どうぞよろしくお願いします」

口々に名乗りをあげるが、シレンだけは無言である。

「その縞合羽の御仁は？」

「シレンのダンナでやす。あっしの命の恩人でもありやす」

そう話すと、わずかにシレンが頷いた。

「ふむう、ケチがお世話になりもうした。村を代表して、お礼を申しあげる」

ヤブメは深く頭をさげ、言葉を継いだ。

「ところであなたがたは、これからどちらへ行きなさる？」

「この山のてっぺんだよ！」

コッパが声を張りあげた。

「ほほう、あなたがたも〝黄金郷〟を目指しておるのかのお」

その声には、微妙な険があった。やはり、あとでもめそうだ……そんな想いがよぎる。

「まあ、何もないところじゃが、旅立ちのときまで、ごゆるりと過ごされるがよい」

ヤブメが、いきなり別れの言葉を告げた。一礼しながら、チラッとヤブメの顔を覗くと、唇が「今宵話がある」と告げていた。深々と頭をさげるフリをして頷き、みなのほうに向き直る。

「では宿へ行って、食事にしやしょう」

「待ってました！」

「そうこなくちゃ！」

ペケジとコッパが、ほぼ同時に声をあげた。

「あんたたち、ちっとは場をわきまえなさいよ」

お竜が、笑いながらたしなめた。

「うーう、もう今日は食えない……」

ペケジはさっきから、宿屋の座敷でふせっていた。二十合も食べたのだから、当たり前である。

「はあー、どうして後先考えないかね、こいつは」

お竜のため息。

「オイラも、もう満腹かな？」

そう言うコッパは、まだ余裕がありそうだ。さっきまで大きな山羊（やぎ）の肉にかぶりついていたのだが、あの小さい体のどこにどう入っているのか、さっぱりわからない。

終始ペースを崩さなかったシレンは、けろっとした顔で、食後の茶をすすっている。確かシレンのダンナも、十杯は食べていたはずなのだが……

もう考えないことにしよう。道中では、いくらでも節制できる連中ではあるのだから。

自分も茶を飲んで、気持ちを落ちつけた。

「ケチさん、この町で武具を扱っている店はあるかい？」

お竜から声をかけられた。思ってもみない質問で、すこし戸惑った。

「へい……村の西北のはずれに、《清流》というところがありやすが」
「お竜さん、なにかほしいものでもあるの？」
コッパが話に入ってくる。
「ああ、モンスターもだんだん強力になってきたから、礫に代わる飛び道具がほしくてね」
「そんなの、いらないじゃん？」
「どうして？」
お竜から疑問の声があがった。
「そいつはあっしも気になりやすな」
コッパが胸を張った。そして、鼻息も荒く答える。
「イザとなったら、ギタンを投げればいいんだよ。ほら、お金って重いじゃない。巾着に入れたままぶつけたりしたら、向こうもたまらないさ」
「へえ、それは思いつかなかったよ」
お竜は素直に感心している。やはりこのイタチ、なかなかの食わせものだ。まったく油断できない。
「わかったよ。ありがとう」
お竜が礼を言って、立ちあがる。
「じゃああたしは、そろそろ風呂に入って寝るよ。みんなお先にね」
お竜の軽やかな足音が遠のいていった。彼女の部屋は、別室である。
寝床に入って、どれだけの時が経っただろう。ペケジの豪快ないびきに、穏やかなコッパの呼吸は聞こえるが……シレンからは音がしない。それでも耳を澄ますと、かすかに寝息をたてているようだ。
そっと起きあがり、仕込み杖を手に取った。できるだけ音をたてないように、部屋を抜け出

す。
　そこで初めて目を見開き、あたりを窺う。人気はない。
　忍び足で、裏口から出た。今一度、気配を探る。
　怪しい者はいない。
　念のため、次の角までは杖をついて歩いた。角を曲がると、杖を地面から離し、ゆっくりと駆け出す。
　今夜が正念場だ。ヤブメを説き伏せないと〝黄金の大地〟へ向かう大きな障害となる。それになによりも、ちゃんと母の許しを得てから旅立ちたい。
　村のところどころには、まだ灯りがついている。それでもいつもより、ずっと闇は濃かった。

第六幕　黄金郷の真実

お竜は身体の向きを変え、夜着を肩までかけた。半刻ものあいだ、これを繰り返すばかり。眠ろうとすればするほど、なぜか頭が冴えてくる。

今まで見てきたなかの、何かがひっかかっている。それが自分でも何かわからないだけに、手におえない。

ちゃんとした部屋で寝るのは一週間ぶりになる。きちんと身体を洗って、サッパリした後の眠りは、どんなときでも気持ちよい……はずなのだが、今は睡魔が、どこかへ去ってしまった。

「まったく、どうなってるんだか」

ため息が漏れる。以前、寝苦しいときは、決まってマユツバのことが思い浮かんだ。今ではそんなことは、めったにない。

いったい、どうしたのだろう。野宿が続いていたから、布団に慣れないのだろうか？

大きな違いがひとつあった。

「そうか……」

野宿では、シレンたち旅仲間のうち必ず誰かが、夜番をしていた。だから自分の番のとき以外は、背中をまかせて休むことができた。

いまは広いこの部屋に、自分ひとりしかいない。

マユツバの一件で故郷を失ってから、初めて心地よく寝たのは、いつだったか？　確か、お鷹と枕を並べた夜……三年前のことである。

「ねえさん、一緒に寝ようよ！」

お鷹はなんの迷いもなく、そう提案してきた。

「もう子供じゃないんだからさ」
恥ずかしくてその話題を避けようとしても、お鷹はおかまいなしだ。
「一緒に横になって話をしたら、楽しいに決まってるでしょ？」
「そうかもしれないけど」
曖昧な返事をしたら、お鷹はグイと袖を引っ張ってきた。こんなところも、会ったときから変わっていない。
「決まり！　さあ、ねえさん、早く！　じつはもう、準備できてるんだ」
そう言って、無邪気に笑う。
「はいはい、わかったよ」
けっきょく、ほとんどいつも一緒に寝ることになった。
ふと、お鷹の手紙の内容が、頭に浮かんだ。

実はボボロの茶屋を出るときに「お留守のあいだに、ハッタリさんという方がいらっしゃいまして、これを……」と、秘密裏に渡されていたのだ。
自分を案じる気持ちが、飾り気のない言葉でつづられていて、嬉しかった。お鷹らしい率直さで、シレンを「すばらしい男である」と賞賛するのもわかる。しかし「惚れたから婚儀を申しこんだ」というくだりには、やはり複雑な気分にさせられた。そのうえ「それでもねえさんが相手だったら、譲ってもいい」とある。お鷹のことだから、すべて本気なのだろう。
旅仲間となってわかったが、シレンの無口は無頓着の表れだ。こちらが想いを懸けるほど、相手は想ってはくれない。まさしく風を追いかけるようなものだ。お鷹はそこまで、わかっているのだろうか？

「はーあぁ」
どうも気が重い。胸がモヤモヤとしている。
『今度会ったときは、昔みたいに一緒に笑おうね』
とは、お鷹の手紙にあった最後の一節である。言われてみるまで気づかなかった。確かにしばらく前までは、あまり笑った記憶がない。そこまで暗い顔をしていたのだろうか？
ところが最近は、ずいぶん笑っているような気がする。いまの状態が、本来の自分なのだろうか？　おかしい。自分はシレンという人物を見極めるためだけに、同行していたのではなかったか？　だとしたら、この気持ちはなんなのだろう。
ともに背中合わせで戦ってきた今だから言える。シレンは、マユツバとは違う。裏表というものがないのだ。
「シレンと出会って、生まれ変われたのかもしれない」
そう、つぶやいてみる。顔が火照るのがわかった。
「イヤだ、イヤだよ。あたしらしくない」
起きあがって、きっちりと服を身につけた。外の空気でも吸って、気分でも変えないと眠れない。
障子を開けて、外へ出た。
「ふぅぅう」
一息吐いて、一緒に想いのたけまで出してしまえたらいいのに。
思いきり高原の清々しい空気を吸った。あたりは暗く、少し肌寒い。ところどころに置かれた灯籠だけが、淡い光を放っていた。
いままで気づかなかったが、水の流れ落ちる

音が、サラサラと規則正しく聞こえる。耳を澄ませば、遠くから滝の音もした。
見あげても、星一つない。それもそのはず、天は鍾乳洞になっている。どこまでも広がるかのような、静寂な空間だった。
今いる宿も、水上に高台を設けて建てられた家屋である。人と自然の調和する風流が感じられる、旅人として訪れるには、とてもいい場所だ。
頭がスッキリしてくると、いままで水面下にあった疑問が浮かびあがってきた。
あらためて考えてみれば、おかしいことだらけだ。この〝地下水脈の村〟の人々は、なぜこんな場所に好んで住みたがるのだろう。
じろじろと値踏みしてくる視線が思い出された。観光地にしては、やたら排他的な態度が、そぐわない。そういえばほかの村人は、明らかにケチに、特別な配慮をしていた。ケチはいったい、ここではどんな立場なのだろうか……
ゆっくりと、障子の開閉音がした。
思わず廊下の角に身を潜め、息を殺す。とりたててやましいことなどないのに、習い性になっている。
気を取り直して、向こうを覗きこむ。ボロボロの赤い外套……ケチの後ろ姿だった。
ケチは首を振って、あたりを窺っている。そのようすは盲目の人のそれとは思えない。どういうこと？
嫌な予感が先にたち、考える間もなく再び身を隠した。この反射的な身のこなしで、今まで何度、命拾いしたかわからない。
ケチは小走りで廊下を駆け出す。けっして足音を立てない。

あとをつける。もちろんこちらも忍び足で、息を潜めたまま。

ケチは裏口まで行くと、そっと引き戸のつっかえ棒を外す。その動作は素早い。ケチが外に出たのを確認すると、自分もそろりと近づく。

戸の向こう側には、まだケチの気配が感じられたが、ひとりだけだ。数瞬もすると、その気配がスーッと離れていく。

音をたてないよう、細心の配慮をして、わずかに戸を開く。

向こうでは、ケチが杖をついて歩いていた。しかしその背筋はピンとしていて、いつものケチらしくない。

角を曲がろうとしていたので、急ぎながらも落ち着いて戸を閉める。たっぷりふた呼吸おいて、再び外を見た。

ケチの姿はない。サッと外へ出て、ケチの消えた角まで静かに進む。

その向こうに、灯りに照らされたケチの姿が、確認できた。すでにケチは杖もつかず、確かな足取りで走っている。目は、最初から見えていたのでは？

疑惑が、確信めいたものに変わる。ならばなおさら、相手に見つからないよう追わなくてはならない。

ケチを追って音を立てずに駆ける。滝の音だけが、闇に響いた。

ケチが立ち止まった。この村の長（おさ）のヤブメの家の前だ。

さっと、近くの家の陰に潜む。

玄関の上に掲げられた大きな吊し灯籠が、入口をわずかに照らしていた。

警護の者がひとり増え、ふたりになっていた。

痩せたほうが異常なまでに、あたりを警戒している。体格のしっかりしたほうは、ケチを恭しく出迎えた。
「お入りください。ヤブメさまがお待ちかねです」
「ごくろうだった」
ケチは、耳慣れない慰労の言葉をかけ、スーッと建物の中に消えていく。
この厳重な警戒は何を意味する？　いったい、何が始まろうとしているのだ？　ふたりの衛兵は、油断なくあたりを見回している。どうにか接近する方法はないものか。
ようすを窺うが、道はここ一本。そのとき、寝る前にコッパと交わした会話を思い出した。
腰のあたりを探って、いつも肌身はなさず身につけている予備の巾着袋を取り出す。数十枚ほどのギタンが入っていた。
「戻ったら、コッパに肉でも奢ってやらないとね」
そこから二枚取り出し、うんと遠くの流れへ投げた。
「うん、何の音だ？」
痩せた男が反応する。
「オレが見てくる」
大きな男が、その場からいなくなった。あとひとり。
建物までの距離を目測するが、一息で駆け抜けられるものではない。
再び一枚のギタンを取り出す。いつも左腕にはめている〝百発百中の腕輪〟を撫で、その存在を確認した。
よし。灯籠の穴に目がけて、投げつける。
「うわっ！」
灯籠の灯りが消えると同時に、慌てふためく

声がした。
「風か？　縁起が悪いなあ……」
男は、火をなんとかするために建物の中に入った。
今だ！
すぐさまヤブメの家の暗がりのなかに隠れる。
火打ち石を打ち鳴らす音がし、火が再び灯された。
「あれ、こんなところにギタンが……しめしめ」
男は首をかしげながらも、そのギタンを懐に入れていた。

そのまま建物に背をつけ、じりっじりっと奥へ進む。
いくつか窓があった。灯りがつけられている部屋は少ない。唯一、奥からは灯りが漏れている。確かあそこは、ヤブメと会った場所だ。となれば、ケチもそこにいるに違いない。
気配を探りながら、慎重に足を運ぶと、声が聞こえてきた。
「どうして動くと言ってくださらないのですか⁉　ようやく待ち望んだ御方が現れたというのに！」
ケチの声？　声色は間違いないが、ひどく印象が違う。さっき感じた違和感が、再び蘇ってくる。
「ケチよ。そんな存在は、疎ましいだけじゃ」
老婆のしわがれた声が応じる。ヤブメである。
そのとき室内で、何かが強く叩きつけられた。
「わたしはこの目で、何度も確かめました。シレンには、それだけの力があります」
「あのバケモノに勝てる人間など、いようものか……あやつに無用な刺激を与えるのは避け

よ。さいわい今は、おとなしくしているのだから」
「ここがいつまでも無事だという保証が、どこにあります？　だからこそ……」
「やむをえまい。今の平和を壊す危険を冒すよりマシじゃろうて」
どうやらケチは、とあるバケモノを、シレンに退治してもらいたいらしい。話の端々が聞き取りにくいので、さらに窓へ近寄った。
「故郷へ……アムテカへ還るという宿願を捨てたのですか!?」
ケチの声は悲鳴に近い。
「われわれには今の生活がある。できることは、われらの太陽神に祈るだけじゃ」
ヤブメは諦観しきっている。
「その神が囚われの身となり、この村さえ照らしてくれないというのに、虫がよすぎる話です」
その後しばらくのあいだ、言葉を発するものはいなかった。
これがケチの真の姿であるとすると、今までへりくだってきたのは、すべて演技だろう。なんという欺瞞だ！
「わたしは今までなんのために……故郷を汚すようなマネまでして、生き延びてきたんですか？」
ケチは自問自答するように、つぶやいていた。
「〝黄金郷〟は、もはや存在しない。それはもう、知っていたであろう？」
とすると、宝の噂話までもが嘘なのか……
それほどのショックはなかった。シレンは残念がるだろうか？
いや、彼は金銀財宝などに興味はない。ただ冒険だけが、心のなかを占めているのだから。
「〝黄金郷〟はちゃんとありますよ、母上！

ここに！」
強く胸板を叩く音がした。母!?　ではこのふたり、親子だったのか。
次にヤブメの口から出たのは、にわかには信じがたい言葉だった。
「あの者たちは明朝、神に捧げる贄（にえ）とする。余計なことに首を突っこんだ、むくいだ。少しは太陽神のご機嫌をとることができよう」
「そんなこと、いかに母上でも認めるわけにはいきません！」
ケチが敢然と反論する。
おそろしく大変なことになったものだ。一刻も早くシレンに知らせなくてはいけない。窓からそっと離れようとした、そのとき……
「誰だ、そこにいるのは！」
誰何（すいか）の声があがった。話を聞くのに夢中になりすぎていた！

「曲者じゃ、であえであえ！」
すぐさまヤブメの声が飛んできた。
目の前には例の警護の者がふたりいて、長い棒の先をこちらに向けている。これだけなら、なんとか切り抜けられそうだが……
「それ！」
巾着の中から、握れるだけのギタンを掴んだ。
小柄な警護の男の顔面に放つ。
「くっ」
その男が目を閉じた瞬間、一気に飛び出す。
やみくもに振りおろしてくる棒を避け、かがみこむと、相手の膝の後ろを刈るように蹴る。
「うわっ！」
バランスを崩した男は、のけぞるように倒れ、棒を落とした。その棒を手に取り、体格のよいほうに投げ、同時に駆ける。
「ぬっ」

棒が振り払われたときには、既にその脇をすり抜けていた。

ヤブメの家から離れようとしたものの、すでにあたりには村人が集まっていた。男だけではない、女子供まで勢揃いだ。その全員が、長い木の棒を持っている。

「捕らえろ！」

「神の敵だ！」

「贄とするのだ！」

「やっちゅけるでしゅ！」

口々に叫びながら、突進してくる。次々に振りおろされる棒を避け、脇に出る。しかしそこにも、別な者がいる。

「食らえ！」

棒が横薙(よこな)ぎにされた。かがんで避け、前に踏み出す。

そこにいた新手は、若い女だった。

「ええいっ！」

女が振りかぶった瞬間、その棒を掴む。

「放して！　ああっ！」

無理矢理振り回すと、女が手を放した。棒を奪ったはいいが、これからどうする？

退路はすべてふさがれていた。どこかを突破しなくてはいけないが、村人にひどいケガを負わせたくはない。

「手伝え！」

声の主は、大きな投網(とあみ)を持っていた。まずい！

「そらっ！」

投網が、目の前を舞う。サッとかわすが……

「続けろ！」

男の怒号がし、今度は反対からも、投網が襲ってきた。手にした棒が引っかかる。瞬時に手

を放した……
「今だ！」
四方から一斉に、網を投げられた。
「くっ」
身動きが取れない。万事休すなのか？
「終わったな」
そのしわがれたヤブメの声に、村人みなが振り向いた。隣にはケチもいた。目を見開いて、こちらを見ている。
あのときは反対していたが、やはりヤブメの意に従うのだろうか？　〝盲目のあんま師〟だと思いこんで、自分がお鷹に紹介さえしなければ、こんな事態にはならなかった。悔やんでも悔やみきれない。
「朝まで牢に入れておくのだ」
ヤブメが宣言した。
「ケチ、なんとか言ったらどうだい！」
罵声（ばせい）を浴びせると、ケチは視線を外す。そして何も言わず、姿を消した。
思わず唇を噛む。なんてザマだ。
そういえば、シレンは……シレンはどうしている？　シレンさえ無事なら、まだ望みはある。
「ほら、おとなしくしな！」
縄を引いていた男に、腕を後ろ手に縛られた。
そのとき、滝の音が聞こえているのに気づいた。耳になじまない、嫌な響きだった。

第七幕　ほろ苦い記憶

遠くのほうから、誰かが呼んでいる。
「ペケジ……ペケジ……」
返事はないが、女の声だ。あねごだろうか。
「だれ？」
お竜さんのような感じもする。
その方向に近づいていくと、味噌の香ばしい匂いが漂ってきた。膳の用意が一人前だけある。ほっかほっかの大盛り飯と、鮎焼きに目を引かれた。
あたりを見回すが、やはり誰もいない。どういうことだろう？
腹の虫がなる。目の前に、こんなうまそうなものをおかれては黙っていられない。自分のために準備されているのだから、食べてもいいはずだ。
「いただきまーす」
汁をすすった。
「うん、コレは……」
ひどく懐かしい味だ。続けて、鮎を丸かじりする。
「おおっ！」
間違いない！　故郷の食べものだ。なんだか涙がこぼれてきた。
「たんと食べるんだよ」
今度はハッキリとそう聞こえた。
「おっかさん？」
見回すが、姿はない。声だけが虚しく響きわたる。
「どこにいるんだよ!?」
やはり返事はなかった。

……真っ暗な部屋で目が覚めた。
「オレ……なにしてたんだろう？」
なんだか、うれしくも悲しい夢を見ていたような気がするが、よく憶えていなかった。
「そうだ！　アニキと一緒に旅をしてたんだ」
やっと見つけたアニキ、つまりシレンは、隣で穏やかな寝息をたてていた。
コッパは、しまりのない顔でよだれを垂らしている。
「やめろって……むにゃむにゃむにゃ」
ケチの姿だけなかった。
「厠(かわや)にでも、行ったのかなあ？」
そう思うと、なんだかこっちまで行きたくなってきた。
とりあえず待ってみる……一から十まで五回も数えたが、ケチは帰ってこない。
「なにやってるんだろ……」
いいかげん、我慢できない。
「そうだ！」
外に出れば、川が流れている。そこでしたほうが、気持ちいい。われながら、すばらしい思いつきだ。
さっそく起きあがると、障子を開けた。あんまり暗いので、足元がよくわからない。確かこっちのほうに、出口があったような気がする。
庭先に突っかけ草履があったので、拝借する。
少し小さいが、しかたがない。自分に合う履物など、特別あつらえでないとないのだ。
塀に向かって歩く。思ったとおり、そこに引き戸があった。
「あれ？」
つっかえ棒がはまっていない。なんて不用心なんだ。戻るとき、きっちりはめておこう。

戸を開けると、提灯（ちょうちん）の光があちらこちらに見えた。ザワザワしている。なんだかお祭りみたいだ。
「みんな、こんな夜更けによくやるなあ……」
参加したいのは山々だが、用を足すのが先決だ。早くしないと、えらいことになる。
水辺に向かって駆け出した。

「ううっ」
滝の音が近づいてくると、身体が震えた。ゴソゴソゴソと股間を探る。
「ふひぃー」
小水が滝に呑まれていく。なんとも気持ちいい。耐えただけあって、勢いはなかなか止まらない。
「何をしている！」
不意に背後から声をかけられた。首だけそっちへ向けると、ヒゲがもしゃもしゃした男がいる。その後ろには、提灯がいっぱい集まっていた。なぜかみんな棍棒（こんぼう）を握っている。
「オレは、いま取りこみ中だからさ！」
「こいつ、神聖な川になんちゅうマネを……」
「さっさと捕らえちまおう」
よくわからないが、怒っている。いったい何か悪いことをしたのか？　なんだか、行くところどこでも誤解されて、追われてきた記憶が蘇ってきた。
「よし、かかれ！」
号令が聞こえた。男たちが、じりじりと迫ってくる。
「ちょっ、ちょっと待って！　危ないってば！」
放水は、なかなか止まらない。一番最初に声をかけてきた男が、脇に飛びこんできた。
「くらえ！」

かけ声と共に、棍棒が振りおろされる。この状態ではかわせないが、避けたくもない。
「いてっ」
右肩に当たる。いや、それほど痛くないか……
「危ないって言ったじゃないか！」
思いっきり振り向いてやる。
「うげっ。な、なにしやがる！」
ヒゲ男の服の上のほうまでかけてやると、顔が歪んだ。いい気味だ。
まだ尿意はおさまらない。むしろ勢いを増している。このさいだ、ヒゲの仲間にもぶっかけてやろう！
「そーれっ」
狙いを定めて、身体を大きく振る。
「うわっ、汚ねえ！」
「信じられねえ……ぺっ、ぺっ」
「この変態野郎！」

ずいぶん遠くまで飛び、みんなびしょ濡れになっている。じつに爽快だ。
「野郎、もう勘弁ならねえ！」
さっきのヒゲが怒っている。
「そんなこと、言われても……」
この至福の時間を邪魔したほうが、悪いと思うんだがなあ。
と、やっと下のほうが、おさまった。
「うー」
軽く震えがくる。手早く水を切って、しまった。
するとその瞬間を待っていたかのように、ヒゲがまた棍棒を振りかぶってくる。もう、どこからでもかかってきやがれ！
「うおぉぉおぉ！」
肩を前につきだして、突っこむ。
「ぐふぉっ」

ヒゲが仲間たちのほうへ吹っ飛んでいく。
「手強いぞ、気をつけろ！」
誰かが声を張りあげている。ちょっとくらい用心してても、ムダだよ。せっかくだから、暴れてやろう。もっとスッキリするに違いない。
「うおりゃあぁあああ！」
いちばん人が群がっていそうなところへ突進する。右腕を一振り。
「ぐはっ」
左腕も振る。
「ぬおっ」
棒が転がって、ふたりの男が倒れる。ええい、次は……
「あれ？」
よく見ると、なかに女の人も混じっていた。ふっくらした感じの、かわいらしい子。でも震えている。

慌てて倒れている者に目を走らすが、こちらは疑いなく男どもだ。間違ったことをしていなくて、ホッとした。
しかし、これからどうしよう？　この程度の連中なら一掃するのはわけなかったが、女の人は傷つけたくない。遠い故郷のおっかさんに、怒られる。
「ひ……ひるむな、かかれ！」
奥のほうから、ひきつった叫びが聞こえる。誰も動く者はいない。
よし、ここは逃げよう！　そしてアニキに頼みこんで、謝ってもらおう。この人たちは、自分が川を汚したから怒っているに違いないのだ。
「くそっ！」
さっきから、ひとり声をあげていた男が、棍棒を振りかぶる。

「おりゃ！」
その顔面に拳をみまう。
「ぐふっ」
右拳に鼻血を残し、男は倒れこんだ。
「きゃあああああ！」
耐えかねたような、女の金切り声。ズキンと胸が痛むが、宿に向かって駆け出す。
「このままじゃ、かなわねえ！」
「仲間を呼んでこい！」
そんな言葉が、後ろから聞こえてきた。
宿を出たときより、格段に灯りの数が増えている。
「いたぞ！」
声がかかる。新手だ。なんでこんなに、追ってくるのが早いんだろう？　面倒くさいので、無視して先を急ぐ。
宿が見えた。大勢の人たちに囲まれている。
「アニキも、何かしたのかなぁ……」
立ち止まって探してみるが、蟻一匹入る隙間などなさそうだ。
「こっちだ、こっちに来てくれ！」
ドキッとしてあたりを見回すが、誰も寄ってこない。
「三人一組でかかるんだ！」
「網だ、網を持ってこい！」
あちらこちらから声が聞こえる。
「そっちに逃げたぞ！」
見ると、人と人の合間を、疾風のようなものが走っていた。
「敵はそこだ！」
「うわっ、オレは違う！」
村人たちは、互いにぶつかりあっていた。
夜の旋風（つむじかぜ）が、不意に近づいてくる。闇夜に浮

かびあがったその顔は……間違いない、アニキだ！
「おーい」
嬉しくて大きな声を出した。
「このバカ！　黙ってなよ！」
コッパの罵声が飛んできた。なんで、怒られなきゃならないんだ？
「仲間がいたぞ！」
「囲め、囲め！」
いつのまにか、後ろにも村人がたくさんいた。
シレンがカタナを抜く。
「ペケジ、ケチさんとお竜さんは？」
コッパが質問してくる。そういえば、お竜の姿も見えない。
「うーん、知らないなあ」
もしかして、捕まっちゃったのかな？　その間にも、村人たちが包囲を狭めてくる。

「ともかく脱出しよう！」
コッパが声をあげる。シレンが駆け出した。
「アニキ、女の人も混じってるから気をつけて！」
わずかにシレンがうなずき、そのまま突っこんでいく。刃を振るう。そのたび、確実にひとりが倒れた。
「よし、オレも……」
後を追おうとしたとき、何本もの長い棒が突き出され、行く手を阻まれる。
「うわっ」
前にいるのは、ほとんどが女子供だ。震えながら、棒を握っている。
右を向く。状況は変わらない。
左も同じ。いったい、どうすればいいんだ？
「うううううううっ……」
思わず頭を抱えていた。

「やっぱりこいつは、女子供には手が出せないんだ。それ、ひっ捕らえろ！」
指示を受けて、棒が何本もまとわりついてくる。暴れれば、まだどうにかなるかもしれないが……身体がいうことをきかない。
「アニキ！」
叫んではみるが、シレンはもうだいぶ深いところにまで斬りこんでいた。
「なにやってるんだよ！」
またコッパの声。
「だってしかたないじゃないか！」
言い返したとき、シレンが引き返してくるのが見えた。
同時に、どこからか声がした。
「放て！」
シレンに向かって投網が放たれた。
「うわっ！」
コッパから驚きの声があがるが、シレンはなんなくかわす。
「どんどん、いけ！」
続けざま、投網が襲いかかる。これではアニキとはいえ……やばい。
「アニキ！　避けて！」
と叫んだものの、自分も打つ手がない。
「どうすりゃいいんだよ！」
コッパの声は、悲鳴に近かった。
さすがにシレンの動きも、鈍くなった。村人はそのスキに、また囲みを狭めていく。
そのときわかった。シレンは自分のためだけに、必死になってこっちに向かっている。
「アニキ……」
「四方向から同時に行け！」
またどこからか指示が飛ぶ。シレンの頭上に、大きな網がいくつも広がる。それは、たとえ風

でも捕まえられそうなくらい、大きかった。
「ぬわあっ！」
コッパが、シレンの肩から落ちる。シレンも全身に網を浴びていた。

「ようやく終わったか」
老婆の声に、村人は一斉に注目する。確か……誰だっけ？
「ヤブメさま、どういたします？」
初老の男が、老婆に問いかけていた。
「夜明けとともに儀式をおこなう。それまでは牢に閉じこめておけ！」
また牢に入れられる？
「いやだあ！」
叫んだが、冷たい目がこっちを睨みつけるだけ。
「うんぬう」

コッパも脱出しようともがいている。
シレンは黙ったまま、ジッと老婆を見つめていた。
棒で身体を固められたまま、女の人の手が、両腕に触れた。なんだか恥ずかしい。
と思っていると、背中に腕をまわされ、縄をかけられる。続けて何重にも巻かれた。
すでにシレンはカタナを取りあげられ、同じように後ろ手に縛られている。
「ぬお、勘弁してよー！」
コッパが叫ぶが、村人の手は止まらない。
「くっそぅ、放してくれないならこうだ！」
いきなりコッパが屁をこいた。
「うはぁ」
コッパを押さえつけていた男をはじめ、まわりじゅうバタバタと倒れる。そのとき、かすかな風が吹いて……

「うっ」
一瞬、気が遠くなる。なんだ、この目が痛くなるような臭さは⁉
「へへん、どうだい？」
コッパが鼻をさすっている。
「よくも……やりやがったな！」
地に伏していた男が、目を真っ赤に泣き腫らしながら起きあがった。
「おまえみたいなヤツは、こうしてやる、こうしてやる、こうしてやる！」
コッパを、ギュウギュウと締めつけるようにして、縛りあげる。
「うがぁあ……なんだ、もう一発食らいたいの⁉」
コッパが尻をあげるが、男は動じない。
「こっちは風上だ。そこでしても、後ろにいる仲間が苦しむだけだぞ」
「うぬぬぬう」
コッパの唸り声は、なかなか鳴りやまなかった。
「さあ、進むんだ」
シレンは何も言わない。何事もなかったかのように、先導されるまま歩きだす。その後ろ姿を見ていたら、声が漏れてしまった。
「ううっ、すまねえ。アニキ……」
奥まったところにある家の前で、案内役の男が止まった。そこで待ちかまえていた衛兵が口を開く。
「ごくろうさまです。女は、おとなしくしていますよ」
女？　なんの話だろう？
戸が開けられ、案内役がなかに入った。それからグルグル巻きのコッパを抱えた男、シレン、

その縄を持つ男と続く。
「早くしろ」
後ろから蹴られたので、しかたなく足を踏み入れると、ぼんやり明るい部屋だった。
「この下だ。コケるんじゃないぞ」
奥に下り階段があった。地下室の牢か……なんてイヤな場所だろう。
「きりきり歩け！」
縄を引っ張られる。いつのまにか立ち止まっていた。しょうがなく、また歩きはじめる。
階段を降りきったところは、真っ暗に近い。わずか片隅に、薄暗い灯りがあった。
案内役の男が、牢の錠を開けている。思わずお鷹の砦のことを思い出し、身体に寒気が走った。
あれ、牢内に誰かいる……同じく縛られたまま、牢に座っていた。

「お竜さん！　こんなところで、何やってんの？」
コッパが声をあげた。
「それはこっちのセリフだよ」
お竜はため息をついた。
「さあ、入るんだ！」
案内役が、また急かした。
全員が入ると、錠がおろされた。いつ聞いても、慣れない嫌な響きだ。
「ねえ。これ、ほどいてよ！」
コッパが声をかける。
案内役と縄を持っていたふたりの男は、こちらをジロジロ見回すだけ。
「その必要はない。すぐに神に捧げられるのだからな」
案内役は冷たい言葉を吐いた。

「そんなぁバカな……」
せつないコッパの声を無視して、村人は去っていった。
「なんでいつも牢屋なのかなあ……」
生まれもった星の巡りでも、悪いのだろうか？　浮かない顔のお竜が、シレンを見つめている。
「シレンまで捕まっちまうなんてね……」
シレンは壁に背をつけて、うつむいていた。やっぱりアニキでも、落ちこむことがあるのか？
「シレンとオイラだけなら、切り抜けられたんだけどさ」
コッパが首だけをこちらに向けた。
「ん？　オレの顔に、なにかついてる？」
調べてみたいが、腕が拘束されたままなので動けない。
「これだもんなあ」
コッパがため息を吐く。
「なるほどねぇ……納得したよ」
続けてお竜も、豪快にため息をついた。
「うぐぐぐっ」
コッパが自分に巻きつけられた縄を歯で引っ張った。それをお竜が、ジッと見つめる。
「いけるかい？」
コッパは縄から口を離した。
「ふーう、ダメだよ。堅すぎる」
「なんだい、だらしないねえ」
コッパは口先を突きだした。
「オイラは繊細なんだよ。力仕事は向いてないんだ」
「ふーん。根性がないのとは違うのかい？」
お竜は、口元に皮肉めいた笑みをたたえてい

た。
「そんなわけないでしょ……」
コッパが反論しかけたとき……大きな寝息が聞こえてきた。見ると、その音の方向にはシレンがいた。その首が、カクンと垂れて船を漕ぐ。
アニキ……もう寝てるの⁉
「こんな状況で眠れるなんて……なにか秘策でもあるのかねぇ？」
お竜も、呆れつつ感心している。
「秘策っていうか……どうにもならないときには、寝て体力を温存するに限るでしょ」
コッパが呆れかげんに説明する。
なるほど。ここはひとつアニキを見習って、寝ておこう。目を閉じる……
しかし、眠気は全然やってこない。縛られたままだと、腕が突っ張る感じがして、寝入るのが難しい。

「よっと」
声が聞こえたので目を開けると、お竜は立ちあがっていた。
「どうしたの？」
「ジッとしてらんないんだよ」
牢内のようすを、しげしげと確認している。
コッパもお竜に声をかける。
「ムダだと思うけどなあ。どうせ一度は出されるんだから、そのときを狙ったほうがいいよ」
「とは言っても……」
お竜が、シレンのほうをちらっと見た。高いびきで、まったく起きそうにない。
「頼みの綱がコレじゃあねえ」
お竜はへたりこんで、恨めしそうにシレンを見た。

何刻が過ぎただろう。眠っているような目が

覚めているような状態なので、よくわからない。
アニキはどうしてるか……シレンの顔をのぞきこんだ瞬間、その目がカッと見開いた。
「う、うわ！」
シレンはゆっくり立ちあがり、何も見えない闇のなかに、厳しい視線を向ける。
「何があったんだい？」
お竜も、ごそごそと起きだしてくる。
コッパは、まだ寝転がっている。
「うーん、もう食べられない……むにゃむにゃ」
その間も、シレンはじっと身構え、警戒している。そして、シレンが見つめる闇から姿を現したのは……
ケチだった。近づいてくるのに、まったく気づかなかった。
「助けにきてくれたの？　やっぱりケチさんはいいひとだ！」
声をかけたが、返事はなかった。ケチはくぐり戸に近づき、錠をいじくりだした。
「いったい、何しに来たっていうんだい？」
お竜の質問の意味がわからないが、その表情は厳しい。
くぐり戸からケチが入ってきた。そして、いつも持っていたあの杖を持ちあげたかと思うと……杖が分離し、刃の鋭いきらめきが見えた。
「ケ、ケチさん？」
思わず声が漏れた。ケチの刃が、こっちに伸びてくる。
「うわあああ」
おっかさん。ペケジの命はここで終わりを告げます。親孝行なんて何にもしてやれなかったけど、せめて最後は一目逢いたかったなあ……
「ふう……これで大丈夫です」
ケチの声に思わず、目を開ける。縄が、切ら

れていた。
「あ、ありがとう、ケチさん！」
なんだ、やっぱり誤解だったんだ。よかった。
「う、うーん！」
腕を広げて、大きく伸びをする。続けてケチは、お竜の縄を切っている。
「今度は、何を企んでいるんだい？」
「お疑いはごもっとも。しかしみなさんを、お救いしないわけにはまいりません」
なぜかケチは、お竜に謝っている。あれ？ケチさんって、こんなしゃべりかただっけ？
「早く早く、次はオイラ！」
コッパが催促を始める。いったい、いつの間に起きていたのだ？
戒めを解かれたお竜が、ケチに訊ねた。
「……他に小刀でも、持ってないのかい？」
ケチは懐を探り、短刀を出した。キラキラしていて、ずいぶん価値のありそうな代物だ。しかし、何でこんなものを持ってるんだろう？
「へえ、立派なもんだねぇ……」
お竜は受け取るなり、鞘を抜いていた。なんだかその目が怪しくきらめいている。
突然、お竜の姿が消えた。
「不用心すぎやしないかい？」
いつのまにかお竜はケチの背後にまわり、喉元に刃を突きつけている。
「そうですね」
ケチの声色は、冷静だった。シレンは微動だにせず、お竜とケチを見つめている。
「お竜さん、せっかく助けに来てくれたってのに、何してんのさ！」
コッパがじたばたしながら、首を伸ばしていた。
「アンタはだまってな」

お竜のドスのきいた声に、思わず縮こまった。
コッパは目を丸くして、顔をブルブルさせる。
「説明してもらおうか？」
お竜の声は、殺気に満ちていた。
「村の者が早まったマネをしでかして、申し開きのしようもありません」
ケチが答えた。
「へえー、アンタには罪はないっていうのかい？　納得いかないね」
「お竜さん、お怒りはごもっともです。しかし、もう少し声をひそめてください。いつ村の者に気づかれるかわかりません」
「どういうことだい？」
お竜は声を小さくしたが、より怖さが増していた。
「わたしは、この村の方針には従えません。ここからお出しするのもわたしの一存です」

ケチは、キッパリと言いきった。
「いまさら信用できるとでも思っているのかい？」
さっきからなんでこんなに、ケチを疑うんだろう？　仲間なのに。
「できないとおっしゃるなら、この刃をお引きなさい」
しばらくのあいだ、誰もしゃべらなかった。
「とりあえずさ、早いとこオイラの縄を解いてよ！」
不意にコッパがすっとんきょうな声を出し、沈黙を破る。
「チッ、わかったよ」
お竜の舌打ちがして、ケチから刃が離れた。
「その覚悟、もう一度だけ信じてやる」
そう言ったお竜は、シレンのところへ向かう。
「お竜さん、ありがとう」

ケチは黙って頭をさげている。
「ケチさん、早く早く！」
コッパが急かす。
お竜はシレンの縄を切ろうとしている。
「遅くなってすまないね」
シレンはケチから視線を外さなかった。
なんだか、ふたりとも迫力があって何にもできなかった。

みなが自由になると、ケチは取りあげられていた荷物を持ってきた。
「ありがと、ケチさん」
コッパが代表して、礼を言った。
シレンは隣で、腰にカタナを帯びている。さすがはアニキ、その姿が決まっていた。
「次はここから抜け出さないとね」
そう言ってお竜は、ケチを睨む。

「村でも、ごく一部の者しか知らない、隠し通路があります」
おお！　そういうことなら早く出よう。牢にいるのは、もうコリゴリだ。
「行こう、アニキ！」
シレンは、軽くうなずいた。
「ええ、急ぎましょう。いつ追っ手がかかるか、知れたものではありません」
ケチが先頭に立った。
「うん。後ろはオイラたちに任せて」
コッパが、シレンの代わりに返事をした。
ケチに続いて階段を登ると、見張りが倒れていた。
ケチは切なそうな顔をしている。そしてその目はしっかりと見開かれていた。
「あれ？　ケチさんて、目が見えるようになっ

たの？」
「ええ……」
うーん、いつからだろう。でも……
「そうか！　〝めぐすり草〟を使ったんだね！
よかったねえ」
思わずうれしくなった。ケチの手を取って、思いっきり振る。
「あ、ありがとう、ペケジさん」
ケチの声は、なぜか震えていた。
「……あんたは幸せもんだねえ」
お竜がつぶやいた。意味がよく分からない。
〝めぐすり草〟を使ったのがわかったから、偉いということか？
「ここで問答してるヒマはないよ！」
コッパが声をかけてきた。それをキッカケに、シレンが前に出ようとする。
「わたしが先に行きます」
ケチは、ふたたび歩き始めた。
不意にお竜が言った。
「でも、さすがはシレンだね。ケチのこともすべてお見通しだったから、安心して高いびきをかいていたってわけかい」
なるほど、さすがアニキ！　ケチさんが助けに来てくれるとわかっていたんだ！
「そんなわけないよ。シレンはただ、眠かっただけだよ」
コッパが混ぜっ返した。シレンはそれに、何の反応もしなかった。
うーん。もしコッパの言葉が本当だとしても、あんなときに熟睡できる度胸は、やっぱりすごいのだ。とにもかくにもシレンは偉い。なんてったって、オレのアニキなんだから。
「ここからは、お静かにお願いします」
ケチが戸を開けた。外はたくさんの灯火で、

明るかった。火を焚いている匂いが鼻につく。
何が起こるかわからないけれど、不安はない。
シレンのアニキにかかれば、どんなことでも、なんとかなるんだから！

第八幕　それぞれの道

「あのバカモノめが……」
ヤブメの脳裏には、昨夜の対話が浮かんでいた。
久しぶりに会ったケチは、子供のころからの想いを、今でもそのまま抱いている。村の総意に逆らっても、故国アムテカへの帰還を切望しているのだ。その一途なまでの想いには頼もしさすら覚えるが、それでも危ういという気持ちのほうが強い。
血は争えないのか？
地中より突如出現した強大なバケモノに対し、太陽神を崇めるアムテカ族は、王を中心として一致団結した。勇敢な男たちは剣を抜き、そのバケモノへと突っこんでいった。しかし渾身の刃は強靭な殻に弾かれ、ひとりまたひとりと、屠られていくだけ。
絶望しかけたとき、アムテカの守護鳥である太陽神の化身、黄金のコンドルが飛来した。その金色の翼のはためきによって、人々は活力と勇気を取り戻した。
バケモノに決戦を挑んだ守護鳥は、その鋭い嘴によって、バケモノの硬い殻を突き破った。あたりに人々の歓声が響き渡った。
そのとき、バケモノが口から糸を吐き出した。その勢いは止まるところをしらず、黄金のコンドルは、すっかりからめ取られてしまった。そこからは阿鼻叫喚の地獄である。
人々は舟に乗りこみ、我先にと脱出を図った。その時間を稼ごうと、王は宝剣を手に、わずか

かな側近とともに、バケモノに対して絶望的な戦いを挑んだ。宝剣は鋭く、王の刃はバケモノに後悔の血を流させたものの、抵抗もそこまでだった。

怒れるバケモノの一撃で、王は串刺しとなって絶命。側近もひとりを除いて虐殺された。唯一生き残った者は、王のかたみである宝剣を携えると、撤退中の王子の元を目指して、涙を堪えながら逃げ出した。

人間に興味を失ったバケモノは、都市に満ちあふれた黄金にまとわりつき、跡形もなく溶かしていく。逃げ落ちていく人々は、戦火のなか、ただそれを見守ることしかできなかった。

これ以後、アムテカ族にとって都への帰還は悲願となった。このバケモノは、黄金を蝕むところから〝魔蝕虫〟と呼ばれ、みな、それへの雪辱を誓った。

ヤブメは、生き延びた王子の直系の子孫だった。政教一致を原則とするアムテカ族の最高指導者として、生まれたころより祈禱師となる定めである。

わずか二十歳でその地位に就いたとき、〝黄金郷〟に眠る財宝の噂を聞きつけて、仮の都たる〝地下水脈の村〟まで、命知らずな風来人が集まってきた。名乗りをあげないその頭目は、自信に満ち溢れ、魅力的な目を輝かせていた。

神意を占うと〝難あるも吉〟と出た。そこでヤブメは決意し、その者たちを組織して、村の総力をあげて魔蝕虫に再び挑むことを決定した。ヤブメも一緒に出陣しようとしたが、王家の最後の血統ということで、村の者たちに止められた。

決戦前夜、村の女たちは亭主と、恋人と、そ

して風来人たちと契った。同族婚が続いて濁った血を清め、新しい活力を村に導入するためにも、よそ者は必要であった。

風来人の頭目は「帰ってきた暁にこそ、名を告げよう」と言い、部下と村の若者を連れて出陣した。期待と不安のなか、吉報を待ち続けたが、知らせはなかなか届かない。

長い日々のあと、ようやく頭目の部下が、血だらけになって舞い戻ってきた。その男は、襲撃は失敗であり、頭目をはじめ、味方は総崩れとなったと報告した。

「誰も、あの呪われし怪物に近づいてはならない……」

そう言い残して、その男もこときれた。

信じたくはなかった。しかし実際に、誰も帰ってこなかった。〝吉〟を授けた神意を疑いながら、ヤブメは泣き暮らした。

しばらくして子供を授かった。それがケチだった。ケチが幼いころから、この出来事を寝物語として、何度も語って聞かせた。

若者のほとんどを失った村は、停滞し、閉塞感に蝕まれていた。そのうち「現在の暮らしを守り続けるのが一番。アムテカに戻るのは禁忌とする」という、村人の総意がまとめられた。復讐は忘れられ、ヤブメも反対する気はなくなった。

ようやく十歳を超えたケチだけが、反対した。

「ぼくがみんなを、アムテカに連れて帰ってあげるんだ！」

その声の響きは、疲れきった人々の空虚な心に、染みわたっていった。それでも、誰もケチの想いに応えようとはしなかった。払われた代償は、あまりにも大きかったのだ。

ケチは無言で剣の腕を磨いた。指圧を覚えたのは、あれ以来、伏せりがちになった母たるこのヤブメに、楽をさせるためであった。

やがて長ずると、風来人の血を抑えられなくなったのか、旅の指圧師に身をやつし、ほうぼうを放浪して修行するようになった。この母を村に置いて……

父親のように、野たれ死ぬのではないか。そう思って、人に知られないように、幾度枕を涙で濡らしたことか。

年月が過ぎた。

いまは村人の命、そしてなによりも、ケチの身を守ることが大事だった。そのためにも、シレン一行には消えてもらわなくてはならない。

第一シレンの姿を見ると、どうしても昔のあの男が思い出されて、つらくてかなわない。

ケチは説得に応じてくれるだろうか？　可能性は薄い。しかし母として、やれることはすべてやっておかなくてはならない。

幾本ものロウソクのきらめきが、ジリジリと身を焦がす気がした。ところが、そろそろやってきてもいいはずなのに……待てど暮らせどケチは来ない。どうしたというのだ？

「ヤブメさま！」

切迫した衛兵の声がした。

「なにごとか」

「はっ、牢の者たちが脱走いたしました」

ケチの手引きだと、ピンときた。

「いま、村の者が総出で捜索しております」

「わかった」

この包囲網のなか、ケチが使うとしたら、地下の隠し通路以外は考えられない。

「手勢を集めよ」

「はっ」
衛兵はすぐに去っていく。
背後をふり返り、先祖伝来の宝剣を手に取った。ズッシリと重い。
「これを使う機会が、なければよいがの」
万が一の場合は、ケチにすべてを託さねばならぬ。しっかりとその宝剣を胸に抱え、暗澹（あんたん）たる気持ちのまま、館を出た。

門の前には、十名ほどの若者が集まっていた。みな提灯と樫の棍棒を持っている。
「そろっております」
先ほどの衛兵が報告した。みなよい面構え（つらがまえ）をしているが、シレンたちの力を考えてみれば、太刀打ちできそうにもない。いないよりはマシという程度だった。
「ついておいで」
歩き出すと、若者たちが自分を守るように四方についた。村のあちこちでは提灯がともり、ざわめいている。

地下通路への入口は、テーブル・マウンテンの頂上付近、すなわち村の外れにあるが、ふだんは使う者があらわれないよう、巧妙に隠蔽（いんぺい）してある。もともとは、アムテカからの緊急脱出通路として作られたものだという。
「やはりな」
岩の戸が開け放たれ、その奥にぽっかりと、漆黒の暗がりが広がっていた。この所在は、アムテカ王家の直系であるケチしか知らない。しかし、なかが分かれ道になっていることまでは教えていない。道の選択を誤ってくれれば、充分追いつける。今は、それに賭けるのみだ。
「急ぐぞよ」

声をかけると、若者のうち二名が先に入り、提灯で中を照らした。人がふたり通れるくらいの幅の古い洞窟で、水滴のしたたる音が絶えず響いている。

しばらく進むと分かれ道が見え、先導の者が立ち止まる。

「どちらに進めばよろしいでしょうか？」

分散して追撃という手もあるが、戦力で劣る以上、得策ではない。どうせアムテカに通じる出口はひとつしかない。あとはすべて行き止まりなのだ。

「右じゃ」

「はっ」

すべては太陽神の導くままに……

規則正しい水滴を聞き続けていると、心の苛立ちが増してくる。

「ヤブメさま、少々お待ちを」

先頭を進む若者のひとりから声がかかった。見れば、提灯のあかりがずいぶん下のほうにある。ロウソクが尽きかけていた。護衛の者たちは提灯の中のロウソクを交互に取り換え、新たな火をつけた。

一本目のロウソクが尽きたということは、もう出口は間近である。いまだケチの姿は見えない。もう出てしまったのだろうか……

いや、出口を開けるには時間がかかる。きっと間に合う。

逸る心を抑えつつ、その作業を待った。

「お待たせしました、ヤブメさま」

先ほどの男の声に、頷きを返す。そして、再び歩みを速めた。

五十歩といかないうち、なにやら声が聞こえ

てきた。
「おりゃあぁ！」
「あと少しだ！」
間に合った。シレンたちは、ちょうど出口を開こうとしているところだ。入口と同じ構造になっているので、岩を退ける必要がある。
若者たちが、指示待ち顔をしていた。声をひそめて告げる。
「ここで待ってるのだ」
反論の眼差しが向けられたが、無視して前に出た。そこに若い女の鋭い声が飛んでくる。
「そこにいるのは、誰だい!?」
岩のすき間から漏れ出た明かりで、そのお竜とかいう女の顔が、ボンヤリと見えた。キツイ顔立ちである。なにやら腰のあたりを探っている。武器だろうか。
「待て、話し合いに来た」
声をかけて機先を制した。
「母上？」
ケチ……やはりここにいたか。思わず身が震えるが、気をしっかり保つ。
「こっちには、話すことなんか、ないよーだ！」
コッパとかいう語りイタチが、白い首を突き出して、あかんべーをする。
「ああ。ずいぶんと上等な、もてなしだったしね」
お竜の視線も、冷ややかなものだった。
「うあ？　食べものでも、もらったっけか？」
巨漢の男ペケジは、とぼけたことを言っている。
「非礼は詫びよう。しかし、ここから先に行かせるわけにはいかぬ」
厳かに宣言した。
「母上、いまさら何を言おうとムダです。わた

しの決意を変えることは、たとえ母上といえども、できません」
ケチには一毫の妥協もない。
強情な性格は、いったい誰に似たのだろう。父なし子だというのに、まっすぐ一本気に育ってくれたのは嬉しい。しかしその心根には、父の復讐を成し遂げたいという動機があるのではないか？　自分がそのように、仕込んでしまったのではないか？
ジッと見返してくる目、そして無精髭に眉をいからせた姿には、心なしか父親の面影があった。あちこちすり切れた衣服には、道中の苦労が忍ばれ、肺腑をえぐられるような気すらした。
今のケチは、あくまで実の母としての言葉を待っている。それでも王家の血筋を引く者として、言葉を告げなくてはいけないことが苦しかった。

「仮に失敗したら、アムテカの血が絶えてしまうのだぞ」
自ら望んで茨の道を選ぼうとするのは、風来人の血が濃いためだろうか。
「必ずことを成し遂げると、考えてはくださらないのですか？」
淋しげなケチの声が、胸に刺さった。
「成功がおぼつかないなら、やらないほうがよい。それは挑戦ではなく、無謀というもの」
「勝算はあります。今まで耐えてきたのはそのため。シレンやその仲間たちと一緒だったら、必ずや魔蝕虫を倒すことができましょう！」
雰囲気を察してか、ケチ以外は誰もしゃべらない。しかしそれほどまでにケチが信頼する、シレンという男は何者なのだ？
さっきからそのシレンは、一言もしゃべっていない。ここからでは暗くてよく見えないが、

ケチの父のように、どこからどう見ても風来人という格好をしている。
「無理に決まっておる」
そう言い放つと、ケチは目をかっと開き、仕込み杖に手をかけた。
「いくら話してもムダということですね。これ以上、行く手を阻もうとなさるなら……たとえ母上であろうと、斬って捨てます！」
その声で、背後から護衛の者が駆け寄ってきた。
「控えていよ！」
ケチの前にも、シレンが立ちはだかっていた。
「ケチさん、ちょっと待ってよ！」
しゃべっているのは、シレンの肩に乗っているイタチだった。
「ヤブメさんって、祈禱師なんだってね。占いに、やばい卦でも出てるの？」
その言葉に、思わず戦慄した。またしても事態を決定するのは、神意だというのか。
「そうなのですか、母上？」
ケチが、答えをうながしてくる。
あの事件以来、神の御心に疑いが生じ、本当に必要なときにしか、卦を見ることはなかった。
果たして、今がそのときなのか……
「母上、旅立つわたしたちの運勢を、是非ともご教示願いたい」
こう言われては、神意を問いただしてみるしかなかった。
「わかった……しばし、待つがよい」
ゆっくりと懐中に手を入れた。そこには、紫の絹で大事にくるんでおいた太陽の鏡がある。
取り出してみると……
ひんやりとした表面は、くもりひとつない。そこには、自分の老醜が映し出されている。占

いの儀式をおこなうたび、シワが増えていく自分を認識させられる。そのことも、気が重くなる原因だ。
　松明の光に、鏡面が反射する。それを見つめながら、その奥で輝く、神の世界に想いを馳せる。
「エン、ベラーク、ナターリムン……」
　いにしえより伝わる呪文をとなえながら、精神を集中していく。目を閉じ、言霊の降りてくるのを願う。
　この戦いの吉凶、いかなるものか？　問いかけながら、心を内側に、同時に外側へ向かって開いていく。
　……ふと、何かが見えた。
　黄金の翼をしたコンドルが、羽ばたいている姿だ。これはわれらの守護神たる聖鳥が、魔蝕虫から解き放たれるということだろうか。だとすれば、これは止めてはいけないという神意なのか？
　こめかみに痛みが襲いかかった。まるで、守護鳥の嘴に抉られているような気がした。瞬間、これまでの半生が走馬灯のように流れ、その重圧が自分の双肩にのしかかる。あまりのことに、立っていられない。
　この十数年、自分は間違っていたのか？　あの人をあの場所へ送り出したこと、それは正しかったのか？　たとえその結果が、死であったとしても？
　コンドルの叫び声！　魂の奥底まで引き裂くような、悲しく、辛く、それでいて優しさにあふれた……
「母上!?」
　息子の声で我に返った。心臓が喉の奥から出

そうなほど、躍りあがっている。額の脂汗が、気持ち悪かった。
「どうでした?」
自分の子である。嘘を言って、通じるものではない。
「吉……と言わざるをえまい」
絞り出すように、声を出した。そう言うのが、せいいっぱいだった。自分が見たものを、ここで説明するのは、限りなく難しい。とくに素養のあるケチ以外に対しては。
「それじゃ、何の問題もないじゃん?」
楽天的なコッパの声が響く。
「しかし、なぜおぬしらは、他人ごとに命をかけられるのじゃ!?」
突っこんで行くことしか知らなかった、一本気なケチの父のことが思い出される。
「シレンは、一度決めたらテコでも動かないからなあ」
コッパは、シレンの顔を見つめている。
「もう他人事じゃないからね」
アッサリとしたお竜の言。
「ケチさんが困っているんだから、協力してやらないとねえ、あっはっは」
ペケジも、どこか抜けたような声で同意する。
ケチは、こちらをジッと見ている。もはや……諦めるしかなかった。
「これを持っていくがよい」
包みを差し出した。
「これはもしや……剛剣マンジカブラ!」
宝剣を手にしたケチは、かすかに震えていた。
「武運を、祈っておる」
「母上……かたじけない」
ケチは頭をさげ、シレンに向き直った。
「シレンさん。この剣は、真の勇者が使うべき

代物です」
ケチは、迷うことなくシレンに剣を託した。
そこまで、この風来人を信じているのか？
「いいの、ケチさん？」
コッパが疑問の声をあげた。
「わたしには、使い慣れた仕込み杖がありますから」
ケチは、口元を緩めてみせた。
黙ったまま受け取ったシレンは、鞘から剛剣を抜く。凜とした刃の音が、かすかにあたりの大気を震わせる。その、なんという輝き！　まるで、太陽神の加護があるようであった。
「シレンは、やる気満々だね」
お竜が嬉しそうな顔を浮かべている。
「ハナっから、そうだったじゃない？」
コッパは、対照的に困り顔をしていた。
剣を収めたシレンは、こちらに背を向けた。岩に手をあてたかと思うと、力いっぱい押し始めた。
「ペケジもやるんだよ」
「うん、わかってるよ」
お竜の言葉に、ペケジも手伝い始める。
徐々に岩が押し出され、冷たい風が吹きこんでくる。明かりも射して来る。その風を受け流している、シレンの顔がハッキリと見えた。行動は、運命に正面から立ち向かっていくケチの父と似ていたが、顔はまったく違う。シレンは飄々（ひょうひょう）としていて、まさしく風のように悪運を払う相であった。そこに、一抹の望みを託そう。
「それじゃ行こうか」
お竜が、シレンのかたわらにいる。それが、うらやましく思えた。
あのとき止める村人を振りきって、一緒に行

けたなら……

「母上、必ず戻ってまいります」

ケチはそう言うと、同じように背を向けた。

その言葉、叶ってほしい。心の底からそう願う。

「さて……次はその魔蝕虫ってヤツを、サクッとやっつけちゃおうよ」

コッパが高らかに宣言した。

「アニキ！　オレがいるんだから、誰にも負けないよ」

ペケジも自信満々だ。

この一行には、まったく気負ったところがなかった。散歩にでも行くような雰囲気だ。悲壮な覚悟をして旅立ったケチの父たちのときとは、まるで違う。

ケチは、足取りもかろやかに進んでいく。そしてその仲間も。その姿が消えるまで、出口に立ちつくしていた。

「今度こそ、占いは当たるかもしれぬ」

そんな言葉が漏れてきた。

いいや、当たってもらわねば困る。そうでなければ、このまま老醜をさらして、おめおめと生きてはいられぬ。ケチのいない人生など、もはや意味がないのだから。

第九幕　山頂の廃墟都市

通路が、さながら生命を有しているかのように、脈打つ壁に変わる。得体のしれない不気味さに、お竜は思わず顔をしかめた。

「アムテカに近づいている証だと、伝えられています」

思いを読みとったのか、ケチが壁について説明してくれた。

「そうかい。じゃあ危険はないんだね？」

ケチが頷いたので、実際に触れてみたが、なま暖かくて不思議な感触だった。

黄金郷までの道程は長く、モンスターの数も多い。

食糧の備えも充分あるが、食事の回数からすると、もう三日はダンジョンに潜っている計算になる。そろそろ青空が恋しかった。ムゲン幽谷という丸太で作られた桟道を歩いたときには、霧がかかっていて、ろくに太陽も拝めなかったことだし。

ケチは出口が近いと教えてくれたが、まだそれは見えそうもない……そう思っていると、不意にシレンが立ち止まった。

「どうしたんだい？」

先をのぞきこむと、大きな翼を生やした巨体……ドラゴンがうずくまっていた。その目は閉じられ、体はゆるやかに上下している。

「ええ、あんなのどうするの!?」

ペケジが仰天して声をあげたので、その口を押さえた。

「静かにしなよ」

ペケジは黙って、首を縦に何度も振る。そのとき、風の流れを感じた。
「どうやら、その先が出口みたいだね」
そう言うと、ケチが提案してきた。
「ここは、そっと脇を抜けるが上策です」
ケチの言うように、ムダな戦いは極力避けたほうがいい。幸いドラゴン一匹だけのようだが、無防備なところに炎を吐かれたら、たまらない。目覚めたときの対策を、練っておく必要があった。
何かなかっただろうか？　確か道中袋の中に……。
やがて、目的のものを摑んだ。
「それなに、お竜さん？」
今度は、しっかり小声になったペケジが訊ねてきた。
「"睡眠草"だよ。もしドラゴンが目覚めたら、こいつを使おう」
以前一服盛られたのも、この草だった。
ちらっとシレンを見ると、やや間があった後、頷き返してきた。やはり気にはしてくれているのだろう。少し気が晴れた。
「じゃあ、なるべく音をたてずにね。あたしが後ろに回る」
「では、わたしが先に出ます」
ケチが名乗りをあげた。
「オレはその次！」
ペケジが続いた。
「じゃあ、シレンはあたしの前で」
シレンの目が、ジッと自分に注がれている。何も言わなくても、最近は言いたいことがわかってきた。シレンはつねに、いちばん危険な役目を引き受ける。つまり、しんがりになろうというのだ。しかし……

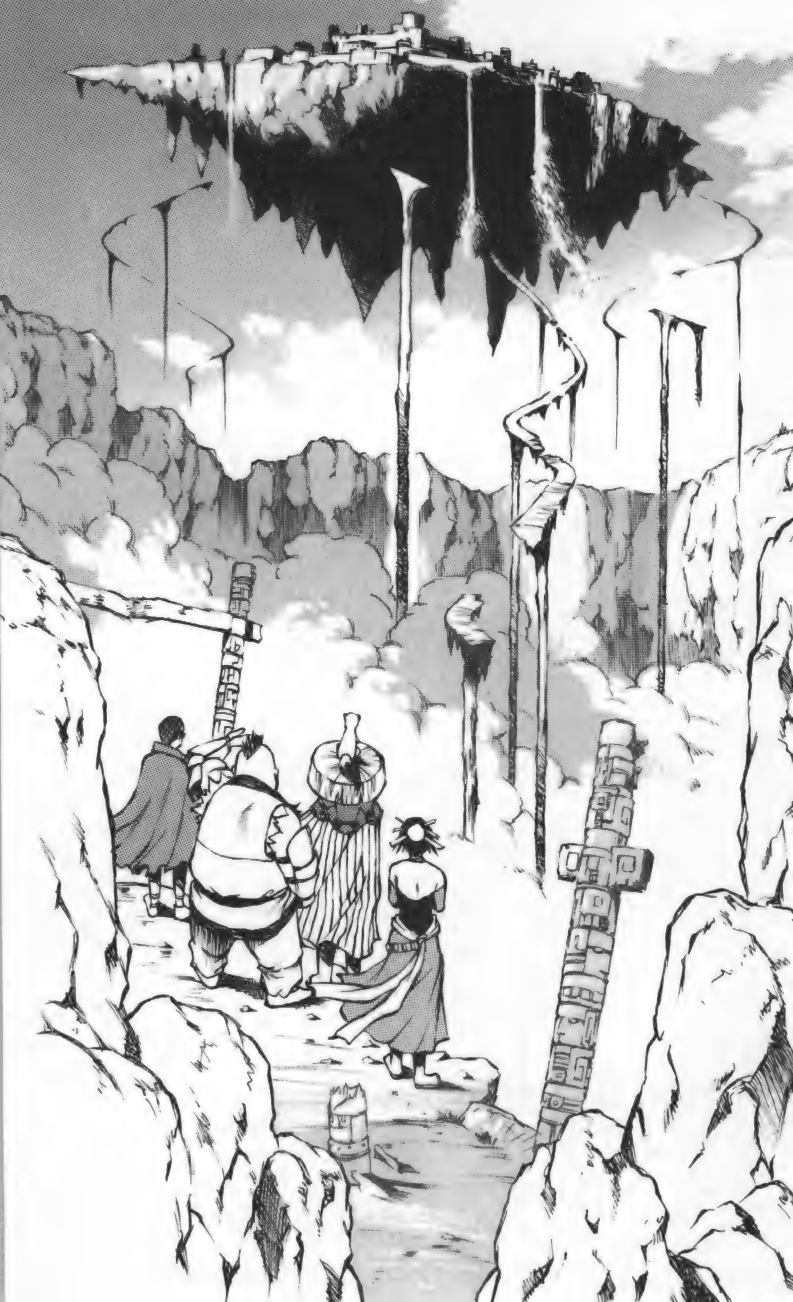
「大丈夫だよ、あたしにはこれがあるんだから」
そう言って〝百発百中の腕輪〟を示す。自分もいっぱしの風来人だ。シレンの重荷になるつもりは毛頭ない。
シレンはそれを見て、ようやく頷いてくれた。

そろりそろりと、忍び足でドラゴンの脇を通る。間近で見ると、やはり大きい。しゃがんでいても、ゆうに人間の大人ふたりぶんくらいはあるだろう。
「あっ！」
そのとき、ペケジが大きな声をあげた。あのバカ、いったい何を……
ところがペケジが見ている方向から、死神が急接近してくる。壁をすり抜けてきたか！
シレンは音もたてずカタナを抜くと、死神に向かっていく。
ケチも仕込み杖から刃を出しながら、駆けた。
「お竜さん、後ろ！」
またペケジの声。反射的にふり返る。
そこには目覚めたドラゴンが立ちあがっていた。炎を吐こうと口を大きく開けている！
「喰らいな！」
その口内に〝睡眠草〟を放りこむ。牙の生えた大きな口が、ガキンとそれを嚙みくだく。すると、ドラゴンはふらつき、正体を失って倒れこんだ。思わず、胸をなでおろす。
シレンは？　見ればシレンとケチが、死神相手に互角の攻防を演じている。死神の素早さは相当なもので、押しきれていない。
礫を投げようとしたとき、ペケジの声がした。
「アニキ、ケチさん、避けて！」
岩石が宙を舞った。ペケジが死神に向かって投げたのだ。

ケチはひょいと引くが、シレンはいまだ死神と刃を交わしている。
「危ない、シレン！」
声をあげた瞬間、やっとシレンが退く。岩石は、みごと死神にぶち当たった。
ここぞとばかり、シレンもケチも踏みこんだ。ケチの刃が死神の体を突き刺し、シレンのカタナがその体を叩き断った。よどみない連係。今なら、どんなモンスター相手でも戦えるような気がする。
シレンはカタナを収め、こちらを見て頷く。ぐずぐずしていないで、先へ進もう。
「見て、あそこ！」
嬉しそうなペケジの声。奥から光が射しこんでいる。
太陽に導かれるかのように、ペケジが駆けていく。

シレンは悠然とその後を追う。今までおとなしく道中袋に収まっていたコッパが、顔を出そうと、なかで暴れている。
ケチは立ち止まったまま、まだ仕込み杖も収めていない。その刃を持つ右拳が、痛いほどきつく握りしめられ、わずかに震えていた。
「ケチさん、先に行くよ」
軽く声をかけ、前に出る。返事はなかったが、まもなく仕込み杖をしまう音が聞こえ、足音が続いた。
滝の流れ落ちる音が強くなってくる。まばゆい光を全身に浴びながら、外へ出た。
太陽はまだ昇りきってはおらず、朝のひんやりとした空気が、肌に心地よく刺さる。シレンの肩に乗ったコッパは、尻尾をひくひくさせていた。

テーブル・マウンテンの頂上は、火口のようにぽっかりと穴があいていた。
いま立っている場所から石の歩道が走り、古代の都市へと渡されている。どういう原理か不明だが、その都市は空中に浮かんでいた。その先の道は、滝のほうへとつながっている。
滝の源流は、尽きることを知らない巨大な湖だ。これがテーブル・マウンテンの外側にまで水を放出しているかと思うと、そら恐ろしくなる。山全体に、水が満ちあふれているのだ。
なんともいえず、ため息が漏れた。
「とうとうわたしは、この地に還って来れたのだ……」
ケチの拳は握りしめられたまま。声は感極まっている。
ペケジはといえば、ボケッと山頂の偉容に目を奪われていた。
対照的に、シレンは腕組みをして都市を睨みつけている。来たる決戦に想いを馳せているのだろう。
「突っ立ってないで、さっさと行こうよ!」
コッパが声をかけた。シレンは、とっさには反応しなかった。ゆっくりと石の道に足をかける。
とすると……シレンもこの光景に驚いていたのだ! それが分かったことは嬉しいが、まだまだシレンの表情を読みきれてないと思うと、ちょっとした悔しさもわく。
そのシレンの背を追いかけ、横に並んだ。微笑みながらコッパが声をかけてくる。
「お竜さん、ずいぶん気合が入った顔してるね」
「あたりまえだろ!」
なにか見透かされているようで、つい声が大きくなってしまった。



「アニキ、待ってくれよ！」
後ろからは、ペケジがドシドシと駆けてくる。
振り返ると、ケチも一歩一歩踏みしめるように、歩み始めていた。
「うわっと……ずいぶん強い風だね」
遮蔽物がなにもないので、押し流されそうなほど風が強く痛く吹きつける。隣のシレンは、気持ちよさげにその疾風を受け流していた。
眼前に迫った門は、真ん中が押しつぶされ、二つの傾(かし)いだ柱だけが残っていた。
門をくぐると、石作りの都市が広がる。しかし廃墟そのもので、風と滝の音だけが響く。中心となる巨大建築物が、かろうじて原形をとどめているだけだ。
「予想はしてましたが、まさかこれほどまでとは……」
心なしかケチの肩が小さく見えた。
「黄金なんて、どこにもないよ！」
隣でペケジが、本当に悲しそうな声をあげた。
「いい加減にしな！」
つい一発、ペケジの後頭部をはたいていた。
「うわっ……」
コッパの声がした。ひどく顔をしかめている。瓦礫(がれき)のすきまに、たくさんの髑髏(しゃれこうべ)が散乱していた。原形を留めているものは少なく、ほとんどは潰れているか、どこか欠けている。風を受け、からからと音をたてながら、転がっていくものもある。
冷たい怒りがこみあげてきた。
「ケチさん？」
ペケジがケチを呼び止めていた。ケチはふらふらと、中心部にある神殿らしき場所へ足を運んでいる。

シレンは黙ってその後に続く。ペケジも走って、追いかける。
散乱する髑髏に別れを告げると、神殿に足を向けた。

神殿の中は、あちこちに巨大な蜘蛛(くも)の糸のようなものが張られていた。シレンはカタナで糸を断ち切りながら、先に進む。粘つくはずだが、カタナが何ともないのは、シレンの腕があってのことだろう。
「うわっ、と、とれない!」
糸に絡まってもがいているペケジを見ると、こめかみが痛くなった。
どうしてこいつは、毎度毎度、手間をかけさせるのだ?
「また、楽しそうなことやってるなあ」
コッパが喋ったと思うと、シレンがペケジに近寄り、拘束している糸を切断する。
「ふう……助かったよ、アニキ」
ペケジは、まだ少しからみついている糸を、力まかせに剝がした。
「さあ、急ぐよ」
みなを促した。
そういえば、ケチの姿が見えない。ひとりで進むなんて不用心な。
静寂の空間に、石畳を歩く音だけが妙に鋭く響いている。

神殿の中にも、白骨が転がっていた。髑髏だけしかなかった外と違って、全身骨格や、まとっていた衣服を留めたものが多い。
前方に長めの石段が見える。その上でケチが膝を突き、壁を見あげていた。視線の先にあるのは、石に刻まれた巨大な鳥だった。これが黄

金のコンドルなのだろう。神鳥だけあって、孔雀のような華やかさに満ちた、美しい浮き彫りである。
「何やってんの？」
ペケジが無遠慮にケチを呼んだ。ケチは立ちあがって、石段をおり始める。その目は、大きく見開かれていた。
「お待たせしました」
そう言って、頭をさげる。黒い瞳の奥で、静かな炎が燃えているように見えた。
「うわぁ、なんだよコレ!?」
コッパが見ていたのは、朽ちた〝風魔の盾〟である。風魔鉄という特殊な金属製で、軽いうえ、並の鉄以上の強度をほこる逸品だ。その盾が砕け散っていた。
そのすぐ側に、崩れた柱に横たわる白骨死体がある。盾の持ち主だろう。右腕のあたりには、危機のときに威力を発揮する〝背水の剣〟が、なかばから折れて転がっていた。壮絶な死闘の果てに散ったに違いなかった。思わず目頭が熱くなってくる。
「あっ、これは！」
ペケジが、遺骸にかけられた首飾りに手を伸ばした。なかば溶けてはいるが、まぎれもなく黄金製だ！
ケチが急ぎ駆け寄り、いきなりそれを奪いとった。
「あ、それ……オレが先に見つけたんだけど」
ペケジも、不思議そうな顔でケチを見つめている。あまりにも珍しいケチの行動。この男が、黄金などというものにこれほどの興味を抱くとは、思えなかった。
「王家の紋章……」

ケチの、押し殺したようなつぶやき。
とすると……もしかしてこの遺骸は、ケチの父親なのか!? その黄金は、ヤブメが護符の代わりに持たせた首飾りなのか？
しばらくのあいだ、誰も声をかけられなかった。ひとりシレンだけがケチの横に並び、目を閉じると、静かに遺骸に手を合わせた。
「シレンさん……」
ハッとしたケチも、すぐさま拝み始めた。みなもそれにならった。ケチの父の、無念の霊魂を慰めてやりたい気持ちは一緒だ。
短い黙禱が終わると、ケチはふたたび頭をさげた。
「みんな、ありがとう」
「絶対、その魔蝕虫ってヤツを倒そう！」
コッパが高らかに宣言する。
「そうだよ、ちゃんと仇をとらないと！」

ペケジはもう黄金のことを忘れたのか、ここぞとばかりに同意した。
自分も黙って頷く。
シレンはふり返り、神殿の外へと足を向けた。
ケチは遺骸から首飾りを外し、自分の首にかけた。その表情には、強靭な決意がにじみ出ていた。

「うーん。でもそいつは、どこにいるんだろう？」
神殿を出ると、コッパが唸り声をあげた。
「たしか、地中から現れたって話だね」
そう答える。絶壁から下を眺めるが、滝から煙る靄に包まれているため、よく見えない。
「明るいのが、まずいのかもしれない」
ケチは全身に陽を浴びながら、中空を見つめていた。

シレンは、憎いばかりの冷静な態度で、腰の剛剣マンジカブラを抜き放ち、光にかざした。
ペケジは滝のほうをジッと見つめている。
「ケチさん、あの先にはなにがあるの？」
そこには、もう一本の石の道が通じていた。
「滝の裏には〃虹の根もと〃と呼ばれる洞穴があり、みそぎがおこなわれていたと聞いています」
そういえば、アムテカには井戸のたぐいがない。清らかな水が豊富だから、必要ないのだろう。とすれば、その洞窟で、水関係のすべての神事がおこなわれていた可能性もある。
「ともかく行ってみよう。このままジッとしているより、ずっといいよ」
コッパが提案する。異論があるはずもなかった。
マンジカブラを収めたシレンが、先頭に立って歩き始めた。反射的に腰の袋を確認し、目つぶし用の粉が無事であるのを確かめると、後に続く。

滝壺のあたりには、多色の光が、門のように浮かびあがっている。その虹が消えるかと思われるところに洞窟が見えた。
「こんな綺麗なところに、いるのかねえ……」
禍々(まがまが)しいバケモノとは、あまりにもそぐわない場所である。
コッパが鼻をひくつかせている。
「うーん……間違いないよ。イヤな匂いがプンプンしてる」
うなずいた顔は、真剣そのものだ。
道中袋の中から、焙烙玉(ほうろくだま)を取り出した。残りはあと二つ。有効に使わなくてはいけない。
ケチが仕込み刀を抜いて、刀身を確かめた。

ペケジは手をゴキゴキと鳴らし、肩を回して筋肉をほぐしだす。
シレンはただ洞穴の奥を見つめて、みなを待っていた。
焙烙玉を腰にくくりつけたとき、カシャンという刃をしまう小さな音がした。
「準備はいい?」
コッパの言葉に、みな首を縦に振る。
「いつでもいいよ!」
ペケジが能天気に返事をした。
「あんた、少しは声を落としなよ」
ささやくと、ペケジは「どうして?」という表情をする。まあ放っておこう。
「みなさん、よろしくお願いします」
ケチの一礼に応えて、シレンが軽く頷いた。
その瞬間、清風がはためいてシレンの縞合羽を揺らした。滝の水が、あたりに細かく舞う。頬を濡らす水滴が心地いい。
「さあ、行こう」
コッパが、シレンの肩に飛び乗った。まずそのシレンが、闇のなかへ溶けこんでいく。
「なかは、灯りがなくても大丈夫みたい」
すぐにコッパの声がした。
「シレンさんには、確かにクロンの追い風が吹いてますね」
ケチが嬉しそうに続く。
「コレが終わったら、腹一杯食べるぞ!」
ペケジも気合を入れて乗りこんだ。
「シレンと追い風……確かに、このふたつが組み合わされば無敵だね」
自分も腕には多少の自信がある。そんじょそこらのモンスターには、ひけなどとらない。それに信頼する旅仲間がいる。恐れる要素は一切なかった。

胸のなかに息づく確信とともに、なかに入った。

岩の透き間から光が漏れているので、妙に明るく幻想的である。幅広い空間で、ピチャピチャと水のしたたる音だけが響く。

ところどころに、洞窟を支える太い柱があった。そこに身を隠しながら前進していく。この洞窟の真上は、例の大きな湖のはず。その真下に、こんな大空間が広がっているのが不思議だ。

ふと、この非常時に、冷静に観察できている自分に気づく。頼もしい仲間と一緒だとこうも違うのかと、ちょっとした驚きでもあった。

ふとシレンを見ると、肩に乗ったコッパが、指を口に当てている。見ると、遠くないところにマッドレムラスの大群がいた。青い甲冑をまとい、強烈なぶちかましをかけてくる犀（さい）のモンスターだ。起きているのは二匹だが、眠っているのを合わせると二十はくだらない。

「うーん」

方策を思案していると、コッパが密やかな声を出した。

「起きているヤツだけ仕留めよう。進むのはアッチの奥。少し狭くなっているから、好都合だよ」

コッパをジッと見つめるシレンの眼差しも、それに賛同している。

大きくうなずく。ケチもペケジも異存はなかった。

「モンスターは二匹だから、二手に分かれよう」

続けてコッパが提案する。

「一匹はわたしが引き受けますよ」

ケチが真っ先に言った。

「ならあたしは……ケチさんと組むよ」

本当ならシレンと一緒にやりたいところだ。しかしケチの腕前はまだまだ未知数である。シレンなら何の心配もいらないから、ここはケチの援護に回っておいたほうがいいだろう。
「それじゃオレはアニキとだね」
ペケジの反応も素直だ。
シレンがそっと剛剣マンジカブラを抜く。その刀身は一分（いちぶ）のムダもなく、虹色の波紋が美しい。
腰の袋から四つ、礫を取り出した。何も言わずとも、ケチが隣に来て、仕込み刀をかまえる。
コッパはそっと首を出し、ようすを見ていた。
時が刻まれる。ピチャンという水滴だけが妙に響く。
「いまだ！」
コッパの鋭く小さな合図に、一斉に飛び出した。
二匹のマッドレムラスはこちらに気づいていない。刃が届くまで十歩。
マッドレムラスが一匹、こちらを振り向く。礫を放つ。
マッドレムラスが声もなくふらつく。それを見て、もう一匹が不審げに振り返る。もう一つ礫を放つ。狙いはさっきと一緒だ。
同じく麻痺したように、相手の足元がよろめく。ところが、二匹目は低い唸り声をあげた。冷や汗が浮かぶ。
あと五歩。そのとき、シレンが躍りあがった。横一文字にひらめく太刀筋とともに、そのモンスターはのけぞって倒れる。すぐ脇で控えていたペケジはそれを受け取り、ゆっくりと音がしないように大地に横たえる。
それを見ている間もあらばこそ、ケチが大股で接近した。

自分も、残っている二つの礫を続けざまに放つ。生き残った眼前のマッドレムラスは、手を振ってそれをはじき飛ばす。気づかれてしまった以上、礫はもとよりオトリだ。相手はこっちに集中したおかげで、他に注意がまわっていない。

死角から、ケチの仕込み刀が貫いた。マッドレムラスは、何が起こったのかわからず凍りつく。ケチが刃を抜くと、それは眠るように崩れ落ちた。それからケチは、手早く刀身を振って、鞘である杖に戻した。見事な腕前だ。むしろその腕を、今まで隠し通してきたことに驚嘆した。

あたりはシーンとしている。たてた物音は最低限で済んだため、マッドレムラスの集団は、まだ眠りこけていた。そのいびきが、微かに低く聞こえてくる。

思わず、ふぅと息を吐く。奇襲は成功だ。とはいえ、グズグズはしていられない。

気がつくと、シレンが隣にいた。万が一に備えて、自分を守ってくれるつもりのようだ。これだから、まいる。

シレンの肩に乗るコッパが手を動かして「急ごう」とうながした。

奥のほうは、通路になっていた。先頭のシレンは黙々と歩いている。誰も声を発する者はいない。

進むにつれ、豚のような鳴き声が大きくなっていく。それも複数である。

「うっ」

コッパが角から先を覗いて、低く嫌悪の声をあげた。シレンは素速く引きさがった。

「どうしたんだい?」

訊ねると、コッパがゆっくり口を開いた。

「今度はデブーチョの集団だよ。数はさっき以上。しかも、ほとんど目覚めてるときてる」
デブーチョは、岩石投げを得意とする豚型のモンスターである。気づかれると、すぐにでも大量の岩が飛んでくるだろう。じつに厄介だ。
「それでも、ここは進むしかない」
ケチが首飾りを握りながら、告げる。
「うむむむう」
コッパが折れそうなほど首を傾けていた。
そっとようすをうかがう。寝そべっている者もいれば、忙しげに動いている者もいる。どうやらこれから食事が始まるようだ。
その背後には、投擲(とうてき)用の岩が山積みになっていた。その側には、なにやら巨大な亀裂が見える。大きいだけではなく、深そうだ。
向き直ると、みな思案に沈んでいた。シレンだけは、どことなく楽しそうだ。被害を最小限にくい止めるには、デブーチョに岩を投げさせないことが肝要だ。とすれば……
「こういうのはどうだい？」
低い声で提案してみる。みなの視線が集まった。
「まず、半分の人数であそこを確保して、デブーチョの岩石投げを封じる」
指で岩山を示す。
「そして両面から挟撃ってのは？」
シレンは、ただこっちをジッと見ている。
まずケチが頷いた。
「悪くない考えですね。ただ岩山まで、少々距離があります」
その危惧も、もっともである。
「それだと誰か、相手の気を惹きつける囮(おとり)が必要になるねえ……」
コッパも理解は早かった。もちろん、その点

も考えてある。
「そいつは、あたしに任せな」
「お竜さんが?」
ペケジが心配そうな声をあげる。
シレンの目が、わずかに見開かれた。
「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。まあ見ててごらん」
いつも守ってくれようとするのは嬉しいが、腕には自信がある。お荷物になるのだけは、耐え難い。
シレンが、再びこちらを覗きこむ。心の底まで見透かされそうな瞳。
ペケジはひとりオロオロしている。
ケチがツバを呑みこんだ。
そのときシレンは少し笑って、しっかりとうなずいた。何か温かいものが胸のうちに広がる。この笑顔を見たいがために、自分はここにいるのかもしれない。
心を落ち着けるために、軽く咳払いをした。
「岩山を確保する役はシレンがいいだろうね。それからペケジだ」
シレンの機動力は欠かせない。ペケジには敵に岩を投げ返すだけの力がある。
「う、うん、わかったよ」
ペケジは素直だが、今いち役割を理解していないのか、困惑顔である。
「ペケジの足じゃ、シレンには追いつけないから、あたしとケチで、援護しながら送り届ける。いいね?」
「ええ、ペケジさんには指一本触れさせません」
ケチが力強く答えた。
「頼んだよ。みんなの力を合わせる必要があるからね」
全員の瞳が、決意に燃えていた。

慎重に音をたてないよう、角を曲がる。背後ではシレンがひかえている。
通路の入口に立つと、見渡す限り、紫の肩当てをしたデブーチョ。そこで、二手に分かれる。右に行ったシレンは、柱の陰に隠れた。
デブーチョの集団は何かを煮こんでいる。のんびりとできあがりを待っているのか、脱力している者が多い。こちらのほうに注意を払う者はいない。
ケチとペケジ、それにコッパは、通路の入口付近で息をひそめている。無言でシレンに頷くと、シレンが目で返事をした。
そこで柱の陰から、ゆっくりと姿をあらわす。
「はぁい」
その場で立ち止まる。両手を膝に乗せ、武器を持っていないことを示す。
デブーチョが何匹か首をかしげて、こちらに視線を寄せてくる。
「あはーん」
ここぞとばかりにニッコリと笑い、腕で挟むようにして胸を強調させる。間抜けな男には効果抜群のワザだが、モンスターにはどうだろう?
デブーチョの熱い視線が一斉に集まる。効いてきめんだ。自分の魅力に参ったモンスターの鼻息が、微妙に優越感をくすぐる。そのスキに、シレンはそよ風のように足音もなく、岩場へ直行した。
ここで手をゆるめるわけにはいかない。出血大サービス！
片目をまばたかせ、投げキスを送る。
デブーチョたちが、狂ったように声をあげて近寄ってくる。

うわっ。うまく行き過ぎた……豚に迫られても嬉しくない！　とはいえ、笑顔は絶やさずに。
そのとき、後ろのほうから警戒の声があがった。シレンが発見されたか!?
「お楽しみの時間は終わりだよ！」
思いきり目つぶしの粉を撒く。
前のほうにいたデブーチョの一群が、のたうちまわった。
瞬間、ケチが飛び出した。
自分も、後ろ腰から小太刀を抜く。そして恐慌状態のデブーチョに斬りこみ、ペケジのために血路を開く。
そのスキに、シレンが突風のように岩山まで駆けぬけた。
そこへ目つぶしから逃れたデブーチョが、近づいていく。
シレンが鯉口を切った。かと思うと、豆腐でも切るかのように相手を一刀両断。返す刀で二匹目も屠られる。
腕もそうだが、剛剣の切れ味は神妙なるものだ。まったく敵を寄せつけない！
「一気に行こう！」
コッパの号令を待つまでもなく、岩山めざしてひた走る。
十歩も進んだとき、一匹のデブーチョが行く手を遮った。
「ここはわたしに」
言うなりケチが前に出て、斬り捨てた。
デブーチョたちは混乱から立ち直りつつある。急がなければ。
今度は前に二匹。
「じゃあオイラだ！」
コッパが足を速めると、右側にいるデブーチョに向かう。

デブーチョがかがんで拳を振りおろした。
「へへん、どこ狙ってるんだよ！」
コッパは易々と避けるると、その腕を駆けあがり、体で目をふさいだ。
その瞬間を狙って、ケチの必殺の一撃が襲いかかる。
モンスターは音もなく沈んだ。
「へへーん、オイラだって役に立つだろ」
コッパは飛びあがるが、誉めている暇はない。礫を二つ取り出し、もう一方の目に投げつける。
両目を押さえ、ふらつくデブーチョを目がけ、小太刀を突き出す。
すると、もんどり打って倒れこんだ。
「行きな、ペケジ！」
「うん」
ペケジがどたどたと駆け出した。
岩山まで、そうはない。ペケジの足でも、すぐに着くだろう。
襲いくるデブーチョを、ケチとふたりで左右から片付ける。もう目つぶしの効果も薄れ、次々と新手がやってくる。
ペケジにもデブーチョが飛びかかるのが、ちらりと見えた。
「どりゃああ！」
ペケジはそれを簡単に放り投げ、シレンの護る岩山にたどり着く。
よし、まずは成功だ。
そのとき、一匹のデブーチョが足を滑らせて亀裂に転げ落ち、断末魔の声をあげた。消えゆく叫び声の長さからして相当に深い。こちらも落ちないように気をつけねば。
「アニキ、後は任せて！」
言いざま、ペケジが足元の岩を、迫り来るデブーチョの群れに投げる。まともに食らった一

匹が、前のめりに崩れる。
いつのまにか、コッパも岩山に登っていた。
「さあ、あとは一気にいくよ！」
「任せてください！」
ケチの気合の入った声が応じた。そのとき……
「お竜さん、ケチさん、後ろ！」
コッパの危急を告げる声に、振り返った。
「マッドレムラス……」
さっきまで眠っていたはずの青い甲冑軍団が、通路を埋め尽くすかのように並んでいる。戦闘の音を聞いて起きたのだろうが、このままでは、逆に挟み撃ちだ……思わず唇を嚙む。
ペケジは敵にそこをとられないように、岩山を離れられない。シレンの眼前には、三体ものデブーチョがいる。どうする？
迷うまでもなかった。腰の焙烙玉を二つとも取り出す。火打ち石で両方に点火すると、一つをケチに渡した。
「ケチさん！」
「合点！」
とっさのケチの口調は、王子というより、風来人っぽいものだった。そっちの方が似合ってると思うのだが……
ケチがマッドレムラスに投げつけるのが早いか、自分がデブーチョにぶつけるのが早いか。
「おりゃあ！」
「えいっ！」
着弾。一瞬遅れて……閃光と巨大な爆発音が重なり、洞内が大きく揺れる。
どうだ、いけたか？　前後から大きな土煙が巻き起こり、まだ視界は晴れない。
「うわーん！」
そのとき、前方からペケジの悲痛な叫び声が

聞こえてきた。
目測を誤って、ペケジを巻きこんでしまったのか？　思うまもなく、煙のなかへと駆け出した。
立ちすくんだり倒れていたりするデブーチョを、かわして進む。
「助けてぇぇぇぇ！」
ふたたびペケジの声がした。
しだいに煙が散っていく。ペケジは、亀裂のふちにしがみついていた。爆発の衝撃で、いっしょに吹き飛ばされたのだろう。今にも転落しそうだ。
「うわーん、お竜さん！」
ペケジは泣き声になっている。
「待っといで」
距離を詰めようとした瞬間、巨漢のデブーチョが立ちふさがった。怒り心頭のようすで、頭から湯気を出している。
「どきな！」
とっさに小太刀をかまえ直す。
「ここはわたしが！」
言うなり、ケチが跳んだ。
「くっ……」
にぶい金属音。デブーチョは腕当てで、ケチの刃を受け止めた。さすがに爆発を生き延びた猛者だ。これまでのザコとは、わけが違う。
ケチがわずかに引くと、そのデブーチョは猛り狂う声をあげた。それに呼応して、他のデブーチョたちが活気づく。どうやらこいつが、デブーチョの隊長らしい。
「ちぃ……」
デブーチョ隊長は目を血ばしらせながらも、ケチそして少し離れたところにいる自分の挙動

まで窺っている。今の一撃で目が覚めたか、案外冷静だ。
小太刀を握る手に力がこもる。こんなところで、足踏みしている場合じゃないのに！
「うわっあぁぁあああ！」
思うまもなく、ペケジの手が地面から離れた。
「ペケジー！」
叫んだ瞬間……疾風のように現れたシレンが、ペケジの手を取った。
「アニキ……」
ペケジの顔は、涙でゆがんでいる。
ひときわ大きな風切り音。
見れば、ケチがデブーチョ隊長の拳を避けたところ。
ケチはそのまま脇に飛びこんで、その首筋に刃を突き刺す。
「ぬっ！」
だが、またしても火花が散る。デブーチョ隊長が体をひねり、肩当てに攻撃をずらしたのだ。
一進一退の攻防……このままでは、らちがあかない！
「たぁあああ！」
大声で注意をひきつけながら、小太刀を抜いてケチの加勢に駆けつける。
相手は鼻息を荒くし、こちらを睨みつけながらも、ケチを腕力で撥ねのけようとする。
抜いた小太刀で斬りかかる……とみせかけて。
「これでも、くらいな！」
目つぶしを放つ。
ふたりを敵に回して戦うべく、しっかり目を見開いていたデブーチョ隊長は、まともに食らって、ふらついた。
「よそ見はケガのもと！」

その懐に飛びこんだケチの鋭い突きが決まり、デブーチョ隊長の動きが止まる。刹那、凍てつくような雄たけびをあげながら、後ろに倒れこんだ。それきり動かない。

デブーチョたちから失望の声が漏れた。熱が冷めたように、相手の士気がさがっていく。

「ふう……助かりました」

刃を構えなおしながら、ケチが息を弾ませた。

「どうってことないよ」

そう返したとき、背後から不吉な音が近づいてきた。

恐ろしい勢いで転がってくるマッドレムラス。思わず飛びのいた。その犀のモンスターは倒れたデブーチョ隊長を踏み越え、さらに先へ向かう。そこには、ペケジを引っ張っているシレンがいた！

「シレンさん！」

同じように、マッドレムラスの突撃を避けたケチが叫んだ。

今ようやく、ペケジが自分の手足で地面にはいつくばったところだ。

鈍い衝撃とともに、シレンの身体が宙に浮かんだ。えっ！　まさか!?

「アニキ！」

マッドレムラスもろとも、シレンは亀裂に吸いこまれていく。その光景は、とてつもなくゆっくりした動きに見えたが、自分はまったく動けなかった。

「シレーン！」

ただ声だけを張りあげていた。

「待てよ、シレン！　オイラを置いていくなよ！」

目の前を、白いものが飛んでいく。コッパが、落下するシレンを追ったのだ。そのシレンとコ

ッパの姿は、瞬く間に見えなくなった。
　穴は、奈落にまで通じていそうなほど深く、底が見えない。
「はあ、はあ」
　隣に駆け寄ったケチの息は荒い。
「シレンさんには、クロン神のご加護がついています。だから、きっと大丈夫です」
　ケチが、なぐさめるように声をかけてきた。
「アニキなら、こんなのへっちゃらだよ！」
　起きあがったペケジの声は、確信に満ちている。
　気休めにしか思えない。自分のせいで、シレンは……
「悩んでいる暇はありません。まずはここを、切り抜けることが先決！」
　ケチの声で我に返る。モンスターが、あたりを十重二十重（とえはたえ）に囲んでいた。ダンジョンの至るところから、湧いてきたようである。
「このやろうっ！」
　ペケジが、近くにいたマッドレムラスにぶちかましをかけた。相手はたやすく吹き飛び、後ろのモンスターにぶつかって一緒に倒れる。
「はあっ！」
　ケチが地面を蹴って斬りあげると、デブーチョが弾かれたように吹き飛ぶ。
　その調子で、十匹、二十匹と片付けていく。
　やがて……
　ケチは肩で息をしていた。
　ペケジはまだ元気だが、あちこちに赤や青のアザをつくっている。
　この二枚の壁を抜けてきたモンスターに、小

太刀で止めをさす。しかし、もう腕があがらなくなってきた。

　視界を埋め尽くす怪物たちは、少しも減ったようには思えない。このままでは、数で押されて全滅を待つばかり。なにもかもが、悲観的に思えた。

　その瞬間、あざ笑うマユツバの顔が、脳裏に禍々しく浮かんだ。

「くそっ！」

　腰の袋から、ありったけの礫を取り出す。

「食らいやがれっ！」

　手当たりしだいに放つ。次々と敵が倒れていく。だがその戦列を埋めるべく、背後から増援が来る。

　もはや礫もない。焙烙玉はとうにつきた……不意に、奈落に視線がいった。

　あとは、みんなシレンのように穴に飛びこむしかないのか？　だがぱっくりとあいた穴は地獄そのもののようで、飛びこんで助かる保証など、どこにもなかった。

第十幕　奈落の底へ

落ちる。落ちる。落ちる。顔が、風圧で痛いほど引っ張られる。全身の毛も、なびきつつ撫でつけられるという、目茶目茶な状態だ。

コッパはシレンを追って亀裂に飛びこんだが、後悔はない。シレンなら、こんな状況も切り抜けられるという確信があった。

眼下にかすかに見えるのは、マッドレムラスの背中。その下に、シレンが組み敷かれている。

このままではシレンは、底に落下したときに、押しつぶされて死んでしまう！

「危ない、シレン！」

シレンの目が、闇にキラリと光った。マッドレムラスの左腕からするりと抜けると、その顔面に、えぐるように拳を食らわす。マッドレムラスの首が、大きく曲がる。

「いいぞ、その調子だ！」

シレンはそのまま、モンスターの首を引き寄せる。双方とも頭から落下していく！

マッドレムラスが、必死に身を震わせてシレンの手を取った。シレンは、その脇の下に手をやり、抱きつくかたちで密着する。グッと腕に力がこめられた。

何を考えてる、シレン？

そのシレンが、ゆっくり大きく足を振りあげた。すばやくその足を振り戻すと、その反動で体が入れ替わる。

今やシレンの背中が見え、その下にマッドレムラスが押さえこまれていた。縞合羽（しまがっぱ）がはためいた。

マッドレムラスが、腕をジタバタさせる。シ

レンはしっかり、その体にまとわりついて離れない。体勢がくずれそうになると、巧みに反対側に体重を乗せ、舵をとる。

そのとき、どこからともわからない淡い光に照らされて、地面が見えた。落下して散らばったと思われる岩が、そこらじゅうに転がっている。

「シレン！」

ズドーン。

声をかける間もなく、轟音と土煙がまき起こり、何も見えなくなる。

やばい、今は人のことを心配している暇はない！　すぐに体を丸めて、その勢いで回転する。

「うぎゅ」

腰のあたりに、微妙に柔らかい衝撃。感触からいって、シレンの背中ではないか？　思うまもなく、そのまま転がる。

「いで、いで、あでで……」

微妙に尖った岩で、あちこち小突かれる。とはいえ、自然に転がるにまかせてゆっくり止まるほうが、衝撃が少ない。落ち着いたころには、すっかり目が回っていて……やっぱり、足がふらつく。

そこは広い洞窟のような場所だった。頭を振りながら、あたりを見まわす。

いた！　折り重なるように、マッドレムラスとシレンが倒れている。その少し脇に、もう動かないデブーチョもいた。

マッドレムラスの姿勢は不自然に固まっており、一目でこときれているのがわかる。シレンは、その上に倒れ伏している。まったく動きがない。

「おい、シレン！　オイラを脅かそうとしたって、ムダだよーだ」

腕組みをして怒ってみせるが、シレンは無反応のままだ。おかしい。今までの経験上、ここらで起きあがるはずだ。

そろりそろりと、シレンに近寄る。触れたその頬は、微妙に冷たい。もしや……

「うー、ブルブル、まさか、そんなことないさ」

首を振って、その恐ろしい考えを頭の片隅に押しやる。

「じょ、冗談はよせやい」

シレンの生命力は底を知らない。だから絶対、大丈夫だ！　必死で、シレンの顔を舐める。

起きろ、起きろ、起きろ。気がつけ、気がつけ、気がつけ。

しかし、シレンは横たわったまま……体温はますます下がるばかりで、ピクリとも動かない。

「起きてくれよ……」

視界がゆるゆる歪み、頬に熱いものがこぼれてくる。

思えばいつからか自分は、シレンにつらく当たるようになっていた。食糧が尽きかけたときなんか、シレンが大きなおにぎりを半分くれたのに「こんなもん食えるかー！」と言って怒ったこともあった。本当はすごく嬉しかったんだ……

口もとを確かめる。息はもれてこない。

背中に乗る。耳をつけて聞いてみるが、何の音もしない。

「シレン！　シレン！」

叫びながら、シレンの身体の上で思いきり飛び跳ねる。

「目を開けてくれよおぉぉお！」

運命神リーバよ、旅の神クロンよ、シレンの人生をここで終わらせてしまうのですか？　まだこの世の不思議という不思議を見極めてない

のに、こんなところで運命を終わらせてしまうのですか？　あまりと言えばあまりじゃないですか？　シレンはいつも、仲間のためを思って最善のことをしてきた。今の今までだって、そうだった。それなのに、それなのに……
そのとき、足元でドクンと音がした。揺れる景色のなかで、シレンの指先が、かすかに動いた気がした。
「えっ？」
錯覚かと思い、涙を拭ってもういちど見る。シレンの右手が、大地を摑むように、ゆっくりと曲げられていく。せきこむように息がもれ、今乗っている身体が、かすかに上下しはじめた。すぐにシレンは、寝返りをうつ。
なんだ！　やっぱり、生きてるじゃないか！　くそっ、心配して損したぞ。つい飛びおりて、その頭を蹴る。

「もう、早く起きろよな、シレン！」
シレンは、なにやらブツブツと言いながら、ゆっくり起きあがった。
落下の衝撃で痛めたのだろうか。胸に手をあてながら、座りこむ。ますます泣けてきた。
「まったく、何やってるんだよ！　やっぱりオイラがいないとダメだなあ」
反応がない。
「シレン！」
その目は半開きだ。だがその口元には、大丈夫だと言いたげに、うっすらと笑みが浮かんでいた。安心していいのかどうか、わからなかった。
天井にぽっかりと空いた穴を仰ぎ見るが、真っ暗だ。壁もツルツルして足がかりがない。
みんな無事かな？　お竜の悲痛な叫びが、ま

だ耳に残っている。
　こちらから戻れない以上、みんなの腕を信じてここで待ち、運命神リーバが微笑みかけてくれるのを祈るしかなかった。
　シレンは全身の点検を終え（骨が折れている部分はなさそうだ）、剣の所在を確認していた。剛剣マンジカブラは、下緒（さげお）でしっかりと支えられている。背中にくくりつけた愛用のカタナも、鯉口を紐で留めてあったため、問題なく収まっていた。
「みんなと合流しないとね」
　そう言うと、シレンは軽く頷いたが、瞳には憂いの色があった。その肩にひょっこり乗る。シレンは懐から葉っぱを取りだし、口にくわえた。シレンなりの、落ち着きかたなのだ。もう大丈夫だろう。
　大きな洞窟の中に、どこか這いあがれる場所がないか探す。進んでも進んでも、それらしき場所は見つからない。
「うん？」
　気になるにおいが漂ってきた。しいていえば蜘蛛に近いが、初めて嗅ぐものだ。意識を集中する。薄いながらもそのにおいは、この洞窟全体に充満していた。落下の衝撃で、今まで少々鼻がバカになっていたらしい。
　尻尾がムズがゆい。こういうときは、たいていイヤなことが起こる。
「どうも、奇妙だよ」
　シレンは剛剣マンジカブラを抜き、前の闇にジッと目を凝らしている。
　水のしたたり。蝙蝠（こうもり）の鳴き声。地面には鼠（ねずみ）がうろちょろしている。
　しばらくじっとしていたが、それ以外なんの

変化もなかった。
「もっと、探ってみる必要がありそうだなあ」
シレンは黙って先へ進みだした。
においの元に近づくにつれ、蜘蛛の糸のようなものが、岩に付着しているのに気づく。側面の壁も、一面その糸で覆われていた。通常の蜘蛛にしては、量が多すぎる。
ふと、荒れ果てたアムテカのことを思いだして、背中に震えが走った。あの蜘蛛屋敷みたいな神殿は、同じヤツの仕業に間違いない。
あたりはひときわ低く、すり鉢のようになっている。その地形に沿って、大量の糸が巣をかたち作る。その真ん中に、巨大な生物が鎮座していた。高い岩の天井や壁のあいだにも、散発的に糸が張られていて視界が悪く、全貌は見えない。こいつが魔蝕虫か⁉
シレンは反射的に岩陰に身をひそめていた。
相手は、とにかくでかい。横幅はドラゴンの倍、いや三倍以上はあるか。背丈は、座っているというのに、すでにドラゴンに匹敵する。立ちあがったら、どのくらいになるのか見当もつかない。そう思うとゾッとした。
二本の足は、折りたたまれたままだ。背中の二対の翅（はね）は、黄金色に照り輝きながらゆっくり上下している。なにかの刃のように、触れると切れそうだ。頭は、二股に盛りあがっている。それぞれ触覚が生えており、ときおりピクピクうごめいた。そして人のこぶし大はある二つの目は、静かに閉じられていた。
「うむむう」
思わず嘆息したとき、魔蝕虫の地を這うような唸り声がした。
シレンはとっさに身構えるが、相手は動く気配はない。どうやら眠っているようだ。

「どうする、シレン？」
いちおう訊ねてみる。シレンの目の輝きは
「このまま一気にカタをつける」と言っていた。
邪魔になるといけないので、肩から降りる。
「絶対、一撃で仕留めてこいよ」
声をひそめて、シレンの背中を叩いた。シレンは目だけで頷くと、音もなく移動を始めた。
魔蝕虫は、規則正しく寝息をたてていた。シレンは巣のすきまにひらりと入りこむと、剛剣マンジカブラを振りかぶる。
いける！
そう思ったとき、背後で何かが動いた。魔蝕虫の頭は、あいかわらず規則正しく上下している。だとすれば、何が？
それは、巨大なサソリのような尾だった！
「シレン、危ない！」
とっさに声をあげた。
シレンは身をよじる。肉の斬り裂かれる音とともに、左肩から血が吹き出す。勢いあまった魔蝕虫の尾は、そのまま壁に突き刺さり、岩をも砕いた。
シレンは肩口の傷を押さえながら、巣を飛び出す。魔蝕虫の大きな二つの目が開き、怪しくきらめいた。その目がニヤリと笑ったような感じがして、生きた心地がしない。このバケモノは、最初から眠っているふりをして、こちらをおびき寄せたのだ。なんて悪賢いヤツ！
魔蝕虫は、ゆっくりとその巨体を起こす。胴体は蛇のように長く、とげとげしい。一歩あるくたび、甲冑のぶつかり合うような音が聞こえる。口の両端からはギザギザの突起が伸びており、ガチガチとその突起を突き合わせていた。ときおり口内から、粘つく緑色の唾液が地面に

したたり落ちる。すえた臭いが、痛いほど鼻を刺激した。
シレンは剛剣マンジカブラをかまえるが、左腕は垂れたまま。これでは力を出しきれない。
魔蝕虫が巣穴から足を出した瞬間、シレンは地面を蹴る。そのまま空中から、頭を目がけて刃を振り下ろした。決まった……
と思ったのも束の間、金属同士のぶつかる音が響く。
着地したシレンの右腕が、マンジカブラとともに震えていた。
とんでもない硬さだ！　並みいるモンスターを、一撃のもとに斬り伏せてきたマンジカブラが跳ね返されるなんて！
魔蝕虫は、巣から完全に這い出ていた。目にも留まらぬ動きで迫っていく。
尾が、ムチのようにしなやかに振られる。シレンはその風切り音を横っ飛びにかわした。
三度、尾が襲いかかる。そこへシレンの渾身の一撃。
しかしまた金属音。尾も、頭と同じような硬度だ！　こんなバケモノに、どう太刀打ちすればいいっていうんだ⁉
その瞬間、アムテカの神殿で果てたケチの父親の姿が、脳裏に浮かんだ。とてつもなくイヤな予感が広がっていく。
地面を揺らしながら、魔蝕虫が距離を詰めていく。そして大きく右足が振りあげられる。シレンを踏みつぶす気なのか⁉
「うひゃあ！」
それは衝撃とともにおろされ、続けて左足が落ちてくる。
身をひねって、かろうじてよけるシレン。しかし、魔触虫の息をもつかせぬ攻勢を前に、反

撃に転じられない。
「しっかり、シレン！」
あまりに凶悪なその存在に対して、応援しかできないこの身が、恨めしかった。
不意に魔蝕虫は立ち止まり、頭をあげた。何をする気だ？
シレンは油断なく剣をかまえ直す。
魔蝕虫の翅（はね）がはためいた。かと思うと全身を震わせ、宙に舞うと、そのまま急降下する！
その魔蝕虫の口が膨らんだ。た、体当たりかよ!?
「なにか来る！」
シレンは転がってよけた。
ぬちゃっという嫌な音がして、たった今まで居た場所に、粘つく糸が吐き出されていた。本体は上空を通って反対側に着地する。
シレンの左肩からは、真っ赤な鮮血が流れ続けている。何だかようすがおかしい。そういえば虫の毒の類に、血の凝結を阻害するものがある。何とかしなくちゃ！　このまま戦いが長引けば、シレンは失血で気を失ってしまうだろう。
怪物の目は鈍い光を放ち、口からは汚らしい唾液が垂れている。そのむかつく臭いがここまで漂ってきた。
シレンは次々と襲いくる魔蝕虫の攻撃を避けながら、押されてジリジリと下がっていく。だがシレンの目は光を失っていない。不敵な笑みを浮かべたまま、勝機を探している。それこそが、風来人魂だ！
襲いくる尻尾を剛剣で大きく弾く。その一瞬のスキに、疾風のごとく踏みこみ、跳んだ。
マンジカブラの切っ先が、まっすぐ魔蝕虫の眼に向かっていく。いけるか!?
一瞬早く、魔蝕虫はまぶたを閉じていた。聞きおぼえのある硬質な音とともに刃が弾かれ

た。そのまぶたも、体のほかの部分を覆う甲羅と、同じ強度であるようだ。
くそっ、このバケモノにつけいる隙はないのか？
そこに、まるで本体とは別の意志があるかのようなあの尾が、襲いかかってきた。やばいっ！
シレンは、マンジカブラで受け太刀する。ギャインという、これまでと違う嫌な音とともに、剛剣は宙を舞った。くるくる旋回しながら、後方に飛んでいく。
シレンは衝撃で倒れかけながら、背中にあるカタナの戒めを解いた。
魔蝕虫の右足が横薙ぎにされる。
シレンが後方に跳ぶ。
壁が崩れた。
「がんばれぇ！」
ただ後退を続けるしかないシレンに、張りあげた声が、つい大きくなった。
気がつくと、剛剣マンジカブラの突き刺さった地面は、魔蝕虫の背後にあった。敵はうまく回りこんで、シレンにそれを握らせまいとする。
なにか手はないのか……つい歯をかみしめてしまう。
洞内は、巨大な魔蝕虫の足踏みで、揺れ続けている。
シレンの顔色は青ざめていた。出血のため、心なしか動きも鈍い。無意識にカタナの柄を、何度も何度も握り直すところをみると、力が入らなくなったのだろう……
魔蝕虫が、再び大きな口を開けた。
「シレン！」
バケモノの足と尾が執拗に狙ってくる。口の両端が開いて、そこから糸が放たれた。その瞬

間、シレンは跳んだ。
　その動きを予期していたかのように……いや完全に読んでいたのだろう、糸はシレンを覆い尽くそうと、その着地地点に大きく広がった。
　シレンの動きは、魔蝕虫の予測よりわずかに早い。糸の網をすりぬける……
　と、そのとき。踵に糸が絡みつき、シレンの右脚が伸びきった。着地するものの、片膝をついてしまう。
「シレーン！」
　背中が無防備だ。そこをめがけて、魔蝕虫の尾の一撃が襲いかかる。
「よけて――――！」
　シレンは身体が伸びきっているため、動けない！
　まさか！　クロンの加護も、ここまでなのか!?　旅の神はつねにシレンの味方ではなかったか？
　毒で光る鋭いサソリのような尾が、シレンの背の真ん中に吸いこまれる……
　その寸前、思わず目を閉じた。肉を貫く鈍い音を聴くまいと、耳まで塞いでいた。その一瞬は、この世の終わりが来るのではないかと思われるくらい、長かった。

第十一幕　絶望の果てに

目の前は、堅い鎧を着たマッドレムラスと、弾力のある壁のようなデブーチョでびっしり埋まっていた。その後ろから、さらに赤い衣の集団がやって来ている。杖を手にしているのでガイコツまおうに違いない。

「うおぉぉぉぉお！」

とりあえずは気合一閃、一番近くのマッドレムラスの鼻面（はなづら）に、正拳突きを見舞った。手ごたえはあったのだが、相手は体勢を崩しただけで踏みとどまっている。

「くそうっ」

脇に転がる岩石を拾う。

マッドレムラスが猛々しい雄叫びをあげ、こっちに右肩を向けて、ぶちかましをかけようとする。うう？

穴に落とす気だ。アニキのように。ちらっと、穴を見やると、やるせない気持ちがわき起こってくる。

「させるか！」

タイミングを合わせて、岩をマッドレムラスの兜の上に叩きつける。そのマッドレムラスの突進は、勢いよく地面に顔をつっこむ形で終了した。

すぐ近くにいたデブーチョが、鼻息も荒くその岩を拾った。まずい！

「みんな避けて！」

言いながら、横へ踏み出す。デブーチョが、手にした岩石を勢いよく放った。

「うぐっ！」

ケチのすぐ隣に落下した。うー、ひやひやさ

せる。
しかしケチの呼吸は、乱れている。ところどころ服は破れ、血が滲む。かろうじて避けたというところだろう。仕込み刀を地面に突き立て、身体を支えている。
「わたしもここで父上と同じように、アムテカの土となるのか……」
そんなつぶやきが聞こえた。
なんてことだ。そんな弱気にならないでよ。お竜さんなら、きっとそんなことは言わないはず！
見るとお竜は、額に眉を寄せて難しそうな顔をしながら、懐を探っている。おおっ。やっぱり！　目つぶしか、礫か、はたまた焙烙玉が飛び出すのか!?
……って、なにそれ？　巾着袋？
「えいやぁっ！」
お竜が放った巾着は、なんと後ろのガイコツまおうを粉砕した。
「すごい、お竜さん！　その調子！」
「いまので正真正銘、打ち止めなんだよ」
お竜の唇が、さみしそうに動いた。小太刀をかまえたその顔は険しい。
ふいに故郷の母が思い出された。いつもこんなふうに眉をひそめていたっけ……
「お……オレが、がんばるから」
マッドレムラスが、突進のために身がまえた。ガイコツまおうが、杖を振りかぶるのが見えた。
デブーチョが、近くにある岩を抱えた。拾われるのがわかっていたら、調子に乗ってポンポン投げるんじゃなかった……
けれどケチもお竜も、もう限界だ。正直自分も限界だけど、ここは踏ん張るしかない。

「ペケジ！」
お竜の悲痛な叫び。いいんだ。アニキの代わりに、みんなの盾になろう。
そのとき、お鷹の笑顔が浮かんだ。かんざしを髪に挿したときの、なんとも言えないやさしい表情。なんだかんだ言っても嬉しかった。
さようなら、あねご……最後にもう一度会いたかったな。
そのとき……

身体の芯まで震わす轟音とともに、洞内が大きく揺れた。
振り返ると、お竜は「あたしゃ、何にもしてないよ」といった顔をしている。
ケチは、ようやく仕込み刀をかまえ直し、油断なくあたりに目をくばる。
モンスターたちは騒然とし、一斉に周囲を見回した。
さらに遠くのほうから、なにかが飛んでくる。
「伏せて！」
「うわっ」
お竜のしなやかな身体がぶつかった。そのまま一緒に倒れこむ。
再び爆音。
岩の破片が混じった爆風までが起こる！　さらに点火された何かが飛んでくる音。
「頭を、伏せるんだよ！」
お竜が、腕で頭をかばってくれる。ちょうど目の前にあるのは！
うほほっ。
柔らかそうな二つのふくらみ。張りのあるおわんのような形のそれは、まさしく……
「おっかさん」
思わず手を伸ばしたとき……

「うひゃあ」
衝撃波が襲い、ひどく耳が痛んだ。すさまじい爆風とともに、何かが、近くに落ちた。
見ると、完全に白目を剝いたデブーチョだった。
「げげっ」
思わず立ちあがる。
あたりは、すっかり煙に包まれていた。嵐が過ぎ去ったかのように、すべてが倒れている。そのなかから、背の高い男の姿が現れた。
「助太刀にまいりやした」
前面に矛をつけたでかい盾を担いで、駆けてくるその姿は、誰あろう……
「ハッタリ！　ハッタリじゃないか！」
お竜が、驚きと喜びが混じった声をあげた。
「お竜ねえさーん、元気してた？」
続けて、煙の中から明るい声。ひどく懐かしいその響きに、思わず身体が震える。夢でも見ているのだろうか？　思わず頰を引っ張るが……痛い。
「お鷹、ただいま見参！」
あふれる優しさを秘めた、おそろしいまでに澄んだ瞳。桜色のしっとりした頰や、引き締まっているけれど、愛嬌のある口元。それを見ているだけで、幸せにつつまれる……
「あ、あねごぉ！」
本物だ！　わざわざ、このペケジを助けに来てくださったんですねぇ。感激だなぁ。
そう思うと、全身に再び力が湧いた。
「まったくふたりとも、よくもここまで来たもんだ……」
お竜の言葉の最後のほうは、震えて小声になっていた。

爆発の衝撃から立ち直ったモンスターたちが、そろりそろりと起きあがった。
「いくよ！」
その真ん中で、お鷹が右手を高くかかげる。そこには、棍棒から伸びた先にトゲトゲの鉄球がついた、モーニングスターがあった。
「たああああああ！」
大きく振りまわすと、ガイコツまおうが地に伏す。マッドレムラスは崩れ落ち、デブーチョは吹っ飛んだ。
全方向から来る敵を薙ぎ払いながら、お鷹はこっちにやって来る。後ろに束ねられた黒髪が、流れるように揺れる。紫と桜色の活動的な衣服から伸びた、すらりとした脚は、まるでカモシカのよう。まさしくその姿は、戦場に咲いた一輪の花！　初めて見る戦う姿は、想像以上に凛々しい。
微笑んだその瞳が、ぴたりとこちらに向けられた。
「あねごぉ！」
嬉しくて叫んでいた。
「ペケジ!?　ドジばっかりやって、みんなに迷惑かけてたんじゃないよね？」
言いながらも、お鷹は敵を振り払う手を休ませない。
「もちろんです！」
勢いよく返事をする。
「ペケジは、よくやってくれてるよ」
お竜が言った。
「そう……それじゃ、あとでご褒美あげないとね」
お鷹が、片目を閉じてみせた。
「うぉぉぉぉ！」
もう勇気百倍だ。どんな敵でもかかってこ

い！　ふたたび付近の岩石を取った。
「あねごぉ、見ていてください！」
気合をこめて、投げ飛ばす。
マッドレムラスがのけぞり、ぶち当たった岩が粉々に砕ける。その背後にいたデブーチョとガイコツまおうを巻きこみ、将棋倒しになる。
なんだ。はじめから、この勢いで投げればよかったのだ！
「どうです、あねご!?」
力こぶを作ってみせる。
「油断してんじゃないよ！」
パシリとお竜に叩かれた。あうぅ。
そのとき、ふたたび爆破の二連発。
お鷹に押し寄せようとした一団が、壁・床・天井に叩きつけられる。
「喰らいやがれ！」
ハッタリはお鷹の後ろを守り、呼吸を合わせて爆弾を投げる。お竜の焙烙玉とは、比べものにならない破壊力だ。
「なんで最初っから、そいつをくれなかったんだい？」
お竜が文句を言うと、お鷹と一緒にハッタリが、こちらまで駆けこんできた。
「このぐらいの代物でやすと、危なっかしくって、素人にはあつかえやせんぜ」
ハッタリは笑いながら、ろくろく見もせずに、火のついた爆弾を後ろに放つ。
雷鳴のような音とともに、見事なまでに、はじけ飛ぶ敵の群れ。
「ち……違いない」
お竜は、生唾を呑みこみながら同意した。
「た、たーまやー」
自分も思わず叫んでいた。
「んもう、ペケジったら、またしょうもないこ

と言って」
　今や間近にいるお鷹が、微笑みかけてくる。
「へへへ」
　お鷹が髪を払いのける。そのしぐさがまた、可憐である。
「ずるいよ、ねえさん。こんな楽しいことやっているなら、ちゃーんとあたいに知らせてくれなきゃ」
「そんなこと言ったって、あんたには手下を養うっていう大事な役目があるじゃないか」
　それを聞いて、お鷹が口を尖らせる。それもまた、あー、たまらない。
「それとこれは別。ホント、あの後あちこち捜したんだからねえ」
　それを受けて、ハッタリが答えた。
「おかしらはシレンのダンナとお竜さんのことを気にかけて、それからも配下のものに、ひそかに後をつけさせてたんでやす」
「しょうがないコだねえ」
　言いながらも、お竜はうれしそうだ。
「まあ、いいでしょ？　間に合ったんだから」
　お鷹は言いながら、ケチの前で膝をつき、腰の袋をあさりだす。出てきたものは、みずみずしい色を湛えた草の葉だった。
「はい、弟切草(おとぎりそう)。これですっかり良くなるよ」
「かたじけない」
「しかしケチさん……あんた、戦えたんだねえ。目も見えてるし、口調も何だかヘンだし」
「その節は……失礼しました。しかし、口調がヘンって……」
　ケチは、当惑ぎみである。
「まあ、過ぎたことだよ」
　お鷹は擂り石で手早くすり潰し、ケチの患部につけていく。

「いつっ……」
ケチは唇を嚙みしめ痛みに堪えたが、みるみるうちに顔色がよくなった。
「うん、よく効きます」
言いながら、元気に仕込み刀を振りあげ、再び敵に斬りかかる。
うおっ！　負けてはいられない。
「オレもやるぞ！」
「おおっと！」
と、ハッタリの声がした。
「え？」
金属同士がぶつかり合う衝撃音。マッドレムラスの突撃をハッタリが矛の盾で受け止めたのだ。相手の角は、自分の腹にピタリと向けられている。
「うわわっ」
ハッタリが止めてくれなかったらと思うと、冷や汗が止まらない。
「せいやっ！」
そのままハッタリが、矛の盾をねじった。鈍い音とともにマッドレムラスが転がる。
「ペケジ、なにボサッとしてやがる！」
「あ、うん」
「あいかわらずおめえは、とれえなあ。よく生き残れたもんだぜ」
ハッタリは引き締まった身体をこちらに向け、そんなことを言う。笑った口元が、不思議と嫌味ではない。いつになく優しげな目をしていたからだろうか。助けてくれたのだから、どっちにしても、本当はいいヤツなのかもしれない。
「うん、お竜さんとアニキがいたから、オレも頑張れたんだ」
素直に言葉が出た。そこで、みんなの顔がこ

わばった。そうだ。アニキは……
「ねえさん、シレンさんは？」
お鷹が質問すると、お竜は暗い表情を浮かべ亀裂を見た。その奥は、底の見えない闇。
「うわー、こりゃ……深い、ね」
その光景を見て、お鷹もさすがにビックリしていた。お竜は声もない。
「なにその暗い顔。ねえさんらしくないよ」
ふいにお鷹は笑顔を浮かべ、重い雰囲気を吹き飛ばすように、からからと言った。
「だって、お鷹。シレンは……」
「仮にシレンさんが困っているなら、早く加勢に行ってあげないとさ」
そうだ！　さすがオレのあねごだ！　シレンはオレのアニキだもの。こんな穴から落ちたぐらいで死ぬわけがない。ここのモンスターを片付けて、オレも早く行かなきゃ！
「ねえさんがこんなとこでグズグズしてるなら、あたいが先に行っちゃうからね！」
そう言い放ち、お鷹はモーニングスターを振り回し始めた。
「妹分が、なに意気がってんだい。あたしが先に行くに決まってるだろ！」
やたらとでかい声を出し、お竜も小太刀をかまえて立ちあがる。自分と同じようにすっかり元気になった。やっぱりお鷹の存在は偉大だ。
「うふふ。ねえさん、やる気満々じゃん？」
そんなお鷹の目が、キラキラと光ってまぶしい。
「な、なに言ってるんだよ。バカだね、このコは！」
「そうこなくっちゃ。でもこの勝負はあたいがもらったよ！」
勝負？　そうか、どれだけ早くモンスターを

倒せるか競争ってことだね、あねご？
「いやぁ────!!」
ひときわ大きく声を張りあげたお鷹は、お竜に片目を閉じてみせ、再び敵の群れに突っこんで行く。その戦女神（いくさめがみ）のような姿に、思わず胸が熱くなった。

形勢は一気に逆転した。
用意周到なお鷹が持ちこんだ薬草や弟切草のおかげで、こちらのケガはどんどん治ったが、モンスターたちは数を減らしていくばかりだ。
まもなくして敵は逃走の体勢にはいった。まさしく蜘蛛の子を散らすように、われ先にと、こけつまろびつ走っていく。
「追撃は？」
物足りなそうに、お鷹が小首をかしげる。
「いや」
ケチが言葉少なに言い、仕込み刀を鞘である杖に収めた。
「そうだね」
お竜も、小太刀をしまいつつ奈落を眺める。
「じゃあ、縄だね！」
「へい」
お鷹の言葉を受けて、すぐにハッタリが、荷物から太い撚（よ）り縄を取り出す。
アニキのことだから抜け駆けして、もう魔蝕虫ってヤツと戦ってるかもしれない。なんだか、わくわくしてきた。
ハッタリは丈夫そうな柱に縄を結びつけると、何度も引っ張って強度を確かめた。
「準備できやした」
「あたいが一番だ！」
お鷹が、元気よく声をあげた。
「残念ながら、そいつは認めるわけにはいきや

せん。俺が露払いをしやす」
　ハッタリは早速、崖っぷちに足をかけると、慎重に降りていく。
「むーう」
　不満そうな顔をしたお鷹に、お竜が声をかけた。
「まあまあ、あんたのことを思ってのことだから」
「あーあ、おかしらって不自由だなー」
　そのつらさを、いくらかでも代わってやりたい。
　しかし、天女のように笑っているっていうのは、どういうことだろう？
　お竜は、自前の縄を取り出し、手早く付近の岩に結びつける。
「というわけで身軽なあたしは、先へ行くよ」
「あ、抜けがけ、ずるーい！」
　お鷹は亀裂の奥底へとのびる縄に飛びつき、滑り降りる。
「なんだよ、あんたこそ！」
　お竜が亀裂の中に消えた。
　ケチとふたりで、顔を見合わせてしまった。
「みなさん、ずいぶんと元気だ」
　そこでハッとした。
「オレも、アニキを助けに行くぞ！」
「ええ。ではわたしが後詰(ごづ)めをしますから、早くシレンさんのところに行ってあげてください」
「うんうん」
　なるほど。不意をついてモンスターが襲いに来ないか、ケチは心配しているのだ。さすがは王家の血筋。やることに抜かりがない。
「じゃケチさん、お先に！」
　ケチはいつでも抜けるように、仕込み杖をか

まえて言った。
「ぺケジさんも、大活躍でしたね。男として、惚れなおしました」
「あ、ありがとう。ケチさんこそ……」
なんだか妙に嬉しくて、言葉が出なくなった。
ケチは頷いた。
とりあえず縄を岩柱に結びつけ、崖を眺める。真っ暗で底は見えない。先行したお鷹たちの姿が、ポツリポツリと浮かんでいるだけだ。
恐怖心とともに浮きあがってくる、もうひとつの感情。
うおおおおお、燃えてくるぜ！　気合だああああ！　アニキ、待っててください。いまぺケジが行きますから！

第十二幕　ひとつとなる想い

シレンの断末魔の叫びを予感しながら、無限に思える瞬間が過ぎ去った。
いや、シレンが死んだら、オイラだってどうなるか知れたものではない。あの魔蝕虫に、ギッタンギッタンのザクザクザクリにされてしまうんだぁー。
だんだん怖い考えになってきて、涙が吹き出そうになる。そのとき……
予想と違う、ガツリという鈍い音がした。薄目を開けると、あたりに岩のかけらが舞ってきた。もしかして、外したの？
見れば、魔蝕虫の尾が空中をさまよっていた。平衡がとれないらしく、全身もゆらゆら動いている。
一方、シレンはグッタリと倒れていた。一瞬ぞっとするが、めぼしい傷跡は、例の肩以外には見られない。
シレンの手前では、さっきまでなかった大きな岩が砕けていた。どうやらこの落石に当たって、魔蝕虫の尾は狙いを外した。なんて幸運な。クロンの加護は、まだ失われてないらしい。
では、なぜシレンは倒れた？　もしかして出血多量で、意識を失ったのか……だとしたら一時をしのいだだけで、状況がよくなっているとは言えない。まだまだ絶体絶命じゃないか？
そう思って頭をめぐらしたとき……
「アニキ。加勢に来たぜ！」
その力強い声に振り向くと、ペケジが岩の上で力こぶをつくっていた。そして悟った。シレンを救ったのは、運なんかじゃない。ペケジの

投石だったんだ！
その後ろから、お竜やケチの姿も見える。
「みんな無事だったんだね！」
こうなれば、こっちのものだ。
「シレン……」
お竜が、動かないシレンを見て唇を噛み締めた。
「今こそ、これを使うときでしょう」
ケチが懐を探る。取り出したのは……巻物だ。
しかし、いったい何の？
「これは……ケチさん、ありがとう」
お竜は巻物の正体を察したらしい。素直に受け取ると、思案げな顔でシレンをジッと見つめた。そのとき……
「シレンさんを傷つけたのは、あいつなんだね⁉」
若い女の子の明朗な声がした。その娘は、魔蝕虫に向かってキツイ視線を送っている。どこかで見覚えがあるんだけど……
「間違いありやせんぜ、おかしら」
その隣にいるのは、がっしりした背の高い男。肩に大きな盾をかつぎ、焙烙玉（ほうろくだま）を握っている。
思い出した！　確かお竜の知りあいのハッタリだ。隣の若い女は、お竜の妹分のお鷹だ。とすると、五人の仲間が駆けつけてくれたことになる！　よおっし、見てろよ魔蝕虫！　風来人魂ってものを、見せてやるからな。
魔蝕虫の咆哮（ほうこう）が、地を揺らさんばかりに響き渡る。
おもわず身の毛がよだつが……
「なめるんじゃないよ！」
お竜が目つぶしを放った。それを合図に、みながが魔蝕虫をめがけて走り出した。そうだ、行

け行け！
魔蝕虫は、また硬いまぶたを閉じ、目つぶし粉を避けた。そのスキに、お鷹が詰め寄る。その得物は、一振りで周囲の八体を粉みじんにするモーニングスターだ！
「うぉりゃあっ！」
お鷹は思いっきり遠心力を乗せ、バケモノの顔を狙った。
ぐわんと金属のぶつかり合うような鈍い音が返ってくる。
「な、なんで？」
攻撃を弾かれたお鷹の顔は、驚きで歪んでいた。むう、やはり硬い。硬すぎる!!
「お鷹のあねごっ！」
ペケジの叫びとともに岩石が宙に舞い、魔蝕虫の背に命中する。
その甲羅には何の変化も見られないが、低く唸ってペケジのほうに体を向けた。そのおかげで、シレンから注意が逸れる。
そこにケチが突っこみ、仕込み刀を抜いた。
ギィィーン。ノコギリがはじかれたような、耳に痛い音。
「くっ……」
ケチもたちまち、その場から飛び退いた。
マンジカブラさえ歯が立たない甲冑だ。頭数が増えても、このままでは、どうにもならない。
「みんな、正面からじゃ無理だよ！」
そう叫ぶ。
「伏せろ！」
ハッタリの鋭い声。その手から放たれた焙烙玉が、弧を描いて飛んだ。あれは格別威力が大きいはず!!　必死に耳をふさぐ。
それは、魔蝕虫の眼前で炸裂した。
四散する風。もうもうと立ちのぼる煙。舞い

あがる土埃。
もう、何が何だかわからない。巨大な怪物の姿は、その陰に隠れてしまった。やったか？　今ので、ダメージを与えられたのか？
「シレン、大丈夫かい⁉」
注意が逸れたスキに、お竜がシレンに駆け寄っていた。片膝をつき、シレンの頭を抱えると、その胸に耳を押しつける。
「ああ……大丈夫。生きてる」
微笑とともに、お竜の目がうるんだ。
思えば疑いあう関係から始まったはずなのに、いつの間にか心が通っていた。うれしくてしかるべきだが、少々しゃくでもある。まあ、この非常事態に、そんなことは言ってられないけれど。
お竜は胸元から巻物を取り出す。開いて中身を読みあげると、あたりが光で包まれた。まぶしくて、反射的に目を閉じる。
頃合いをみて瞼を開くと……シレンもお竜の腕のなかで、ゆっくりと目をさますところだった。なんと左肩の傷もすっかり癒えている。
思わず、深い息が漏れた。
あれは〝困ったときの巻物〟だったのか。こんなときに備えて貴重な品を取っておくとは、ケチはやっぱり役に立つヤツだ！
「シレン、よかった……」
お竜がシレンに抱きついた。
シレンは、微妙に困った顔をしながらも、カタナを探して手を動かした。そうだ、シレン！　こんなところでくたばったらオイラがゆるさない‼
やがて煙が晴れ、魔蝕虫の巨大な影が浮かびあがる。そのギョロリとした二つの瞳は、血に

飢えて光っていた。どこも傷ついたようすはない。むしろ煙を浴びて元気になったかのように、耳をつんざく咆哮をあげた。
くそう、どうやったら倒せるんだ!!
「父上は、こんなバケモノを相手にしていたというのか!?」
ケチが舌打ちした。
不意に、魔蝕虫が得意の尻尾を振った。あぶない!!
「みんな、避けて！」
叫ぶより早く、その尾があたりを横薙ぎする！　悪寒がまた襲ってきた。
「せいっ」
ケチはいち早く反応し、岩壁まで跳んだ。
「ひやあっ」
ペケジは頭を抱えこむようにして、地面に伏せた。
ハッタリはどこかに隠れているのか、姿が見えない。なにか策があるのだろうか？
「はっ」
お鷹は真上に跳躍したかと思うと、効果のないモーニングスターを投げ捨て、両手を後ろ腰にやった。
着地したときには、両手に一本ずつ、短刀を持っていた。
「このっ……」
やめろ、お鷹さん!!　そんなヤワな武器で、効果なんてあるわけない!!
一瞬そう思うが、ヤケになったという感じではない。何かを狙っている、鋭い目つき。そう、シレンが慎重に勝機を探るのと同じ目だ。
「おかしらっ！」
後ろから、ハッタリの叫び声が響いた。お鷹を援護する気か、駆け寄っていく。その手には、

例の矛のついた盾があった。
再び襲いかかる、怪物の尾。その動きに、ハッタリは自分から突っこむ。だがその攻撃をまともに受け、後じさる。
「ぬうっ！」
黒光りする魔蝕虫の右足が、お鷹を踏み潰そうとあげられた。
「そんなへなちょこ、当たるもんか！」
走りながらもますます速度をあげたお鷹は、くるりと宙を舞って避けた。
「はっ！」
そのまま敵の背中に、ひらりと乗る。そして二つの短刀を突きたてた。
ザクッ！
えっ？
短刀は確かに刺さり、ネバネバする体液が垂れてきた。
「ふん、やっぱりね。デカいだけで虫は虫」
よく見ると、そこは魔蝕虫の、甲冑と甲冑の継ぎ目だ！　お鷹は体を張って、魔蝕虫が超自然のバケモノじゃなくて、弱点があるただの生物だって証明してくれたことになる。これなら希望も湧いてくるというものだ！
「むぅう」
お鷹は力をこめ、短刀を沈める。が、いかんせん刃の長さが足りない。
魔蝕虫は悲鳴ぐらいあげるかと思ったが、ただただ大きく息を吸いこんだだけだった。
「糸がくる！　気をつけて‼」
思いきり声を張りあげて、みんなに知らせた。
ケチが何かを悟ったような表情を浮かべる。
魔蝕虫は目をいっそう光らせ、激しく体を揺すりながら、予想通り粘つく糸を鋭く吹きかけた！

例によって、ハッタリはいち早く姿をくらました。
「あっ」
振り落とされるお鷹。しかしうまく身体を回転させ、ふんわりと地面に着地する。その手には、短刀が一本しかない。残る一本は、鎧の継ぎ目に置いてきたのだろう。
ケチは再び岩壁を蹴って、跳ぶ。
ところがペケジは、ちょうど岩を投げようと構えたところだ。岩を放り出すが、その一投でかわすのが遅れて……
「うわああっ！」
全身を糸にからめとられた。
「たーすけてえええええ」
ペケジの叫び声があがる。
魔蝕虫はそれを無視して、新たな獲物を探し始める。みんなまとめて食らうつもりなのだろう。
ふと見ると、怪物の背後には、仕込み刀を口にくわえ岩山を登るケチがいた。なにかを狙っているのだろうが、それを相手に気づかれては元も子もない。どうしたらいい!?
必死に頭を回転させると、ひとつの考えにいき当たる。
そうだ！　ここでオイラが男を見せなくて、どうする？
「おーい、そこのでくのぼう！」
思いきり、でかい声を出すと、魔蝕虫は、ギョロリとこちらを向いた。ここまでは、うまくいった。
「悔しかったら、オイラを捕まえてみな！」
あっかんベーをして、相手の視線がケチやシレンにいかないよう、ピョンピョン跳ねまわる。
魔蝕虫が迫り、足を振りあげた。

「うひゃあ……」
冷や汗が流れるが、かまわずナナメに跳ぶ。地面が揺れまくった。
ちらっと振り返ると、ケチは剣を右手に持ちかえていた。大きく目を見開き、機会を窺っている。左手はあの黄金の首飾りを摑み、まるで祈りを捧げているようだ。そして……
「ぬおおぉぉ！」
その声とともに跳躍した。見事、魔蝕虫の背に着地。憤怒の形相で、研ぎ澄ました刃を突き立てる。それは間違いなく、お鷹の短剣が、刺さったままの場所だ。
ぐちゃりという音がして、大量の体液が吹き出した。魔蝕虫の苦痛にうめく咆哮が初めて、洞窟のなかにこだました。
「ええいっ！」
ケチはますます力をこめ、仕込み刀を柄のあたりまで沈める。
魔蝕虫はケチを振りほどこうと、暴れはじめた。頭を振りながら足を踏み鳴らす。それでもケチは柄を固く握りしめて離さない。魔蝕虫の口から、だらだらと唾液が流れてきた。腐ったような悪臭が、あたり一面に広がる。とは言えそれが、怪物の苦悶を意味しているのだと思うと、不思議なことに気にならない。
ケチの背中に、尾の一撃が飛んだ。しかし自らを傷つけることを恐れてか、鋭さを欠いた攻撃だ。ケチは、ひょいとかがんだだけで避ける。がんばれ、ケチ！
今度は魔蝕虫の翅が輝きを発した。今まで見たことのない動きだ。やばい、なんかイヤな予感がする！
「ケチさん、あぶない！」
叫んだ瞬間、魔蝕虫は翅をバサバサと羽ばた

かせて飛びあがり、あたりかまわず体を壁に打ちつけた。
「うおおっ！」
洞内が揺れるほど、強烈なぶちかましが何度もおこなわれる。その凄まじい勢いに、誰も近づくことができない。そしてその背は見えない。ケチはいったい、どうなったんだ？

振り返ってシレンを見る。やっと立ちあがるところだが、まだ足元がふらついていた。傷は癒せても、失った血までは回復しなかったか？
そのとき、シレンの右腕の〝ワナ師の腕輪〟がキラリと光る。
それを見て、ボボロの誠実そうな顔が浮かんだ。一緒に、いたいけなスララの笑顔も。
あの腕輪をきっかけに、ボボロからもらったもの……そうだ！　このときのために、人間国宝の陶芸家ガイバラからの、贈りものがあったんじゃないか！
「シレン、今こそ〝完璧な合成の壺〟を使うときだ！」
あらん限り、声を振り絞る。
シレンは、ひとつうなずいて駆け出した。
「ああっ、ケチさん！」
お鷹の金切り声。魔蝕虫の体がひるがえり、背中が見えた。
ケチはとうとう仕込み刀を離し、大地に落下した。
「ぐほっ」
着地の衝撃とともに口から血を吐き、瞼がゆっくりと閉じられた。
すぐにも助けてやりたい！　だがケチは魔蝕虫の側に横たわり、思うように近寄れない。
バケモノが勝ち誇った雄叫びをあげる。地獄

の底から響いてくるような、禍々（まがまが）しい調べ。
「くそ、くそっ！」
ついそんな悪態をついてしまう。
シレンが剛剣マンジカブラの柄を握りこみ、地面から引き抜いた。瞳にはいつもの光が戻っている。これで流れは変わるか？　いやシレンなら変えられるはずだ。頼むぞ、相棒！
「お、お竜さん！」
お竜はといえば、今度はペケジに駆け寄っていた。自慢の小太刀で、ペケジを絡めた糸を切り裂く。
「ありがとう！」
ペケジが元気な声をあげた。
「礼なんか、要らないよ」
お竜はペケジを助け起こした。よし、勝負はこれからだ！　あとはケチさえ復活すれば……
だがその当人は、ピクリとも動かない。

前足に力が入り、つい痛いほど爪を岩に立ててしまう。
くそぅ、自分も応援以外に、何かできることはないか？
お鷹は手招きするかのように、魔蝕虫の前でステップを踏んだ。
「そーれ、こっちこっち！」
そこに尾が襲いかかるが、サッと飛び跳ねてかわす。
「遅い、遅い」
じつに身軽だ。その言葉に強がりはない。
「ここまで、おーいで！」
なんと、ぷりんとしたお尻をペンペンと叩いてまで、挑発した。
そのとき思い出した。そうだ、これだよ。オイラにも、強力な武器があるじゃないか！　見てろよ、魔蝕虫！

お鷹がバケモノをひきつけているあいだ、シレンは道中袋から取りだした〝完璧な合成の壺〟に、マンジカブラの刀身を入れていた。明らかに壺の大きさより長い刀剣が、中に吸いこまれて消える。壺の中は、一種の小宇宙か異世界にでもなっているのか？

虹色の粒子が中で渦巻き始める。ジーッとそれを見ていると、遠近感がなくなってきた。なんだか頭までおかしくなってしまいそうだ。

「おりゃあ！」

その声でわれに返る。岩石が宙を飛んでいた。復活したペケジが放ったものだ。それは狙い違わずバケモノの頭に激突し、低い唸り声がする。

いいぞ！　うまい具合に魔蝕虫は、お鷹とペケジに気をとられている。

シレンは続けて愛用のカタナを抜き、宿敵に一瞥(いちべつ)をくれると、同じように壺に収めた。それは再び、まるで風になったように、中に消えた。

壺の口から、再び複雑な光彩が漏れてくる。もう二度と覗きこむのはごめんだった。

「おーにさん、こちら、手の鳴るほうへ！」

お鷹は魔蝕虫と一定の間合いを保ちながら、手を叩いては、さがっていく。怒り狂った魔蝕虫は、ズンズン迫る。あんがい、挑発に弱いヤツだ。

やがて魔蝕虫と倒れ伏したケチとのあいだに、じゅうぶんな間隔がひらいた。

お竜はサッとケチを肩に担ぐと、その場を離れる。

「なにやってんの、べろべろばー」

「オレの岩を、喰らえええええ！」

お鷹とペケジの連係攻撃は、実質的なダメージを与えていないとはいえ、見事なぐらいに魔蝕虫を翻弄し、お竜やシレンの行動を悟らせて

いない。
　お竜の連れてきたケチの表情は、蒼白を通り越して血の気がなかった。まさか……
　大きく頭を振って、その想いを振り払う。いいや、ここからじゃわからない。まだきっと生きているはずだ。
　そのときシレンが、ついに〝完璧な合成の壺〟を宙にかかげた。今や何かのカラクリのような音が、その中でウンウンと唸っている。最高にまで鍛えあげたシレンのカタナと、アムテカの宝剣マンジカブラが、想像を超えた超自然の力によって、ひとつのものへと生まれ変わろうとしているのだ！
　シレンは、万感の想いをこめた表情で、壺を近くの岩に叩きつけた。
　爆発音とともに、あふれ出る光芒!!
　割れた壺からは、光り輝く刀身が現れた。いままで体験したこともない輝きを秘めた、神妙なるもの。見ているだけで、勇気づけられる。
　シレンはその剣を手に取ると、魔蝕虫に向かい、正眼（せいがん）にかまえた。鬼気迫る迫力がある。
　バケモノは、今度はまばゆいばかりの輝きを放つシレンの剣に気をとられていた。
　よーし！　今こそシレンの相棒である自分の出番だ！　思いきって魔蝕虫を目がけて駆け寄る。気づいてない。いける！
　その鼻面に飛びこむと、大きく一発……
　ボフ――――ン！
　屁を放った。怪物の鼻面に、コッパさま特製の黄色い気体がまとわりつく。
「どうだい、この迫力ぅ！」
　苦痛に耐えかねた魔蝕虫は、大きく口をあけてうめいた。だらしなく涎（よだれ）が垂れ、地面を汚していく。

嗅覚が確かな相手ほど、よく効く攻撃なのだ！

「このときを、待ってやしたぜ！」

ハッタリがどこからか姿を現し、すぐさま焙烙玉を投げた。それは怪物の大口に、間違いなく飛びこむ。そして……

再び耳をつんざく轟音！　ひときわ大きくこだまする魔蝕虫の叫び。その口からブスブスと、煙と体液が吹き出した。一瞬動きが止まったかに見えたが、すぐさまガクガクと揺れだした。無敵だった魔蝕虫は今、生涯で初めて、生命の危機を感じているのだろう!!

第十三幕　クロンの加護

お竜の肩にもたれかかるケチの呼吸は、ごく浅いものとなっていた。
「がはぁっ」
いきなり口元から、血を吐き出す。それは自分の胸元にべっとりと付着し、どす黒く染まった。このままでは……
「しっかりしておくれ！」
ケチを励ましながら、なんとか現場から離れようとする。
魔蝕虫の動きは、先ほど口内で爆発した焙烙玉の影響で一時的に止まったが、いつまた動き出すかわからない。みんながつくってくれたこのスキに、少しでも早く戦場から遠ざからなくては。
ほとんど進まないうちに、ケチの足が止まる。やむなくその場に横たえ、手持ちの薬草を取り出す。
「ケチさん、諦めちゃいけないよ！」
「は、はい……」
弱々しい返答。ほとんど反射的に答えているようにしか思えなかった。
そのとき、シレンが手にしている見慣れない剣が目に入った。光の剣？　まるで柄の部分から放出される光が、刀身を作りあげているようだ。しかもその輝きは、安らぎと希望を与えてくれる、聖なる色に満ち満ちている。
シレンは剣を上段にかまえ直すやいなや、地面を蹴った。
あたかも風に乗ったように、空を翔けていく。刀身は、どんどん光が増していく。まるで、

太陽の力を宿しているようだ。
　魔蝕虫の左足が大きくあげられるが、シレンはわずかに身をひねっただけで避ける。そして疾風のように、懐へ突っこんで行った。
　一閃。
　魔蝕虫の腹から、光が漏れた。かと思うと、ドボドボと緑の液体があふれ出す。いままでの苦労が嘘のように、深く深く斬り裂かれていた。
　魔蝕虫の絶叫が、洞内にとどろく。耳が痛いくらいだ。
　シレンは、汚らわしいしぶきを浴びることなく、さっと脇に飛び出ていた。
　一瞬遅く、魔蝕虫が胴体を、地べたに叩きつけた。
　シレンはふたたび、刃を正眼にかまえる。
「ご覧よ！　シレンが！」
　思わず、ケチに向かって声をかけていた。しかし、ケチからは応えがない。ただ荒い息をしているだけだ。
　急いで薬草を傷口に貼る。死なないでおくれよ、ケチ！
　魔蝕虫が狂ったように吼え猛る。尾でシレンを、捕らえようとしている！
　光の刃が、それを断ち切った。
　体液を豪快にまき散らしながら、尾の先端が飛んでいく。
　息つぐ間もなく、シレンは剣を横に払う。
　今度は魔蝕虫の左足が吹き飛び、宙に舞って落ちる。
　巨大なバケモノは大きくバランスを崩して倒れそうだ。体液がまき散らされ、地面を緑に変えていく。叫び声には、恐怖の色しかなかった。
　シレンはかまえを中段に戻し、ジリジリ近づいていく。

その間も、ケチの顔からは血の気が引いていた。サラシを取りだし、ケチの身体に巻く。サラシはまたたくまに真っ赤に染まった。

そこへ、風が吹きつけた。

見れば、魔蝕虫が羽ばたきを始めている。飛んで逃げるつもりか!?

刹那(せつな)、シレンはこれまでにないほど高く高く跳躍した。

輝ける刀身を、大きく真上にまで振りかぶって……

敵の脳天に打ちおろす。まっすぐ、顎まで割った。

魔蝕虫は分割された頭を一瞬高くあげ、翅(はね)をひくひくはためかせる。

断末魔の叫び。

シレンが中腰で着地した。手にした剣は、完全に振りきられていた。

怪物が、全身を大きく震わす。

不意に力を失い崩れた。それっきり魔蝕虫は動かない。目の怪しげな煌(きら)めきが、徐々に消えていった。

その後は、静寂が支配した。

シレンは剣を手早く振り、血糊(ちのり)を落とす。懐紙で刀身を清め、儀式ばった丁寧さで、腰の鞘に収めた。

その瞬間、どこからともなく爽やかな風が吹き、シレンの縞合羽と三度笠を、大きく揺さぶった。本当に、クロンの追い風が吹いたんだねえ。

するとシレンは懐に手をやり、どこにしまっていたのか、葉っぱを取り出して口にくわえた。その顔は、誰もがわかるくらい晴れやかだ。大きな仕事を成し遂げた後の、満足感に満ちていた。

今までときおりクロン神の化身か何かのように思えることがあったが、すごく人間らしいところが見られて何だか安心した。
しかし……
感慨にふけっている暇はない。いま自分の腕のなかには、命の炎が消えようとしているケチがいるのだ。こうしているあいだにも、ケチの体温はどんどん低下していく。呼吸も浅い。
「しっかりしなよ。あんたのおとっつぁんの仇、ちゃんととったんだからね」
聞こえているのか、いないのか。
わずかにケチが頷いた気はするが、その目の光はうつろだ。
「さすがはアニキだ！　きっとこうなるって思ってたよ！」
ペケジが手放しで喜ぶ声が聞こえてきた。
「ふん、ひとりじゃ何もできなかったくせに」
ハッタリは、憎まれ口をたたいている。
「ま、これもオイラのおかげだな」
誇らしげなコッパの声。
「やったね、シレンさん！」
はしゃぐお鷹。思わずそちらを向くと、お鷹はシレンに飛びついていた。
シレンはお鷹の不意うちに、軽くよろめいた。
ハッタリの顔が、苦虫を嚙みつぶしたようになる。
「やっぱり来てよかった。それでこそ、あたいの未来のダンナさまだよ」
無邪気にからからと笑うお鷹。あそこまで素直に感情表現ができるのは、ある意味才能だろう。
ケチの胸元で、かすかに黄金がきらめいた。
父親の形見であるという首飾りは粉々に砕けており、鎖に残っているのは、ほんのわずかのカ

ケラでしかない。これはつまり、魔蝕虫の攻撃が首飾りに当たってそれ、致命傷となるのを防いだのだ。

その瞬間、ケチを守る亡き父、そして母ヤブメの姿が見えたような気がした。両親の必死な想いに守られているケチを、簡単に死なすわけにはいかない。

「あーうー」

近くには、指をくわえながらシレンとお鷹を眺めるペケジがいる。

「ぼさっとしてるんじゃないよ、ペケジ！　すぐにお鷹から薬草をもらっておいで！　あたしの手持ちだけじゃ足りないんだよ！」

つい声を荒らげてしまった。

「え、オレが？」

ペケジがとぼけた返事をする。

「他に誰がいるっていうんだい。それにお鷹！　事態は一刻を争うんだよ！」

「ええっ!?」

自分はあらためてケチの腹を探る。骨があちこちで折れていた。そこらじゅう、生暖かい汗とも血ともつかないもので濡れている。じっさい、まだ生きているのが不思議なくらいだ。

ケチの命をつないでいるのは、やはり親の愛なのか。それともこのアムテカという場所が、そうさせているのか？　ここにはケチの先祖が精霊となって眠っている。そしてケチは、アムテカ王家の血を引く最後の男子だった。

死なせない、絶対に！

決意だけは固めたものの、どうしたものかわからない。〝困ったときの巻物〟を使ってしまったのが悔やまれた。しかし、あのときは、ああするしかなかった。そうしなければ今ごろシレンは……

お鷹が心配げな顔で、次々と薬草のたぐいを出してくる。ふたりですり潰して、ケチに与えようとしたが……

「うっ、ぐふっ」

大量の凝り固まった血とともに、ケチはその薬を吐き出す。

ようやくことの重大さに気づいたらしく、お鷹が涙を浮かべた。

「ううっ、このままじゃケチさんが……」

「あんたも一国一城の主だろ！　しゃきっとしな。泣くのは後だ、何か手立てを考えるんだ！」

厳しく、しかりつける。

「ううっ……ひっく」

お鷹は、必死で涙を止めようとしている。

「ハッタリ！　あんた何かいい道具は持ってきてないのかい！」

「ちょっと待ってくだせえ……」

ハッタリは、荷物の中をあさりはじめた。

「くっそう。アレでもない、コレでもない……」

表情からすると、成果は期待できそうにもない。

「どうしよ、どうしよ」

ペケジは慌てるばかりで、やはり使い物にならない。

そしてシレンは……肩にコッパを乗せたまま、きっちりとこちらに背を向けていた。

目的を達したので、後のことを振り返らないというのだろうか？　だとしたら、それはあまりにも非情すぎる。神の化身は、人間の胸の痛みは、わからないのだろうか。そう思ったとき……

「シレン、あれ!?」

コッパが指差す先で、何かが光ったような気がした。シレンも、口に葉っぱをくわえたまま、

静かにうなずいている。

粘つく糸に囲まれた、巨大な繭のような巣の奥に、なにやら金色に光っているものがある。どうやら魔蝕虫の巣が、その向こうにある何かを隠していたようだ。その何かから来る暖かい光は、春のうららかな陽射しのように、すべてのものを癒してくれる気がした。

第十四幕　新たなる始まり

一面の闇。
目は開けているはずだが、真っ暗で何も見えない。ずいぶん長いあいだ、目が見えない演技を続けていたのが、本当になってしまったようだ。それなのに、身体がポカポカと暖かいのが奇妙な感じだ。
「ケチ……」
どこからか力強い声が聞こえてきた。初めて耳にするのに、不思議と懐かしく感じる。この声はいったい？
「よくやったな」
また同じ声。その優しい響きは、すうっと心に入ってくる。
それでは自分たちは、無事使命を果たしたのだろうか？
先ほどから感じている暖かみ。ふと父親の背中とは、こんなものではないか、と思えた。想像していた以上に広く大きく、たくましい。
「おまえはまだ……」
なにか言われたようだが、声はどんどん遠ざかっていき、聞き取ることができなくなった。
不意にあたりが明るくなり、自分は実際に、誰かの背中に背負われているのがわかった。その頭の真んなかに、ちょこんと髪の毛が乗っている。ペケジだった。
勘違いもいいところだ。父は自分が生まれる前に死んだのだから、父の背に揺られるなんてことがあるはずがない。それでも先ほどの声は、父が夢を通じて語りかけてくれたという気がし

た。
胸にかけておいた父の形見を探るが、感触がおかしい。それは砕け散り、ほんの小さなカケラしか残っていなかったのだ。アムテカ最後の黄金も、このありさまだ。そして自分もまもなく……
「あれ、ケチさん。気づいた？」
ペケジが首をひねる。なんとも緊張感のない、大きな前歯が見えた。
突然、胸に鈍い痛みが凝結した。喉もとに、圧倒的な圧力とともに、苦痛が迫りあがってくる。
「ぐほっ……」
なんとか顔を横にそむけ、それを吐き出した。
「うっ、うわっ！」
ペケジを驚かせてしまった。謝ろうと思ったが、口がこわばってうまく開かない。それでいて口内は、血でぬるっとして気分が悪い。
「気づいたのかい？」
お竜が細い眉を寄せながら、顔を覗いてきた。せめてうなずこうとするが、全身が麻痺した感じで、思うように動かなかった。
「いいよ、そのままで。無理しないで」
お竜が、いたわるように声をかけてくれる。その後ろにいるお鷹のパッチリとした目は、真っ赤だった。
「ううっ……うええーん」
耐えかねたのか、その目から大粒の涙があふれ出てくる。
「おかしら……涙は、いけやせん」
難しい顔をしたハッタリが、お鷹に手拭いを差し出した。
前方には、シレンの後姿が見えた。その肩には、お決まりのようにコッパが乗っている。コッパは口元を引き締めて、ときおりこちらを振

り返るが、シレンは前を向いたままだ。
先ほどまでの激闘が、脳裏に思い浮かんだ。魔蝕虫は倒したのだろう。だがまだ黄金のコンドルを救出するという使命が残っている。
シレンこそ、自分の見こんだ御方。この命などという、ちっぽけなものにとらわれ、目的を見失ってはいけない。
向かう先には、巨大な繭があった。その内側から、太陽のような光が漏れ出ている。その光は、胸のなかを満たしてくれるようだった。
そのうち、また視界が霞んでくる。頭がボーッとして、何も考えられない。目を開けているのもおっくうだ。
「ケチさん！」
お竜が自分の名を呼んだ気がした。ふたたび静寂と闇とがおとずれた。

「ケチ、足元に気をつけるのですよ」
暗がりのなか、母ヤブメの手に引かれて、〝地下水脈の村〟を歩いている。母は若々しく、元気だった。
すでに村の外れ、みんながふだんは通らないところまで来ていた。何度か「どちらへ参るのですか？」と質問したが、母は真剣な表情で「王家の者しか知らない場所ですよ」としか、言ってくれなかった。
その母の足が止まる。
「さあ、ここです」
目の前は岩壁。そこに、ひときわ大きな岩が置かれていた。
首をかしげると、母が口を開いた。
「この岩の向こうには、洞窟が広がっています。それはアムテカまでまっすぐつながる道。王が帰還する道なのです」

その神妙な声が、耳の奥でこだました。今まで心のなかだけで想い描いてきた、本当の故郷に通じる道。そしてそこは、父が戦死した場所だ。
「この道を抜けたところに、魔蝕虫という怪物がいるのですね？」
問いかけると、母は大きく頷いた。
「ケチ、あなたは王家の血を受け継ぐ者。いつの日にか魔蝕虫を退治し、アムテカを取り戻さなくてはなりません。それが生まれ落ちし時より、太陽神から授けられた宿命」
厳かな声。
「父上も、ここを通ったのですか？」
「そう。父は……勇敢に戦って死んだのです」
母は、じっと岩を見続けている。
「必ずや、父上の仇を取ってみせます！」
母と天国の父に対して、そう宣言する。父はきっと、魂となっても自分を見守ってくれている。だから、がんばれる。そうすれば、いつか太陽神の御許に召されたとき、誉めてもらえるだろう。
母は服の袖口で顔を覆っていた。すすり泣くような声が漏れてくる。
「母上、どうかなさいましたか？」
母は、わずかに微笑んでいた。
「夜は冷えます……今日は早く戻りましょう」
母が手を取り、歩き出す。温かい感触。引っ張られるように、そこから離れる。視界から消えるまで、何度も何度も振り返った。最後の瞬間、その岩にめがけてつぶやいた……
「父上」
目の前がボンヤリとしてきたかと思うと、ペケジの声が返ってきた。

「オレ？　おかしいなぁ。オレにはまだ、子供なんていないけど」
思い出した。今はペケジに背負われていたのだ。
しかし、懐かしい夢だった。そのわずか一年後、村の総意でアムテカへ行くこと自体が禁じられた。母が無表情で淡々と告げたのが今でも鮮明に脳裏に刻まれていた。
いつのまにか、目の前には光る繭があった。なかの輝きが強くなっている。と同時に痛みがぶり返してきて、全身が悲鳴をあげた。
「うぐっ」
苦痛にうめいたとき、お竜の声が飛んできた。
「ケチさん、大丈夫かい⁉」
その言葉に続いて、シレンが剛剣マンジカブラを抜きはなった……
いや、違う。その刀身は、自ら光を放っていた。形状はよく似ていたが、まったくの別物だ。剣と繭の光は、互いに呼応するかのように脈動し、輝きを増していく。
シレンが大きく跳躍する。その剣を思いきり上段に振りかぶった。そして……まるで薄絹を断ち切るかのように、繭が割かれていった。
おそろしいほどの光の爆発。思わず目を閉じたが、圧力を感じるほどの温かい輝きは、瞼を通り抜けてくる。
「す、すごいや！」
誰もが押し黙るなか、コッパの声が響いた。
薄く目を開けると、アムテカの神殿で見た姿そのままに、黄金のコンドルがいた。違うのは、それが実際に生きて動いているということと、全身から黄金の光を放っていること。まさしく太陽神の化身であった。
気高きそのコンドルは、鋭く、そして優しい

目つきでこちらを眺めている。感無量だ。ようやく、使命を果たすことができた。これでいつ逝っても、思い残すことはない。
「キレイ……」
お鷹の瞳は涙を忘れ、黄金のコンドルに見とれていた。その顔のほうがずっといい。まだ若いお鷹には、涙は似合わないのだから。
ハッタリが後を続けた。
「見ているだけで、癒されるような気がしやがる……」
確かに。少なくとも、自分の心は確実に癒されていた。
「邪悪なやつらが、封じこめたくなるのがわかるねえ……これでこそ、助け出した甲斐があるってもんだよ」
誇らしげな、お竜の眼差し。
シレンはすでに、刃を鞘に収めている。

黄金のコンドルは首を高くあげる。
ウォルル────────ン。
その喜びと祝福に満ちた鳴き声が、温かく全身に染み渡っていく。雄々しい翼を大きく広げると、光が飛沫(ひまつ)となって飛び散った。
そのとき、背後から地響きが聞こえてきた。
「なんだい、この音？」
お竜が首をかしげて、辿ってきた道のほうを見た。
「亀裂が……どんどん広がってく！」
お鷹は信じられないといった顔をして、壁を指さした。
「ちぃ。爆薬を使いすぎたか……」
ハッタリが、苦虫を嚙みつぶしたような顔をする。
上にあった湖が、とうとう決壊してしまったか？

「うわっ、水だ。水が押しよせてくる！」
コッパが叫んだ。
「ええっ、オレ、泳げないよ。どうしよう！」
ペケジがオタオタしはじめる。景色が揺れた。
「少しは落ち着きな！」
お竜が鋭く一声を発した。
近くの壁に深い亀裂ができ、とうとう水があふれてくる。
「あたいら……ここまできて、こんなとこで死ぬの？」
うろたえたお鷹に、ハッタリが喝を入れる。
「おかしら、あきらめちゃいけません！　出口を探しやしょう」
「でも、どこに？」
お鷹の声は悲痛だった。
一方シレンは、黄金のコンドルを見つめていた。コンドルもシレンを見つめ返している。そしてゆっくりと一礼し、その翼を低く垂れて、こちらに示す。
「乗れって、言ってるんだ」
言うなり、コッパがシレンの肩から降りて、いち早く駆けていく。瞬く間にコンドルの背中に飛び移り、なんとその頭にちょこんと座った。えっへんと、腕組みをする。動物同士、心が通じたのだろう。
「なにやってんの？　みんなも早くおいでよ！」
黄金のコンドルは、目の光を細めて、鷹揚にこちらを眺めていた。
「うわっ、冷たい！」
ペケジが身体を震わせる。水は足元を濡らしているようだ。
「ほら、ペケジ。ボサッとしている場合じゃないよ。急ぎな！」
お竜がせかした。

「えっ、オレが？　ああ……うん、わかった」
ペケジが歩き出す。アムテカの守護鳥の威容が、どんどん近づいてくる。
そのあいだも、水位を増しているようだ。自分の足先にも、冷たいものを感じる。感じるということは、まだ生きてるのだろう。
ペケジは、その水を押し分けながら、進んでいく。
「おらおら、しっかり登れや！」
ハッタリが声をかけてくる。
「うわー、お尻押さないで！」
ペケジの動きが、いきなり早くなった。
間近で見るコンドルの羽毛は、蠱惑的（こわくてき）なほどに美しかった。内に秘めた輝きに、心まで吸いこまれそうになって……
次に気がつくと、すでに黄金のコンドルの背中だった。アムテカの守護鳥の背は、ふんわりとして、とても心地よい。
自分を囲むように、今回の旅仲間の姿が見える。
お竜は、優しげな笑みを浮かべて、手を取ってくれた。その手から、体温とともに自分を気づかう気持ちが伝わってくる。なんだか、やさしかった昔の母親を思い出させた。
お鷹は心配そうなまま、微笑もうと努力している。
ペケジは、誇らしげに胸を張っている。
ハッタリは、刀傷の目立つ顔を不器用に歪めて表情を隠している。
シレンは、ジッとこちらを見つめている。そして深くうなずいた。
すぐ近くから、崩壊する岩が、水に落下する音が響いてくる。

なぜか知らないが、黄金のコンドルは微動だにしない。何かを待っているようだった。
　水位の上昇は激しい。このままでは、この鳥さえ呑みこまれかねない。われわれの選択は間違っていたのか？
「何やってるんだろ？」
　コッパがコンドルの顔を覗きこむ。そのとき……
　コンドルは大きく高く鳴き、頭を低くした。翼も完全に胴体に密着させ、その形はほとんど紡錘形となった。
「何をする気だ？」
　ハッタリが、誰にともなく訊ねた。
　次の瞬間、黄金のコンドルは信じられないことをした。足元には、太く勢いよく、濁流が流れている。そのもっとも大きな流れへと、身を飛びこませたのだ。当然、乗っているこっちも無事ではすまない。
「ゲゲゲッ、やばい！　みんな、つかまって！　羽毛の中にもぐりこんで！」
　コッパはそう言うと、いち早くコンドルの首の後ろに隠れた。
　岩盤が崩壊し、あたりが鳴動する。後ろを見ると、水が天井まで達し、すべてを呑みこむかのように追いかけてくる。まさしく鉄砲水。この世の終わりの光景を思わせた。
「うひい」
　言いながら、ペケジが隣で必死にコンドルにしがみついていた。
　だが、自分はどうにも力が入らない。どんどん寒くなってくる。
「みんな、死んでもケチさんを放すんじゃないよ！」
　お竜が腕を痛いほど握りしめてきた。

「あ！　うん、わかった！」
ペケジが、その太い腕を自分の腹にかける。
お鷹とハッタリは、もはや言葉がない。ただただ、みんなが自分に向かって手を伸ばしてくる。
だが自分は、もはや死にゆく身だ。それを無益に助けようとして、仲間が逆に死んだら、お天道さまにもうしわけが立たない。
まるで生きものであるかのように、水が四方八方から襲いかかってくる。もはや何がなんだかわからない。轟音と、水の流れと、冷たさと、闇と、コンドルの体温と、仲間の手。
巨大な衝撃音。襲いくる水に呑まれて、みなの手がひとつひとつ放れていく。
ふっと、自由になった気がした。次の瞬間、青い空があった。
風だ。風のなかにいた。水しぶきがあたりに舞い、キラキラと輝いている。
初めて見る幻想的な風景。さては天のお迎えが来たのか？　ずいぶんと待たされたものだ。
上方には、闇のなかで長らく見ることができなかった太陽があった。果てしなく気持ちがよかった。そのとき……
滝のような音に、思わず視線を下界へと移した。切りたった崖。そこから水が溢れ出して、真新しい滝になっている。落下する水の先端も、まだはるか彼方の地上には達していない。どうやら、これは現実の続きらしい。
その出来たての滝のまわりを、円形の虹が囲んでいる。
濁流の滝は、さまざまなものを運び出していた。最初それは明らかに岩であったが、よく見るとデブーチョやマッドレムラスが混ざってい

る。どうやら水は、すべての悪しきものを流してしまうつもりだ。
ふと視界の隅に、黄金の翼を広げてはばたいている鳥が見えた。その背には、みんなの姿があった。
黄金のコンドルは鋭い一声を発すると、風を切ってこちらに方向を転換した。
「ケチさーん！」
お竜の叫び声がする。ペケジが抱えるように、大きく手を広げている。
おやおや、自分の悪運も、まだ尽きてはいないようだ。
金色の羽毛が、見るまに接近する。
「うんしょ！」
軽い衝撃の後、ペケジに抱きかかえられていた。
「あ、とととと」
そのペケジが、よろける。
「しっかりしやがれ！」
それをハッタリが支える。ふたりに掴まれて、黄金のコンドルの背を踏むと、再び横たえられた。その背はやはり柔らかかった。
不思議なことに、水で濡れたようすもほとんどない。太陽の鳥である。もしかしたらその力で、水鳥のように水をはじくのかもしれない。
「ふーう。一時はどうなることかと思ったよ」
お竜が、大きなため息を吐く。
「ひやひやさせるなよ！」
コッパが目の前に来た。
「よかった……」
お鷹はまた涙ぐんでいた。
なぜだかシレンは、興味深そうにこちらを見ていた。
心地よい風。柔らかい陽射し。気分もよくな

ってきて、全身が芯から温まってくる。
みるみるうちに、体内に違和感が育ってきた。
なんだこれは？
胸を中心に、さっきまで全身に広まっていたはずの痛みが、急速に抜けていく。最初、もはや痛みも感じないほど、感覚が死んでしまったのかと思った。実際には逆だ。手足の指先まで、何かが伝わってくる。
「こ、これは……」
言いながら、身をしっかりと起こした。
お竜が驚いたように、手を握り返してくる。
「大丈夫なのかい？」
そして……
「ケチさん、あんた……」
「どうしなすった？」
ハッタリの顔が見えた。
お鷹が口元に両手を当てて、目を大きく見開いている。
「え？　まさか？」
お竜が目元をほころばせたかと思うと、そこから大粒の涙が一気に流れ落ちた。
「ケチさんの手……温かくなってるよ」
「……ってことは、ケチさんは治ったのかな？」
ペケジが不思議そうに、首をかしげた。
「そのようです。わたしにも何がなんだか……」
身体じゅうを点検する。手が自由に動いた。拳に力をこめることもできた。不思議なことに、確かに身体はよくなっている！
「うっ……嘘でしょ！　でも、ちゃんとしゃべれてるし！」
コッパが仰天した。言われてみれば、そうだ。自分でも信じられないくらいだから、この驚きは当然だろう。
「え？　ホントにホントに、治ったの？」

お鷹の表情が、どう受け止めていいかわからないといったふうに、千変万化する。
「そういや妙だ。さっきまであった俺の痣も……ほら、見あたらねえ」
ハッタリが、自身の腕をあげてしげしげ検分している。
とたんシレンとコッパ以外の全員が、袖をまくりあげて、互いを眺めはじめた。
「ペケジ、おまえの青痣も……」
お鷹が言いかけた言葉尻を、ペケジ自身が続ける。
「うひゃあ、消えてる！　消えてるよ！　こりゃあ、なにかの思し召しだ！」
お竜はすべてを理解したような、優しい笑みを浮かべた。
「そういえば、あたしもなんだか疲れがとれたようだよ。まるで湯治にでも行ったみたいに、気持ちがいい……」
ハッタリは頬の刀傷を触りながら、うさんくさそうに辺りを見まわした。
「ずいぶんと不思議なこともありますな……」
すると、豪快な腹の音がした。
「安心したら、腹が空いたよ」
コッパが恥ずかしそうに言う。
今度は、それを上回る腹の音。
「ははは、オレもそうみたいだ！」
ペケジがゾウリ頭をかいた。
とたん、あたりが爆笑の渦に呑みこまれた。
先ほどまでの憂鬱な気分が、嘘のように吹き飛んだ。
黄金のコンドルの、喜びにあふれた声が、それに唱和する。
シレンが唇の端に笑顔を浮かべて、大きく深くうなずく。

その瞬間にすべてがわかった。これはすべて、黄金のコンドルの力なのだ。太陽の力を全身に浴びて、その力も解き放たれたのだ。アムテカの真の黄金とは、この力のことだったに違いない。

思わず、壊れた首飾りを握りしめていた。父上に感謝の念を捧げる。そのとき……

「よし、決めた！」

お鷹がポンと手を打った。

「宴を開こうよ。今回の旅の成功を記念して、シレンさんがこばみ谷とかでお世話になった人たちもみーんな呼んで、ぱっと大宴会を！」

「そいつはよいお考えで」

真っ先にハッタリが同意する。

「賛成、賛成、大賛成！」

ペケジの反応も、それに劣らぬくらい早い。

「あたしもかまわないけどさ」

お竜は首をかしげながら、シレンに視線を送った。

「場所はあたいの砦。生まれ変わった姿を、みんなに見てほしいし。ね、ね」

お鷹がジッと視線をそそいでくる。意地でも断らせないという意志のこもった、強い瞳だ。

「つつしんで、お受けいたします」

じっさいのところ、自分が断る理由は何もなかった。

「シレンさんもいいよね？」

お鷹の声にシレンは微動だにせず、コンドルの行く先を眺めている。

「ダメ……なの？」

お鷹は、悲しそうな声をあげた。

代わりにコッパが答える。

「そこまで言うなら、シレンもいいってさ」

どうやらシレンは、照れくさかっただけらし

い。
「やったぁ！」
お鷹は、その場で飛び跳ねた。
「コンドルさん、あたいの家へ行ってちょうだい。ほら、あっちの方角だよ」
黄金のコンドルは、お鷹の指示する進路を見定め、さっそうと向きを変えた。神鳥である。人間の言葉を、すべて聞き取ることができるのだろう。
「うっひょうー。みんな振りおとされるなよ！」
コッパが叫びながら、黄金のコンドルの羽毛に摑まった。眼下では、モンスターを巻きこんで落ちる滝が、ようやく地上の河へと到達したところであった。
テーブル・マウンテンの山頂からお鷹の砦まで、わずか半刻（約一時間）あまり。
その羽ばたきは、まさに神の名にふさわしい。
「あそこだよ、おろして！」
お鷹の声に呼応して、黄金のコンドルは旋回を繰り返しながら、たちまちのうちに降下していく。振り落とされないよう、しがみついているので精一杯だ。
怪物の襲撃と勘違いしたのだろう。地上ではお鷹の配下たちが、右往左往していた。
「みんなー、ただいまー！」
黄金のコンドルがふんわりと着地すると、お鷹が降り立つ。ハッタリがすぐに続く。
騒然としていた砦のあちこちから、ワーッという歓声が漏れた。
続いてコッパを肩に乗せたシレンと、ペケジが飛び降りていく。
「いけそうかい？」
お竜が声をかけてきた。

「はい、もう大丈夫です」
ひらりと飛んで、久しぶりの地上を踏みしめる。その瞬間、自分は生きているのだという実感が戻ってきた。
その隣に、しなやかな身のこなしで、お竜が降り立った。その表情は、安堵と誇りで輝いていた。

「お、お鷹さま……よくぞご無事で！」
山賊……いや、失礼。もと山賊のなかから真っ先に顔を出したのは、長老だった。いまにも泣き出さんばかりに、駆け寄ってくる。
「うむ、心配かけたな。じい」
お鷹はすでに、長としての威厳をすっかり取り戻している。
長老の顔が、隣のハッタリに向いた。
「お役目、ご苦労であった」
「へい。道中、なにごともございやせんでした」
その答えは、すましたものだ。
「これはこれは、お竜さまにシレンさま。お久しゅうございます」
長老が深々と頭をさげた。顔をあげたその瞳は、油断なく輝き、こちらを見据えた。
「そこにいるのはペケジか。そちらは、確かケチどのでしたな」
長老に睨まれたペケジは、萎縮していた。自分もひどく警戒されているよう。まあ、消えるようにいなくなったのだから、しかたない。
「元気してたかい？」
微妙な空気をうち破るかのように、お竜が長老に明るく声をかけた。
「それはもう、おかげさまで……しかし、これはいったい？」
長老は、黄金のコンドルを見あげる。

「事情はあとで話すよ」
お鷹は後ろを振り返ると、投げキスをとばした。
「ありがとね、黄金のコンドルさん」
「あーう、オレにもご褒美……あぐっ」
ペケジがなにやらボヤキだすと、わきからお竜が殴った。
「止めな、みっともない。ここは素直に感謝するところだろ！」
いまや、もと山賊たちがまわりを囲み始めている。反射的に、腰の仕込み杖に手をやる。
ところが彼らは、以前と比べてこざっぱりとした服装をした者が多い。山賊稼業を辞めたというのは本当らしい。
黄金のコンドルは、一鳴きして翼をはためかせた。
もと山賊たちは、慌てて包囲の輪を解く。

「ありがとよー！」
お竜が手を振る。
「達者でな！」
ハッタリの鋭い一声が続く。
「今度は捕まるなよー！」
コッパも、それなりに励ましているつもりだ。
「また、乗せてよねー！」
ペケジの素直な言葉。
黄金のコンドルの巻き起こした風が、シレンの縞合羽を揺らす。その風のなかで、シレンは目礼した。
自分も、深い感謝とアムテカの加護を願って、ただただ深く頭を垂れた。
いっそう強い羽ばたき。黄金のコンドルは宙を舞っていく。太陽が黄金のコンドルを照らす。もう一つの小さな太陽が、出現したかのようだった。

空中で三度ほど旋回したかと思うと、あとはまっすぐ飛んでいく。故郷アムテカを目指して。その姿が見えなくなるまで、ずっと見続けていた。

「さてと……じい！」
お鷹が長老に向き直った。
「はっ」
「シレンさんたちの帰還と、黄金郷アムテカの解放を祝って、大宴会をおこなうことにしたからね。すぐ書状をしたためるから、手伝うのじゃ！」
「は？　……ははっ！」
長老は、唐突な提案に一瞬目をむきながらも、ハッキリと返事をする。お鷹の無茶に、慣れきっている感じだ。
「ハッタリは、早馬の手配だよ！」
「わかりやした！」
返事するなり、ハッタリは駆けて行った。
そこへ、いきなり天地もひっくり返りそうな、腹の音。
「えへへ。オレ、腹が減って、おなかと背中がくっつきそうだ」
ペケジが、恥ずかしそうに頭をかいた。
お鷹はコロコロと笑い出した。
「そうそう、忘れていたよ。その前に食事と寝床の手配を頼む。シレンさんたちは腹を空かせているし、おつかれだからね」
「承知いたしました。さ、みなさま、こちらへ」
さっそく長老が配下のものに、いろいろ指示を飛ばし始める。
お鷹はシレンに流し目を送り、顔をほころばせた。
「ふふふふふ」

「どうしたっていうんだい、お鷹？」
お竜が訊ねる。
「なんでもないよ、ねえさん。それじゃみんな、また後でねえ！」
お鷹は軽快に足踏みしながら、自分の屋敷に向かっていった。
シレンは、なんだか冷や汗を流しているようだった。
「なにボーッとしてんだい。行くよ、シレン！」
お竜は、そんなシレンの背中を思いっきり叩くと、長老についていった。シレンも無言で歩きはじめるが、その足取りは妙に重い。
いやあ、もてる男はつらいねぇ。
「では、わたしたちも行くことにしましょう」
「うん！」
うながすと、ペケジもドタドタと駆け出す。
空に浮かぶ夕日が、いつもより輝いて見える。
久しぶりにいい夢が見れそうだ。

お鷹の砦に滞在しているあいだ、アムテカのことばかりが頭に浮かんだ。あの土地をよみがえらせ、再び人であふれさせるための国造り。考えるだけで楽しい気持ちになってきて、いくらでも時間を過ごせた。お鷹や長老に頼んで、たくさんの紙をもらうと、さまざまな計画や図面を書きつけた。
そうこうするうち、こばみ谷の各地から人々が集まってきて、お鷹の砦内はどんどんにぎやかになってきた。仮設宿舎の増設も、突貫工事で進められている。
やがて母ヤブメも、護衛の者を連れて、ここまでやって来た。
「母上……」
感極まって、言葉が出ない。先触(さきぶ)れで主なこ

とは伝わってもいるはずである。だからこうして顔を見ることができただけで、よけいな言葉などいらなかった。
「ケチや……」
それは母も同じらしかった。
「ただいま戻りました」
絞り出すように、その一言を告げる。
「よくぞ無事でいてくれた……」
顔に刻まれたシワが、一段と増えているような気がした。心痛のほどが察せられ、胸に熱いものがこみあげてくる。
ずっと首にかけていた、父の形見を取り出す。
「おお……この首飾りはまさしく、わらわがあの御方に託した……」
母は震える手でそれを取ると、固く握りしめた。
「これが……わたしの命を守ってくれたのです」
すると母は、雷に打たれたかのようにハッとし、長年の疑問にケリがついたというふうに、深く何度もうなずいた。
「ケチのことを……そなたのことを示していたのだな、そなたの父が出陣したときの神意は。そなたの旅立ちのさい、まったく同じ神意を受けた。どちらも、そなたのことだったのだ……そなたはあの時すでに、わらわのなかにいた」
ヤブメの目から、ボロボロと大粒の涙がこぼれてきた。気丈なタチで、今の今まで、そんなものを見せようとはしなかった母である。
「神意を読み違えたのは、わらわだ。わらわはどうして、あのときあの人を、止めなんだのか……」
「人は神ではありませんよ、母上。すべてを見通すことはできません」
そう言って、すっかりやせほそった母を、抱

きしめてやるしかできなかった。
「シレンどのに、礼を言わなくてはのう」
と言い出したのは母であった。母を導いて、シレンの泊まる部屋へと出向く。ところがその部屋から、怒鳴り声が聞こえてくるではないか。
「おかしらのどこが、不満なんで?」
激しているのはハッタリであった。
「怒るとこ違う! 問題はもっと、別なとこでしょ!」
コッパの反論する声が聞こえた。ただならぬ雰囲気であったので、ワザと大きく咳払いをする。
「ええと、シレンさん。少しよろしいですか?」
瞬間、部屋の中が静まった。
それからハッタリが、モゴモゴした口調で言った。
「……ともかく、きちんと考えてくだせえ」
「だから、考えてるってば。いいよケチさん、入っても」
コッパの声は、後半から大きくなった。
「では失礼」
引き戸を開けると、入れ替えに不機嫌なハッタリが出てくる。まあハッタリは、いつもそんな表情なのだが。
それに頭を垂れる。
「おや、ケチのダンナでしたか……それにお母上まで」
ハッタリは、いぶかしげに目礼すると、そそくさと去っていった。
「あれ? ヤブメさんもなの?」
コッパが不思議そうな顔をしている。その表情が、今のシレンとそっくりであった。
中に入り、戸を閉めて、おもむろに用件を伝

える。
「今日は母とともに、お礼に参りました」
そう切り出すと、母が謝罪の言葉を述べはじめた。
「そのせつは、まことにすまないことを……」
「うん、まあ、そんな気にすることないよ！おかげで楽しめたしね」
コッパは、あまりにもアッケラカンと言う。しかもシレンが、それにまた熱心にうなずいている。
「それより、まったく参っちゃうよ……」
コッパはそこでシレンの顔色をうかがい、いきなり口をつぐんだ。おそらくは先ほどのハッタリの件であろうが、あまり詮索するのは礼を失する。それに訊かずとも、だいたい見当はついていた。
「あ、そうだ。オイラたちも、ケチさんに用事があったんだ！」
コッパが、元気過ぎるくらい大きな声をあげた。シレンは妙にサッパリした顔で、腰のものを手にとると、こちらに差し出してきた。
「これは……」
新生した剛剣である。突然のその行動に、真意をはかりかねた。
するとコッパが、さもそれがふつうの行為であるかのように説明した。
「形は変わっちゃったけど、もともと借りてたものだからね、返すよ」
風来人にとって、武器とは命をあずけるもの。究極の力を秘めた剣を、かくも簡単に戻してくるとは信じがたかった。
「しかし、それは……」
じっさい貸したとは形の上であって、自分としては譲ったつもりだったのだが。

「いいんだよ。こんな重い意味のある剣じゃ、手軽に使えないからさ」
コッパは、意味ありげに片目を閉じた。
「おおおお、まさしく真の勇者たるおこない」
母が喜びに打ち震えながら、おごそかにその剣を受け取った。魔蝕虫退治の秘剣は、アムテカ再興の象徴となる。その配慮と考えると、シレンの懐と情けの深さを、あらためて思い知らされた。
母ともども、深く深く頭を垂れた。
三人と一匹で外へ出た。あちこちに露店が立ちならび、小さいながらも市場が形成されている。
お鷹の配下が、警護として要所要所に立っているせいか、いざこざもそれほど起こっていない。もともと統制がとれた武装集団だっただけに、正しく目的が定められると、しっかりと機能していた。
「うーん。ここに来ると、いつもなに食べようか、悩んじゃうんだよなあ」
シレンの肩に乗っているコッパは、いまにも涎を流さんばかりである。
そのとき、気のよさそうな男が呼びかけてきた。
「シレンさんでは、ないですか？」
「あ、ボボロさん！　久しぶり！」
コッパが小さい手を、千切(ちぎ)れんばかりに振りだした。
ボボロと言えば、奇岩谷で預かり場を経営する男だ。以前見たときは酒に溺れ、見る影もなかったが、いまはすっかり血色がよくなっていた。
「どうもどうも。さすがはシレンさん。見事、

使命を果たされたそうで、私の鼻も高いです。それにこのたびは別件でも、おめでとうございます。なんでも……」
「うわ——っ、あーあ」
コッパはボボロの言葉を遮るように、大きな声をあげた。
「どうしたんです？　いきなり？」
「ええと……そうそうボボロさん、武器を扱かってるお店って、出てない？　いまシレンが、手頃なカタナを探しているんだけど」
「はあ」
ボボロが首をかしげると、コッパが慌てたようにつけ加えた。
「この前の戦いでなくしちゃったから、新しいのがいるんだ」
脇にいた母が、シレンから預かった秘剣を複雑な面もちで眺めた。いとおしそうでもあり、悲しげでもある。
そういえば父が出陣したときにも、この秘剣の元になった剛剣マンジカブラを、渡そうとしたのだという。しかし「風来人には使い慣れた武器が一番」と言われて、受け取らなかったそうだ。もし父が受け取っていたら、運命は変わったのだろうか？　それともやはり〝完璧な合成の壺〟が必要だったのだろうか？
いや、過去はもう問うまい。今はこれからのことを考えよう。
不意にボボロが、何かを思いついたような表情を浮かべた。
「そういうことでしたら、ひとつ私の出店まで、ご足労を願えませんか？　希望の品を、お渡しできるかもしれませんよ」
「ええ、ホントに!?」
コッパの声は、本当に嬉しそうだった。

「では、ご案内しましょう」
あくまでもていねいな物腰で、ボボロは先頭に立って歩きはじめた。

店に着くと、ボボロの妻ララが、ほっそりとした身体に似合わぬ元気さで、お茶や小料理の準備をしているところだった。
「おーい、シレンさんご一行をお連れしたぞ！」
「あら、よくぞご無事で。大変だったでしょう？　さあ、うちの茶屋で、休んでいってくださいな」
ララはいつにもまして、親切である。シレンはゆっくり頷く。
「あー！　コッパちゃんだ！」
娘のスララがひょっこり顔を出した。パッチリとした目が、クリクリと丸くなる。
「ゲゲゲッ！　忘れてたぁ！」
コッパは、ひょいと地面に降り立ち、逃げ出そうとした。
「待って、待って。そんなに恥ずかしがらなくて、いいのよー」
スララが追う。
「おや、そちらのお客さんもご一緒だったんですね。いらっしゃいませ」
自分も客としては、何度か訪れたことがある。今まで改めて名乗ったことはなかったが、とりあえずお辞儀を返しておく。
「ぐわっああ！」
叫び声がした。見ると、コッパはすでにスララに捕まっていた。
「コッパちゃん、一緒に遊ぼう！」
スララは、晴れやかな笑顔を浮かべている。対照的にコッパはムッツリと苦しそうな顔で、思わず苦笑いしてしまう。

今まで奥のほうで、なにやら商品をあさっていたボボロが、一振りのカタナを取り出した。
「シレンさん、これを手にとってご覧ください」
シレンは黙って手に取ると、すらりと抜いて刀身を確かめはじめた。自分の目から見ても、なかなかの業物（わざもの）である。表情からはうかがい知れないが、慎重に見定めているようすから、まんざらでもなさそうだ。
ボボロも、それを見逃さなかったようだ。
「よかったら差しあげますので、どうぞお納めください」
シレンは刀身を鞘にしまう。そしてボボロに一礼した。
「預かり所をやってますとね、商品を預けたまま、お亡くなりになる方もいて……この刀ですが遺族もない風来人のものでして。どうしようかと、ちょうど処分に困っていたのですよ。シレンさんに使っていただけたら、その風来人も本望ではないかと思いまして」
シレンはうなずくかわりに、さっそく腰に差し、落ちないように鞘を紐で結びつけた。
「気に入っていただけまして、こちらもうれしく思います。さて、これからなにか作りますので、そちらもぜひお召しあがりください」
ボボロは心からの笑みを浮かべた。
勧められるがままに腰をおろすと、ララがお茶を用意してくれた。
コッパは一匹、そこらの土間に放り出されたまま、グッタリとうなだれている。その鼻だけが、ひくひく動いていた。
「あーあーうー、香ばしい料理のにおい……生き返る」
スララはといえば、ボボロと一緒になって、

串に刺した鳥肉を焼いているようだった。
「お父さん、こんな感じ？」
「そうそう、うまいぞ」
そのとき……車輪をひく、けたたましい音が聞こえてきた。
「どいた、どいた、どいた、どいたぃ！」
威勢のいい二人（ににん）曳きの大八車がやって来る。
「ああ、あのときの、車屋さん!?」
コッパが、驚いて飛びあがる。シレンは立って、一礼した。
「あ、これはこれは、シレンのダンナ。いつぞやはたーんと、はずんでいただきまして」
太めの男が、額の汗を拭きながら、にんまりと笑った。
「こんなとこで、会えるとはねえ」
コッパも喜んで、飛び跳ねている。
「おや、イタチさんも元気ですな」
すると、コッパは胸を張った。
「オイラには、コッパっていうれっきとした名前があるんだ。よーく覚えておきな！」
「あはは、こりゃども。アッシはゴロ、向こうの若いほうは、ガラって言うんでして。このあいだは名乗りませんでしたが、ここで会ったのも何かの縁。今後ともよろしくお願いします」
すると大八車の上にしつらえられた駕籠（かご）から、降りてくる人影があった。
「なにをゴチャゴチャやっておるか！」
すさまじく大きな横柄な声。それはまさしく、陶芸家のガイバラその人であった。この気難しい四角い顔の老人は、鬼をも射抜くのではという眼光を放ちながら、こちらをビシリと見た。思わず、身がすくみそうになった。
後ろからは頭を丸坊主にした大勢の弟子が続き、それぞれ大荷物を抱えている。

「シレンとやら。ワシの授けた〝完璧な合成の壺〟をもちいて、みごと魔蝕虫なる怪物を倒したと聞きおよんでおる。まっこと愉快、愉快、カッカッカッカッカッ」
いきなり豪快に笑い出した。シレンは誇らしく、しかし神妙に頭をさげた。ガイバラも笑みを返す。
「おぬしがのお……うむうむ、そうか。まあ、こんなところで立ち話もなんだ。ちょうどいい具合にそこに茶屋もあることだし、どうだ、少しゆっくり話をしようではないか」
その誘いに、シレンは半分ありがた迷惑といった表情をのぞかせ、困ったように頭を掻いた。ところが、そのシレンの手を……
「むんず！」
と摑む手が現れた。シレンは驚いて飛びすさろうとしたが、不意討ちされてバランスを崩し、どうにもならずにたたらを踏む。
あの手練れのシレンの虚を突くとは、いったいなにヤツ？
「おおっ、若者よ！　こんなところにいたのか！」
初めて見る老人であった。ガイバラより歳は上だろうが、眼光だけは鋭く、やたらにかくしゃくとしている。最近の老人は、みな元気だ。
「新手がやってきちゃったよ……」
コッパは、ガックリと首まで垂らしている。
「ここで会ったが百年目。とうとうわしに、ガイバラ先生の新作〝完璧な合成の壺〟を譲る気になったか。よい心がけじゃ」
老人はあつくるしい顔を、ぐいぐいぐいとシレンに寄せていく。さすがのシレンも、たじろいていた。
「だいたい前に会ったときには〝完璧な合成の

壺〟なんか持ってなかったし、手に入れたらあげるなんて約束もしていないっていうの！」
「委細かまわぬ。さあ、さあ、さあ、さあ、さあよこせ!!」
「それにおじいさん、その壺ならさ、もう割っちゃったよ！」
コッパが言いきると、たちまち老人の顔が歪む。
「冗談じゃろ？　わしを騙して、諦めさせようなどと、小細工を弄してもムダじゃ！」
「信じる信じないは勝手だけどさ、ないものはないんだよーだ！」
コッパが、あっかんべーをした。
「嘘じゃ、嘘じゃ……あの壺がもう、この世にないなんて！　うおーん」
壺に執着する老人は、だだっ子のようにわめきだした。

「つ……壺マニア」
お竜がいつの間にか後ろにいて、そうつぶやいていた。
「じつに慌ただしい日じゃのう」
母は、じつにのんびりと茶をすすっていた。まあ……すべて世はこともなし、ということか。
「あの老人、招待した客では、ありやせんぜ」
見ると、お竜の後ろにはお鷹とハッタリまでいた。お鷹は、面白そうにクスリと笑っている。
「めでたい席だから、かまわないんじゃない？」
「うわーん、なぜじゃ！　なぜじゃ！」
壺のじいさんは、まだダダをこねていた。
「しかしおかしら、こう騒がれるとねえ。第一シレンの野郎だって、迷惑そうにしてるじゃありませんか」
シレンの名が出たとたん、お鷹の態度が変わる。

「ハッタリ！　じいを呼んで、あの壺マニアを、どこかの部屋に案内してあげて」
「へい……さあさあ、こっちへ来るんだ。な、悪いことは言わねえから」
ハッタリが子供をあやすようにして、壺のじいさんを連行していく。あたりは徐々に静かになり、シレンもあからさまにホッとしていた。
「あんたがここの主人か⁉」
「うわっ！」
お鷹の背後に、いつの間にかガイバラが立っていた。
「そ、そうだよ。あたいがお鷹。あなたは……ああ、高名なガイバラ先生ですね」
お鷹の顔に、微笑が戻る。
「うむ、こたびの宴のために、ワシが手ずから作った器を持参した。存分に使うがよい」
ガイバラは、威儀を崩さないように口ひげをピンと伸ばしている。お鷹は、飛びあがらんばかりだ。
「うわー、ほんとですかぁ！　ありがとうございます。先生には、特別にお部屋をご用意してありますから、案内しますねー」
「ほほう。主人みずからの案内とは、いたみいる。シレンも、よい嫁を迎えるというものだ」
そのとき……何かが割れるような音がした。
シレンが、自慢の葉っぱを噛み切っていた。
お竜が、手にしていた湯のみを、落とした。
母は何事もなかったかのように、番茶をすする。
「ふむ、まあどうせ、そういうことだとは思っていたがね」
その後の一瞬の静寂。そして……
堰(せき)を切ったように、あちこちから歓声があがった。

「そりゃ、本当かい？　すげーや」
「お鷹さん、おめでとう！」
「めでたいぜ、おかしら！」
「お似合いだよ！」
お鷹が、顔を赤らめ、ガイバラの手を引っ張りながら言う。
「ちょ、ちょっとみんな。まだ正式に、そうと決まったわけじゃ……」
「おかしら、ばんざーい！」
「シレン、ばんざーい！」
「おかしら、ばんざーい！」
「シレン、ばんざーい！」
その声は、いつまでもいつまでも絶えることがなかった。

夕刻、砦中央の広場に集まるようにと、お鷹から伝言があった。招待状を出した客が、みな揃ったということである。
母とともに行ってみると、すごい人だかりだ。思い思いに着飾った招待客たちが、わいわい噂話をしている。
そんななか、お鷹の配下たちが、飯台(はんだい)を用意したり飾りつけを急いでいる。そこには坊主頭のガイバラの弟子たちも混じって、せわしげに手を動かしていた。飯台の上には、すでに山のような料理が並んでいる。
「この料理には、このしっとりとした落ち着きの皿が冴える！」
「はっ！」
ガイバラは、できあがった料理をどの器に載せるか、いちいち弟子に命じていた。
広場の中心には、特製のひな壇が備えつけられている。そしてそこに、長老とハッタリに連れられて、きらびやかな和装でお鷹が現れた。

金糸で黄金のコンドルの意匠が縫いつけられている。

「ごほん。みなさまがた、ご静粛に願います」

長老が大きくよく通る声で言うと、そちらに注目が集まった。

「みんな、もう食べてる？　呑んでる？　いまから始めるよー！」

お鷹の透き通るような声。会場のあちこちから、歓声があがる。

「ヤッホーッ！　待ってました！」

「おかしら、最高！」

「オレたちゃ、今日のために駆けつけてきたんだ！」

「たらふく呑ましてもらうぜ！」

お鷹は、口元に優しげに笑みをたたえていた。大きくうなずくと、大きな目を輝かせて、ふたたび口を開いた。

「それにもうひとつ、大事な知らせがあるんだ！」

会場が、ボソボソとしたざわつきで満たされる。とうとう来たか……という期待感であった。

ふと見ると、シレンがいつもの格好をして、隅のほうにいた。葉っぱをくわえたまま、じっとお鷹を見つめている。微妙に緩んだ口元は、嬉しそうにも苦々（にがにが）しそうにも見え、相変わらずなにを考えているかよくわからない。肩の定位置にちょこんと座っているコッパも、今はなぜかおとなしい。

「今宵、あたいお鷹は、シレンさんと愛の誓いを交わす。ここにいるみんなが、証人だよ！」

「うおおおおおおおっ！」

「よく言った！」

「いい夫婦（めおと）になるにちげえねえ！」

会場が一気に沸いた。

シレンは三度笠を深くかぶって、顔を隠す。コッパがシレンの懐に消えた。
そのときお鷹の背後から、光のスジが、ひゅるひゅると天に昇っていくのが見えた。
「くっそー、やけくそだ。行っけーっ！」
ペケジの大声の後、夜空に赤い大輪が咲いた。堰を切ったように次々花火が打ちあげられていく。
「たーまーやー」
「かーぎーやー」
観客の叫び声が、花火の爆音に重なる。色も形もさまざまな仕掛けに富んでおり、飽きることなく、みなの心を夜空に惹きつけている。火薬使いのハッタリが作製したのであろう。壇上で、誇らしげに鼻をこすっていた。
ふとシレンのほうに視線を移す……いない。
慌ててペケジのほうを見ると、彼もまた持ち場を離れて、どこかへ行こうとしている。
思わず母のほうをふり返った。
「行っておやり」
母は、大きく頷く。老いたりといえど、祈禱師のはしくれ。なにか運命を読みとっているらしい。
「母上……では、しばしのあいだ失礼を」
一礼して、ペケジを追う。
また一つ花火の打ちあげられる音がした。ところがその音が、グングン近づいてくる。まさか……
「うわっっあああ！」
「にっ、逃げろっ！」
その花火は、会場のど真ん中の、少し上空で炸裂した。すさまじい光のなかに、ペケジの笑い顔が浮かびあがる。いつのまにこんな仕掛け

を？
　ほとんど光と音しかない花火で、みなあっけにとられるだけ。とくにケガ人などは、出ていないようだ。
　と思ったのだが……
「のわっちゃあああああああ」
　素っ頓狂な声があがった。この声の主は……
「イッカーン！」
　天下のガイバラだった。なぜだかあたりに転がっている自作の壺を、摑むをさいわい叩き割っている。
「熱い、熱いぞ、サルヤマ！　早くなんとかせい！」
　見ると、確かに着物のすそに火が付いていた。他にそんな人はまったく見当たらない。まったく、運が悪いお人だ。
「ガ、ガイバラ先生！　いますぐ消しますから、少し落ち着いて……」
　サルヤマと呼ばれた弟子は、必死な面もちだ。
「これが、落ち着いてられるかあああ！　イッカーン！」
　派手な音を立てて、天下の芸術作品が再び粉みじんになった。
「水だ、水！　早く、水を持って参れ！」
「み、水と言っても……」
　サルヤマが、おろおろと辺りをうろつきだす。このままでは、ヤバい。
　自分が、なんとかしようかと思ったときであった。
「ええい、じれってえぜ！」
　顔に凶悪な傷があるハッタリが、いきなりガイバラを抱えこんだ。
「な、何をする。ワシが天下のガイバラと知っての所業か!?」

「はいはい、誰でもいいからおとなしくしてなせえ……せいやっ！」
ハッタリは、大きな瓶めがけてガイバラを放り投げる。
「うほほほ！」
奇声を発しながら、ガイバラが燃え盛る尻を下に、その瓶に吸いこまれた。とたん、ジュッと火が消える音ともに、香ばしいぶどう酒のにおいがたちこめた。どうやら酒瓶だったようだ。
「せ、先生。大丈夫ですか!?」
サルヤマが駆け寄る。
「う、うむ……なんとかかな。うおっ、これは!?」
今度は尻が瓶にはまって、出られないようだ。
「はいはい、世話が焼ける御仁ですな」
言いながら、ハッタリが手を差し出して、一気にガイバラを起こしてやる。
「う、うううううむむむ」
ガイバラは目を白黒させ、ふらつきながら何とか立ちあがった。
「じゃあな」
言いながら、その場から去ろうとするハッタリ。
どうもハッタリは、老人のあつかいがうまいようである。
「サ、サルヤマ……たいへんに不本意だが、あのものに礼を言っておくのだ」
「あ……はい。心得ました」
本人が礼を言うのがスジだと思うが、サルヤマは慣れているらしく、晴れやかな笑顔でハッタリの後を追った。
まあ、なんにしても一件落着だろう。そういえば、ペケジはどうしたのだ？
かなり遠くのほうに、なんとかゾウリ頭を見つけることができた。やはりこの花火は、事故

ではなくペケジのしわざなのだろう。自分がしでかした事態が、少し心配だったとみえる。
しかし無事収まったのを見て安心したのか、ペケジはくるりと背を向ける。一瞬、こうべをめぐらせてお鷹の姿を眺めると、そのまま頭をかいて、人混みにまぎれた。
衆目も、すっかりガイバラとハッタリに集まり、ペケジに注意を払っているものはいない。自分のほかには。

会場の外に出たペケジは、しっかりとした足取りで、どこかへ歩いていく。
万が一、招待客が迷った用心のために、ところどころに篝火（かがりび）がある。その灯りだけが、あたりを照らしていた。いまは自分とペケジ以外、人の姿はない。
そのペケジは廏（うまや）の中へ入った。やがて……

「アニキ、うまくいったよ！」
誇らしげに報告する声。なかを見ると、シレンはすでに馬にまたがり、いつでも出立できる状態にあった。
「じゃあ、行こうか！」
コッパが言うと、ペケジも馬に乗る。
「オレも、どこまでもアニキについていく。ちゃんと準備もしておいたんだ！」
調子のいいことを言っている。
そこで、物陰からスーッと顔を出すことにした。
「別れのアイサツもないとは、少々水くさいではありませんか？」
「ケチさん！」
コッパが驚きの声をあげた。
「ケチさんも、一緒に行くの？」
ペケジが訊ねてくる。魅力的な誘いである。

シレンの目は深い色を湛え、表情が読みとれない。
「確かにわたしも、しばらく風の向くまま旅をしてみたい気持ちはあります……」
しかしすでに自分は、残りの生涯をアムテカ再興にかけると誓っていた。
「だったら、行こうよ」
ペケジはいつも素直だ。けっきょく、言わなければならないことはひとつしかない。
「わたしには、この地でまだやることがあります……シレンさん、ペケジさん、お達者で」
そのとき……
「ちょいと待ちなよ、アンタたち！」
出口から威勢のよい声があがった。お竜が腕組みをして、キツイ視線で睨んでいる。
「あわわわわ、お竜さん……」
ペケジはおろおろし始めた。
「なんでこんな楽しい企みに、あたしを誘わないんだよ！」
お竜はつかつかと駆け寄ると、ひらりと空馬(からうま)に飛び乗った。
「なにグズグズしてるんだい。先に行くよ！」
お竜は手綱(たづな)を使い、シレンの横に並ぶ。通り過ぎざま、シレンの背中を叩いていく。
「くそーっ、やっぱりお竜さんは一枚上手(うわて)だ！」
コッパが文句を言う。シレンがこちらに軽く会釈(えしゃく)をして、手綱を鳴らした。馬がお竜の後を追う。
「ケチさん、元気でねえ。また会おう！」
コッパの明るい声。別れに、似つかわしくないほどだ。
「またねえ！」
ペケジも駆け出して行った。

外に出て、目でシレンたちの姿を追う。馬蹄の響きが、どこまでもこだましていた。
不意に、背後に人の気配を感じた。
「シレンさん、なんでだよ……」
お鷹だった。髪や衣服を振り乱して、必死にここまでやって来たのか。
「しょせん、風来人を一箇所にとどめることはできません。風を止めたら、風ではなくなりますから」
「そんなこと……そんなことなんか、わかってたよ。でもさ、でもさ……」
最後のほうは言葉にならなかった。
「お鷹さん……」
慰めの言葉をかけようとしたとき……胸にお鷹が飛びこんできた。
「うわぁぁぁぁん」
恥も外聞もなく、ただひたすらに泣き出した。温かい体温が伝わってきて、涙の熱さが服を濡らしていく。
お鷹の肩を抱き、頭を撫でた。そこで、視線をシレンたちが去っていった方角に向ける。
小さな旋風が巻き起こった。まるで、シレンが別れを告げているかのようだ。そのままずっと、馬蹄の響きが聞こえなくなるまで、ふたりで闇を見続けた。
明けない夜はない。夜明け前の闇が、いちばん暗いのだ。朝日が射しこんだら、このお鷹という少女は、またひとつ大人になっているだろう。
だが今だけは、こうして慰めていてやりたい。父に抱かれたかった自分のように。

終幕

森の小道を歩いている。

爽やかな風が身を包み、とても気持ちがよい。木漏れ日は優しく身体を暖め、若葉の瑞々しい色合いは目を休ませてくれる。

相棒のコッパだけを道連れとしてきたのに、いまやお竜とペケジが、旅仲間として加わっていた。最初にこばみ谷を訪れたときには思いもよらなかったが、これも旅の醍醐味というものである。

「こんな朴念仁についてくるなんて、みんな本当に変わっているなあ」

コッパが、こんなことを言い出す。なにか、たくらみがあるようだ。

「オレはアニキに、どこまでもついて行くよ！」

ペケジは、いつもの調子で返してくる。たんに勢いだけで言っているようだが、不思議と憎むことができない。

「拗ねてるのかい？　まあ、なにを言ってもムダだよ。あたしは一生、シレンと旅をするって決めたんだ」

お竜もとんでもないことを宣言する。誰だろうが夫婦になるつもりはないし、年中ついてこられたら息をぬく暇もない。

とにかくいまは、深く考えないことにした。人間の思慮など、クロンの風の前では無意味なのだから。

「そっか、安心したよ。じつはオイラさ、しばらくのあいだ、独りで気ままに旅をしてみたくなってさ」

これはまた、コッパが妙なことを言いだした。

まあ、初めてのことではないが。
「そう怒るなって、シレン。お竜さんとペケジがいれば、充分オイラの代わりを果たしてくれるさ」
「おいおい、あたしはあんたの代わりなのかい？」
お竜が、少し驚いた顔で言った。
「どうかしたの？」
ペケジが訊ねてくる。
「ほらほら。この谷にオイラの仲間がいるって、前にお鷹さんが話してたじゃない。だから、ちょっと気になってさ」
コッパは、照れくさそうだ。自分にまで黙っていたのは、今まで迷っていたからだろう。
人間と違って、語りイタチはごく限られた数しかいない。いつもは人間と交わっていても、やはりどこか淋しいのだろう。仲間が恋しいという気持ちは自分にもわかる。だからここは、黙って見送ろう。
そこで軽く頷き、賛意を示した。
「ありがとう、シレン。落ち着いたら連絡するよ。それじゃみんな、またね！」
言うなりコッパは、森へ駆けていく。あいつらしかった。
「あらら、なんだか淋しくなるねぇ……」
お竜が感傷に浸っている。
ペケジは、ぼけっとコッパの去っていくのを見ていた。
「え？　もう、こんなにさっさと、行っちゃうの？」
まるで信じられないようだ。
コッパの姿が見えなくなったので、早々に立ち去ることにした。これも風来人の定めである。
またどこかで会えるという予感は、しっかりと

胸に息づいているのだから、むしろ清々しい。
「アニキ、運命の人が見つかったよ！　さっき通った茶屋の娘さん！」
次の宿では、ペケジが騒ぎ出した。
「ペケジ……おまえそれで、今までどんだけしくじってきたと思ってるんだい？」
確か聞かされた話だけでも、五指では足りない。
「恋した相手のために、身を滅ぼしちゃあ何にもならないじゃないか」
お竜が神妙に説く。
「えっ？　でも運命なんだよ。今度は絶対うまくいくって！　間違いない」
ペケジは、根拠のない確信に満ちた眼差しで、熱く語る。
「はーあ、懲りないねえ……」
お竜が頭を抱えた。
ここは黙って見守ってやろう。餞別にと、すこし路銀を分け与えることにした。
「アニキ、いつもありがとう！」
ペケジの笑顔とは対照的に、お竜は苦虫を噛みつぶしたような表情だ。
「まったく、そんなことしてたら、またすぐにスッカラカンだよ……まあ、そんなところも、気に入ったんだけどさ」
なにか、微妙なことを言われたような気がする。いや、気にすまい。
「それじゃ早速、会いに行ってくるねー！」
言いながら、ペケジは駆け出していた。
「いつまでも来なかったら、先に行っちまうよ」
お竜が念を押している。
「もしそうなっても、きっとまた会えるよ」
ペケジが陽気に答えた。あいつはいつも、本

気でそう思っている。

けっきょくペケジは、その宿場に居ついてしまった。どう考えても脈があるとは思えない女性に、日々言い寄っている。

まあ、半年もたてばわかるだろう。しかし、そんなに長くここに留まるつもりはない。

「とうとうふたりっきりか……あたしは絶対、いつまでも一緒にいるよ！」

けっきょく、お竜とふたりで旅に出ることになった。

「ねえ、シレン？」

お竜が流し目をくれる。

「せっかく、ふたりっきりになれたんだからさあ……」

その続きの言葉によっては、いろいろと覚悟を決めねばならないだろう。しかし……

「お竜さんという御方は、こちらでしょうか？」

宿の者から声がかかった。

「ああ、あたしだけど？」

お竜が小首をかしげた。

「飛脚から文（ふみ）をあずかっております。読んでもらえば、わかるということですが……」

宿の者は、言葉尻を濁した。

「貸しな」

お竜は急にソワソワしはじめ、乱暴にその文を受け取ると、その場で開いた。

目が文面を追うごとに、震えが大きくなっていく。

「……なんだって？」

その顔は蒼白だった。

「シレン、すまない……」

いきなり目の前で手を合わせる。

「大恩ある"風来人の元締め"がさ、病（やまい）の床（とこ）に伏せってるっていうんだ。だから、どうしても行かなきゃならない……」
　むろん相手の負担にならぬよう、笑ってうなずく。
「じゃ……」
　お竜は何度か振り向きながら、馬を走らせて行った。クロンの導きとは、まるで逆の街道を通って……

　あっという間に、独りになった。なんだか笑いがこみあげてくる。クロンは最初から、この結末を用意していたのだ。
　あらかじめはぐれたときのために、みなに連絡手段は告げてある。とはいえ、それもどうなることやら。
　しょせんわれらは風来人。別れるも落ち合うも、クロンの風の導くままである。
　明日は、どんな風が吹くのだろう？　いまは旅行くみなに祈ろう。クロンのよき追い風の吹かんことを！

つづく

あとがき

風光明媚（ふうこうめいび）なこばみ谷。
否応なしに旅情をそそるＢＧＭ。
潜るたびに変化するテーブル・マウンテンのダンジョン。
あって嬉しいダンジョン内の出店。
愕然とするほど絶妙なポイントに設置されたワナ。
待ち受ける凶暴なモンスターハウス。
そんな怪物たちに、心強い目つぶしを放つお竜。
神妙なる指圧の技が冴える座頭ケチ。
腹を空かせておにぎりを求めるペケジ。
華麗なる肉料理を供するさすらいの料理人ナオキ。
（そして新たなる力を与えてくれるモンスターの肉）。
豪快な壺割りを披露する人間国宝ガイバラ。

《風来のシレン》は、多彩なるノン・プレイヤー・キャラクターとの出逢いと別れによって〝一期一会〟という想いを強くさせるゲームにしあがっていました。

食糧難で雑草まで食い尽くした状態でおにぎりを見つけたときは、どんなにホッとしたことか……滅多にあることではありませんが。むしろ貴重なアイテムを〝ぬすっトド〟に盗られた後に落とし穴にはまったり、深層にて大型地雷を踏んだ直後にアークドラゴンの自動追尾の炎に焼かれたりして、唖然とさせられることのほうが多かったものです。ガイバラでなくとも「イッカーン！」と叫び、壺ならずコントロー

ラーを投げつけたくなるような散りぎわは、今も心に焼きついています。
こういった悲喜こもごもを幾度となく味わいながら、引き寄せられるように何度も何度もテーブル・マウンテンに挑んだのは、私ひとりではないでしょう。最後の最後まで、全身から緊迫感が離れないハードな展開は「千回遊べるRPG」という謳い文句を、まさしく証明していました。
そんな《風来のシレン》シリーズ。記念すべき第一作『不思議のダンジョン2　風来のシレン』は、1995年にスーパーファミコン版として世に出ました。シレン十八歳の頃のお話で、本書の原作となっています。このお話は、今年からドコモの『i風来のシレン』として配信されていますから、このノベライズを読んでもう一回、あるいは新たに挑戦したくなったかたは、ぜひアクセスしてみてください。
1996年にゲームボーイで発売された第二弾『風来のシレンGB～月影村の怪物～』は、本書のすぐ後にあたる話です。人身御供の習慣の残る月影村に、ただ独りでたどり着いたシレンは、いけにえに捧げられようとしているフミという少女を助けるため、奮闘します。この作品は、今ではインターネット版のパソコンソフトとして、新要素満点のニュー・ヴァージョンを楽しむことができます。
三作目は、2000年にNINTENDO64で出された『風来のシレン2～鬼襲来！シレン城！～』です。時間をさかのぼって、十歳のシレンの活躍を描いています。すでにひとかどの風来人として、語りイタチのコッパとともに旅をするシレンは、鬼の襲撃に悩まされるナ

タネ村の危機を解決します。女剣士アスカや、しゃべるタンスのマーモをはじめとするノン・プレイヤー・キャラクターが豪華に登場して来ましたし、シレンの初恋や、現在まで引き継がれる縞合羽、ガイバラとの因縁も始まりました。

続けて2001年、ゲームボーイカラーで『風来のシレンGB2～砂漠の魔城～』がお披露目されました。急激な砂漠の拡大と、魔城の領主の変貌に怯える城下町イルパの人々を目にしたシレンは、その原因究明に乗り出します。シレン二十三歳の出来事であり、懐かしいお竜、ペケジ、ガイバラ、マーモなどとの再会が待っていました。

翌2002年にドリームキャストで発表された『風来のシレン外伝～女剣士アスカ見参！～』は、三作目の『風来のシレン2～鬼襲来！シレン城！～』の直後にあたるエピソードです。女剣士アスカが、川に流れる毒に苦しむ十六夜の里でコッパと再会し、その真相を知るため、モンスター退治を生業とする忍者の住む鋼賀城へ行きます。現在、新たなダンジョンなどの追加がなされたＷｉｎｄｏｗｓ版が販売されているため、手軽に楽しむことができます。

歴戦の風来人たるシレンは、すでに一作目から、生半可なモンスターでは太刀打ちできないほどの強さを誇っていました。それでいて好奇心が強く、純粋さを兼ね備えているため、旅の神クロンの風の導くまま、いろいろな事件に首を突っこんでしまうのは、みなさんもご存知の通りです。

今回、こうした英雄的なシレンを描くのに、章ごとに視点者を変えるという手法をとりました。この方法には、ほかの人物の内面を深く語

ることができるという側面もあり、各キャラクターのファンのみなさんに、ご満足いただければ嬉しい限りです。

原作ではふれられていませんが、未公開資料には、お竜が風来人となった理由があげられていました。このノベライズでは、それを活かしています。唯一のオリジナル・キャラクターとして、山賊の〝女子高生〟頭目である〝お鷹〟を登場させたのも、お竜の過去と原作とをつなぐための、橋渡しが必要だったからです。

一方〝お鷹〟の配下のハッタリは、性格づけはしましたが、改心や爆弾好きなところまで含めて、未公開資料が元になっています。そのハッタリと、マユツバ、イカサマが〝こばみ谷の三悪人〟と呼ばれている設定もそうです。

こうした貴重な資料の数々を惜しみなく提供してくださった、チュンソフトの出版事業本部のみなさんには、感謝の言葉もありません。小説化をまかせてくださった編集の斉藤睦志さんと田中淳人さんには、お世話になりっぱなしでした。

素晴らしい世界を快く提供していただいた中村光一社長と、シレンのディレクターである冨江慎一郎さんには、頭がさがる思いです。おふたかたからは、原稿に関して貴重な意見をたくさんいただきました。それがなければ、この作品は、もっとつまらない、原作とはかけ離れたものになっていたでしょう。

おなじみの長谷川薫さんからは、オリジナル・キャラクターのデザインを含む表紙やピンナップを、イラストレーターの長田馨さんからは多くの魅力的な挿絵をいただきました。作者

一同、それにはげまされるように、執筆にはげんだものです。
そのほか、支援していただいたすべてのみなさんに、この場をお借りしてお礼もうしあげます。ありがとうございました。

さて疾風のごとくテーブル・マウンテンを駆け抜けたシレン。次はどんな風を吹かせてくれるのでしょうか？　ご期待ください！

君の小説が出版されるチャンス！

第1回 チュンソフト小説大賞

●期間　2004年4月1日（木）募集開始
2004年12月31日（金）締め切り（当日消印有効）
2005年2月結果発表
受賞作品は同年にチュンソフトより書籍として出版されます。

●募集ジャンル
ミステリー／ホラー部門
SF／ファンタジー部門

●賞品（両ジャンルともに）
金賞：記念品＋副賞50万円　1名
銀賞：記念品＋副賞30万円　1名
銅賞：記念品＋副賞10万円　1名
奨励賞として記念品＋5万円を進呈　最大2名

＊該当する作品がない場合は「該当者なし」といたします。
＊出版された書籍に関しましては所定の印税の支払いが行われます。
また、書籍出版のほか、作品をもとにしたゲーム化の可能性もあります。
＊受賞作品の著作権は、チュンソフトへ帰属します。
応募作品（落選作）に関しては作者の方へ帰属します。
ゲーム化等、他メディアでの展開に関しましては、別途御相談いたします。
＊応募された作品の返却はいたしませんのでご了承下さい。

●応募・参加資格　不問

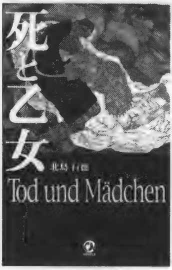
●提出方法等
文字量：ワープロ原稿40字×40行で、100枚～120枚の長編作品に限ります。
※手書きの場合は400字詰め原稿用紙350枚～450枚
未発表の作品で、日本語で書かれたオリジナルに限ります。
複数作品の応募可能です。連名およびユニット等複数の人間による共作も可です。
郵送のみで受け付けます。
データの場合はタイトルに拡張子.txtを付けたテキストデータで。
アプリケーションソフト特有の保存形態（一太郎等）は不可とさせていただきます。
フロッピーディスク等の媒体に保存したデータと、出力した原稿を同封してください。
<必須>各作品に800w程度の粗筋を必ず添付してください。
作品タイトルは必ず記入して下さい
作品には、住所／氏名／ペンネーム／年齢／職業略歴／電話番号／
携帯電話番号（所有者）／メールアドレス（所有者）を必ず記入してください。

●作品送付先
〒160-0022　東京都新宿区新宿6-24-20　Welship東新宿10F
株式会社チュンソフト　出版事業本部
「第１回チュンソフト小説大賞」係

●結果
一次審査／二次審査／最終審査を経て発表
一次審査を通過した作品名（応募数によっては二次審査）はHPにて公開します。
また、各賞の結果に関してはホームページにて告知します。
※作品の成否に関しまして、問い合わせはお受けいたしません。

チュンソフトノベルズ既刊案内

「3年B組金八先生　伝説の教壇に立て！」オリジナルノベルズ



死と乙女
Tod und Mädchen
北島行徳著
新書判
定価924円（税込）

怪！　サクラ中学七不思議
檜木田正史著
新書判
定価924円（税込）

アンソロジー 放課後の方程式
北島行徳／長井知佳／
黒崎薫／桑原裕子著
新書判
定価998円（税込）

「かまいたちの夜シリーズ」オリジナルノベルズ

あなただけの
かまいたちの夜
B6判
定価714円（税込）

あなただけの
かまいたちの夜 2
A5判
定価1260円（税込）

かまいたちの夜2
オリジナルノベルズ
三日月島奇譚
我孫子武丸／田中啓文／
牧野修著
A5判
定価1260円（税込）

「かまいたちの夜２」のシナリオ
担当作家たちが描く恐怖！

三人のゴーストハンター
国枝特殊警備ファイル
我孫子武丸／田中啓文／牧野修著
A５判　定価1260円（税込）

不思議のダンジョン2
風来のシレン
●スーパーファミコン
●1995年12月1日発売
●希望小売価格12390円（税込）

秘境こばみ谷のテーブルマウンテンに伝わる伝説に、風来人シレンと語りイタチのコッパが挑む！

不思議のダンジョン
風来のシレンGB　~月影村の怪物~
●ゲームボーイ
●1996年11月22日発売
●希望小売価格4095円（税込）

旅の途中、コッパとはぐれたシレンは、月影村という村に立ち寄る。だが、その村には恐ろしい秘密が……。

不思議のダンジョン
風来のシレン2
～鬼襲来！シレン城！～
●NINTENDO64
●2000年9月27日発売
●希望小売価格7140円（税込）

まだシレンが子供のころ。ふと立ち寄ったナタネ村を鬼の襲来から守るため、村に城を造ることに……！

不思議のダンジョン
風来のシレンGB2
～砂漠の魔城～
●ゲームボーイカラー（アドバンス対応）
●2001年7月19日発売
●希望小売価格4725円（税込）

青年のシレンが、砂漠にそびえ立つ魔城を舞台に戦いを繰り広げる。シリーズ初となる通信機能を搭載!!

i 風来のシレン

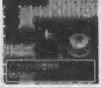
「風来のシレン」のi-アプリ版！入るたびに地形、落ちているアイテム、モンスターの出現位置などが変わり、遊ぶごとに新鮮な気持ちで楽しめる不思議のダンジョン！詰め将棋のような緊張感あるゲーム特性ももちろん踏襲しているぞ！

●好評配信中
●対応端末：505 is以上、FOMA900 i 以上
●料金：月額315円

i-シレンへのアクセス方法
i Menu➡メニューリスト➡ゲーム➡ゲーム1➡ロールプレイング➡i 風来のシレン

900 i 専用版でますます面白さパワーアップ！

◆風来救助隊
ゲームオーバーになっても全国の他のプレイヤーに助けてもらえる！パスワードを設定して救助者を限定することも可能。アイテムやメッセージの交換もOK！



◆印合成
武器や盾、腕輪といった装備品ついた印と呼ばれる様々な特殊能力を合成して、強力なアイテムを作れる！

そのほかにも新要素が盛り沢山！

風来のシレン関連商品

不思議のダンジョン

風来のシレン　～月影村の怪物～

インターネット版

●windows98、2000、Me、XP対応
●2002年12月20日発売
●定価：オープン価格

シリーズ第二弾に当たるGB版をPC版として移植。インターネット対応により、ランキングや「風来救助隊」などのシステムが新たに加わった！

不思議のダンジョン　風来のシレン外伝

女剣士アスカ見参！

for windows ベストプライス版

●windows98、2000、Me、XP対応
●2004年2月27日発売
●定価：オープン価格

シリーズ最新作。DC版をPCに完全移植したうえ、新ダンジョンや新秘技、新アイテムも加わった。インターネット対応のコンテンツも盛り沢山!!

チュンソフト20周年記念作品

チュンソフトゲームミュージック グレイテストコレクション

●2004年12月15日発売
●定価：3200円（税込）
●品番：WWCE-31064-5
●発売：ウェーブマスター
●販売：エイベックス・ディストリビューション

「ドアドア」「ニュートロン」「弟切草」「かまいたちの夜」「街」「ネットサル」「３年Ｂ組金八先生」のBGMをオリジナル音源で収録した２枚組！

風来のシレン20th スペシャルコレクション

●2004年12月15日発売
●定価：3990円（税込）
●品番：WWCE-31061-3
●発売：ウェーブマスター
●販売：エイベックス・ディストリビューション

シリーズ１作目から最新作「アスカ」まで初の音源化の「風来のシレン」サウンドトラック。オリジナル音源を完全収録した３枚組で登場！

CHUN SOFT NOVELS

風来のシレン　ノベライズ
黄金郷アムテカに舞う花
2004年12月15日　初版第1刷発行

著　者●大原広行　健部伸明

発行人●中村光一

発行所●株式会社チュンソフト
〒160-0022　東京都新宿区新宿6-24-20　Welship東新宿10F

印刷所●大日本印刷株式会社

©2004 CHUNSOFT／すぎやまこういち

本の注文や販売に関するお問い合わせ
出版事業本部
TEL：03-5272-1741
FAX：03-5272-1742

Printed in Japan ISBN 4-924978-44-2 C0076
●乱丁本、落丁本などの不良品はお取り替えいたします。
●本書の内容を無断で複写（コピー）複製・転載することを禁じます。

本書に関するアンケートを下記チュンソフトホームページにて
実施しております。ぜひご協力ください。
www.chunsoft.co.jp

CHUN SOFT

おおはら・ひろゆき
大原広行
1980年4月26日　福島県生まれ
作家。ゲームシナリオライター。主著書に『ゴーストと出会う夜』『カエルになった王子様』『真・女神転生:悪魔辞典』があり、《幻獣大全》シリーズのチーフ・アシスタントを務める。ゲームシナリオでは『碇シンジ育成計画』のタナトス＆パトス編を担当。

たけるべ・のぶあき
健部伸明
1966年12月3日　青森県生まれ
作家。ゲームディベロッパー。日本アイスランド学会所属。代表作に『幻想世界の住人たち』1＆2、『虚空の神々』《幻獣大全》、『甲冑の乙女』、ゲーム監修『トーキョーN◎VA:The 2nd Edition』、ゲームシナリオ『まほろまてぃっく☆あどべんちゃー』『碇シンジ育成計画』などがある。

ISBN4-924978-44-2
C0076 ¥950E
定価：本体950円+税
9784924978447
1920076009501

"黄金郷"の噂を耳にした、風来人シレンと語りイタチのコッパ。
さまざまな憶測が飛ぶなか、
溢れる風来人魂が疼き出したシレンたちは、
さっそく噂の真相を確かめることにする。
個性豊かな仲間たちとの旅の中で
旅の神クロンが用意する答えとは……!?

おおはら・ひろゆき
大原広行
1980年4月26日　福島県生まれ
作家。ゲームシナリオライター。主著書に『ゴーストと出会う夜』『カエルになった王子様』『真・女神転生:悪魔辞典』があり、《幻獣大全》シリーズのチーフ・アシスタントを務める。ゲームシナリオでは『碇シンジ育成計画』のタナトス＆パトス編を担当。

たけるべ・のぶあき
健部伸明
1966年12月3日　青森県生まれ
作家。ゲームディベロッパー。日本アイスランド学会所属。代表作に『幻想世界の住人たち』1＆2、『虚空の神々』《幻獣大全》、『甲冑の乙女』、ゲーム監修『トーキョーN◎VA:The 2nd Edition』、ゲームシナリオ『まほろまてぃっく☆あどべんちゃー』『碇シンジ育成計画』などがある。

風来(ふうらい)のシレン
黄金郷アムテカに舞う花

CHUN SOFT
NOVELS

風来のシレン　黄金郷アムテカに舞う花

著
大原広行
健部伸明

CHUN SOFT

CHUN SOFT
CN
NOVELS

風来のシレン 黄金郷アムテカに舞う花

大原広行
健部伸明

CHUN
SOFT